

Fate/apocrypha La Divina Commedia

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

万能の願望機である聖杯――

聖杯を求めて最後の一人まで戦う聖杯戦争。だがこの聖杯戦争は何かが違っていた。

フランスのパリに住む少女、レティシアもある役割でこの聖杯戦争に参加する筈だったが、思いもよらぬ妨害が入ってしまう。

これはサーヴァントの物語ではない――

これはマスターの物語ではない――

そう……これは――

俺が主役だ！

目次

第一話	少女の旅立ち	1
第二話	始まる聖杯大戦	10
第三話	赤い叛逆	21
第四話	地獄の入り口	32
第五話	シャルルマーニュのパラディン	44
第六話	片鱗	55
第七話	天魔失墜	66
第八話	動き出す黒幕	77
第九話	我が名はジャンヌ・ダルク	89
第十話	バンパイアハンター・ダンテ	101
第十一話	嘲笑	113
第十二話	悪魔の力	124
第十三話	騎士と女帝と	136
第十四話	塗り替える伝説	147
第十五話	大聖杯の行方	158
最終話	英雄	170

第一話 少女の旅立ち

これはサーヴァントの物語ではない——

これはマスターの物語ではない——

そう……これは——

／＼／

フランスの首都であるパリ。既に日は沈み、月光と星々が夜空を照らす。

築五十年にもなる学生寮、一度はリフォームされて綺麗にはなっているがどこからか隙間風が入って来る。

十七歳になる少女、レティシア。水色のネグリジェに袖を通す彼女は腰まで伸びるブロンドに櫛を通し終わると床に片膝を付いて両手を握り合わせた。

静かに、ゆつくりと、彼女は唇を動かす。

「主よ……お導き下さい……」

『私には誰かを導くなどと言う事はできませんでした。それでも今はアナタの体が必要なのです。わかってくれますね?』

「はい。アナタ様の役に立てるのなら本望。どうぞ使ってください。私の——」

隙間風が更に強くなる。空気の流れが甲高い音を鳴らし、そして部屋の扉を内側からこじ開けた。

「な、なに!?! 只の風?」

『いいえ、違います。これは……悪魔』
「悪魔……」

空気に溶け込んだように透明な、それでいて禍々しい魔力を放出する相手。それは人間の心の奥底にまで忍び込み植え付ける。決して消えない恐怖を——

「うきやキャキャキャッ! とても綺麗だ。純粹な願い……その願いを叶えてやる」

『その声を聞いてはなりません! レティシア、逃げなさい!』

「純粹で曇りのない願い……取り込ませろ……」

地底から響くように重く冷たい声。悪魔は耳元で囁くようにレティシアを誘惑し、その手を彼女に伸ばした。

普通の女学生ならこの瞬間に引き込まれていただろう。けれども彼女は普通ではなかった。心の中から聞こえる声に従い立ち上ると一目散に走る。

前のめりになりながらも部屋の扉を開けて全力で駆けた。

「あの声は何なのです!？」 本当に悪魔が存在するのですか?」

『アナタの体を依り代にして私が召喚されようとしているのです。有り得ない話ではありません。それよりも……』

「あひゃひゃひゃひゃッ! 叶えさせろ……!」

『決して後ろを振り返ってはなりませんよ。とにかく今は逃げるしかありません』

自室を出たレティシアは学生寮の廊下を駆け抜ける。その後ろからは現れた悪魔は壁や床をすり抜けて追い掛けて来ていた。悪魔の声には耳を傾けず、必死に逃げるしかない。

けれども悪魔はどこまでも追い掛けてその手をレティシアに伸ばす。

「まだ付いて来るのですか? 主よ、アナタの力で……!」

『無理です。召喚が完全ではありません。私の力はまだ使えません』

「そんな!?!」

階段を下り、学生寮の出入り口の扉へぶつかると同時にドアノブを握る。開けると同時にまた走り出すが満足に前も見えない状況で誰かにぶつかってしまった。

「ぐ、ぐめんなさい!」

「ああ、心配するな。お嬢ちゃん」

「うきやキャキャキャッ!」

悪魔の囁き声はまだ聞こえて来る。息を呑み、額に汗を滲ませる彼女は目の前の男に叫ぶ。

「ここは危険です! アナタも早く逃げて下さい!」

「言っただろ? 心配するなっとな」

「何を言っているのです! すぐにでも悪魔が――!」

レティシアは振り返ってしまった。彼女のサファイアの瞳に写るのは伸ばされた悪魔の右手。その指先がうら若き少女の肌に触れようかとしたその時、銃のスライドを引くガチャリと言う音が聞こえた。

「Bang」

甲高い銃声が響く。空の薬莖がアスファルトに落ち、銃口からはゆるらと白い煙が上がる。

次に聞こえて来るのは悪魔の囁き声ではなく叫び声。

「グギャアアアアッ！ 貴様は……貴様はアアアッ！」

「そう言えば願いを叶えてくれるんだろ？ 俺の願いも聞いてくれないよ」

「忘れもせん！ 忘れる筈もない！ 逆賊スパード！」

「オイオイ、俺はそんな事聞いてねえぜ？ 俺が聞きたいのは——」

彼が言い終える前に悪魔は牙を剥く。肉を引き裂き魂を喰らう牙、悪魔は人間を殺すべく誘惑するのではなく絶対なる恐怖を向けて来た。

けれども彼はそんな事で動揺などしない。

右手に握るのは巨大な銀色の銃。そして左手で腰のホルスターから抜くのは巨大な黒い銃。ピアノの鍵盤のような色、エボニー・アンド・アイボリーを握る彼は銃口を突き付けるとトリガーを引いた。

「そうか、だったら自分でやるしかないな。ぶっ飛びな！」

激しいマズルフラッシュと銃声が連続して響き渡る。マシンガンのように発射される弾丸は悪魔の体を貫き穴だらけにしていく。

呆然とするレティシアはその光景に目を見開く事しかできない。

「ぐギャアアアあああッ!?!」

「お前が俺の願いを叶えてくれたら楽に終わるんだけどな」

「逆賊スパード！ 今までに葬られた同胞達の仇！」

「それとな、俺はオヤジじゃない。俺はその息子、ダンテだ。覚えときな」

「ガアアアッ！」

再び彼に、ダンテに牙を向ける悪魔。危機的状况を前にしてもダン

テはヘラヘラと笑っている。両手に握る銃をホルスターに戻すと背中に背負う大剣に手を伸ばした。

一メートルを軽く超える巨大な銀色の剣。鏢に当たる部分には骸骨の彫刻がなされている。その大剣をダンテは片手で軽々と持ち、向かって来る悪魔に目掛けて勢い良く袈裟斬り。

鋭い切っ先が悪魔の体を斬り落とそうとした瞬間、悪魔は煙となつて消えた。

「あハハハははアアアアツ！ 忘れん、決して忘れはせんぞ！ 我ら同胞の恨み、必ず晴らさせて貰う！ アキヤキヤキヤキヤツ！」

「チツ、逃げやがった。折角パリにまで来たのに収穫ゼロかよ」

ダンテは大剣を再び背負うとこの場を後にしようとする。その時になつてレティシアはようやくやく落ち着いて状況を理解できた。

目の前に立つ男、ダンテ。

身長は一九〇センチはあり、全身を真っ赤な服で包んでおり更に赤いロングコートまで着ている。それだけでも特徴的なのに頭髪は銀色とこのような男は見た事がない。

レティシアは背を向ける彼に向かって声を掛けた。

「あの、待って下さい！ ダンテさん、アナタは一体……」

「只のしがない便利屋だよ。それよりも子どもはもう寝る時間だぜ？

さっさと部屋に戻りな」

「便利屋……ですか？ でしたら一つ、仕事を引き受けてはくれませんか？」

「あん？」

第一話 少女の旅立ち

雲ひとつない青空からは朝日がさんさんと降り注ぐ。街の一角にある喫茶店の席に二人は居た。少女レティシアと便利屋ダンテ。

レティシアは白いワイシャツとネクタイ、紺色のジャケットとスカートを身に纏い、ダンテは昨夜と変わらず真っ赤な服とコートを着ている。

そんなダンテの背格好に他の客は興味の目線を向けるが彼はそんな事は一切気にしていない。そんな彼の前でレティシアはフランスパンを手で摘み、ダンテは小麦粉で練られた四角い生地を食べている。その隣には銀色の大剣を収めたギターケース。

「ピザとはちよつと違うがなかなか美味いな」

「ですからタルトフランベです。フランスでは伝統的な郷土料理なんですよ」

「わかったわかった。タルトフランベね」

「本当にわかつているのですか？ それよりも昨日のお話、引き受けでは貰えませんか？」

「ああ、アレな？ ダメだ」

「どうしてです！」

依頼を拒否するダンテにレティシアは前のめりになりながらも彼に訴え掛ける。だがダンテは素知らぬ顔で料理を口に運ぶ。

「気が乗らん。それに俺の仕事は週休六日だ。依頼したいならまた来週店に来な」

「店……どこなのですか？」

「アメリカのスラム街だよ。言っとくが高いくらな」

「そんな!?! それでは間に合わなくなる……」

落胆して俯くレティシア。彼女の表情を見て流石のダンテも少しマジメになった。それでも片手にはタルトフランベの生地を持ちながらだが。

「あのな嬢ちゃん。昨日悪魔に襲われたのは偶然だ。ルーマニアに何の用があるかは知らんが、ボディガードを頼むなら俺じゃなくても良いだろ？ そもそもそんなのが必要とも思えんが」

「それは……はい、はい。そうですね、わかりました」

「それとな、ルーマニアに行くよりもまず病院に行った方が良いと思うぞ。誰と話してる？」

「ダンテさん、アナタに全てをお話します。ですからお願いします。ルーマニアに着くまでの一週間で良いのでボディガードの仕事を引き受けてはくれませんか？」

まだ幼さの残る少女からの真剣な眼差し。ダンテは最後の一枚を口に入れると今度こそ話を聞く体勢になった。

「じゃ、聞かせて貰おうか。何で俺に仕事を頼む？」

「先程もそうですが私には声が聞こえます。かつてのフランスの英雄、ジャンヌ・ダルクの声が」

「ふう……」

大きく息を吐くダンテはその席から立ち上がろうとする。

「待って下さい！　せめて最後まで話を聞いて下さい！」

「で、その英雄様はお嬢ちゃんになんて言ってるんだ？」

「聖杯……万能の願望機と呼ばれる聖杯を求めて戦う儀式の事を聖杯戦争と呼びます。その聖杯戦争には七人のマスターと呼ばれる魔術師と、マスターに使えるサーヴァントと呼ばれる英霊が召喚されます。七人のマスターは最後の一人になるまで戦い、生き残った者だけが聖杯を手にする事ができる。その聖杯戦争が始まるようとしているのです」

「なるほどね。お嬢ちゃんはその魔術師って訳か」

「違います」

思わず肩透かしを食うダンテ。けれどもレティシアは構わず話を続ける。

「今の私は魔術師でも何でもありません。只の普通の人間です。ダンテさん、これから始まるうとしているのは聖杯戦争ではありません。聖杯大戦……十四人のマスターとサーヴァントが戦う今までに類のない聖杯戦争です」

「ああ……で、魔術師でもない嬢ちゃんが何でそんな戦争に参加するんだ？　つとその前に」

立ち上がるダンテはギターケースを片手に店から出ようとする。レティシアも急いでその後続くが、店の入り口を出ようとして店員に呼び止められる。

「ちよつとお兄さん！　会計まだだろ？」

「そうだったな。あ、この娘が払う」

「ちよ、ちよつとダンテさん!?　ご自分の分は？」

「依頼料から割り引いてやるから。頼むよ」

「本当でしょうね？ わかりました……」

渋々カバンから財布を取り出すレティシアはレジの店員に二人分の料金をピツタリ支払う。レシートを受け取ると二人は店を出て街を横並びで歩き始める。

「食い終わったし歩きながら頼むぜ。取り敢えず、飛行機のチケットを買いに空港にでも向かうか」

「飛行機はダメです。私は目を付けられています。飛行機では逃げ場がありませんし、襲われれば大勢の犠牲者が出てしまいます」

「マジかよ、車で行くってか？ ここからルーマニアまで何時間掛かるか知ってるか？」

「ですがそれしかありません。申し訳ないのですが……」

「ったく……で、車は？」

「はい？」

「だから車だよ。まさか……ハアアア」

大きいため息を付くダンテ。二人が向かう先はルーマニアではなくまずはレンタカー会社だった。

／／／

好調に動くエンジンからは甲高い音が響きマフラーから勢い良く排気ガスを放出する。コンバーチブルの赤い車を運転するダンテは気持ちの良い風を受けながら道路を一直線に走らせていた。

その隣の助手席でレティシアは不満げに財布を握り締めている。

「本当にこの車でないといけなかったのですか？ もつと安い車は幾らでもありました」

「エコカーなんてクソ喰らえだ。エンジンから伝わる振動と風を感じてこそ車の価値がある。男にしかわからない美学ってもんだ」

「美学はわかりました。ですがその分の料金は本当に割り引いてくれるのでしょうか？ そもそも依頼料は幾らなのですか？」

「まあそんな話はどうでも良いじゃねえか。それよりもあの時の話の続きを聞かせてくれ。聖杯大戦のな」

「もう、わかりました。お父さんからの今月の仕送りが……」

ボソリと言った一言はダンテの耳にも届いていたが、彼は何も言わずにハンドルを握ったまま。

「これから始まる聖杯大戦に召喚されるサーヴァントは十四体ともう一人、ルーラーと呼ばれるサーヴァントが居ます。それが私の心の中に聞こえる声、ジャンヌ・ダルク。彼女の説明ではルーラーの役割は聖杯大戦を管理するサーヴァントだそうです」

「だったらさっさと召喚しちまえば良いじゃねえか。そのジャンヌ・ダルクを」

「そのつもりだったのですが、先日の悪魔の襲撃のせいで失敗してしまいました。彼女が言うには、再び召喚の儀式を整えるのに一週間は必要だと」

「だったら一週間大人しく家で待ってるよ。急いでルーマニアまで行く意味があるのか？」

「既にサーヴァントは十四体召喚されています。聖杯大戦はいつ始まってもおかしくありません。彼女はルーラーとしての役割を真つ当する為にもせめて現地の状況を把握したいと。この大戦は二つの陣営に分かれています。赤の陣営と黒の陣営。その赤の陣営のマスターはルーラーを狙っています」

「管理するだけなんだろう？」

「その筈ですが……ですが彼女の話では召喚されているサーヴァントの一体がこちらに向かっていると。今の私は本当に普通の人間です。もしもサーヴァントと対峙してしまえば絶対に勝てません……」

「なるほどね。一週間の間、ルーマニアに向かいつつ召喚された英霊様からお嬢ちゃんを守れてって訳か」

「悪魔と戦えるだけの力を持ったアナタです。サーヴァントに勝つことは無理でも私を守れることはできるのでと考えた次第です。ルーマニアにさえ到達すれば両陣営が構えています。私だけを狙ってサーヴァントを動かすのも難しくなります」

クラッチを踏み込みシフトレバーを操作するとダンテはアクセルペダルをベタ踏みする。エンジンからは轟音が響き加速する車体にダンテとレティシアの背中がシートにへばり付く。

「ちよつとダンテさん!? スピードを出し過ぎです! スピード違反ですよ!」

「そう言う事は早く言えよな。ルーマニアに着いたらあとは観光に洒落込もうぜ!」

「遊びではないのですよ? ダンテさん!? ダンテさん!」

吹き付ける風にブロンドをなびかせながらレシティアはシートベルトを握り締める。ダンテのノンストップの全力運転のお陰でルーマニアまで通常よりも早くに到着する予定だ。

けれどもその最中、待ち構える存在がいる。赤の陣営のサーヴァント。

第二話 始まる聖杯大戦

コンバーチブルの赤い車で走り始めてもう半日。何度目かの給油を終えてダンテは再びハンドルを握る。助手席に座るレティシアはいつの間にか寝てしまっていた。

「あと十年もすれば良い女になるのにな。そうすれば最高のドライブなんだが贅沢は言えないか」

キーを捻りエンジンを掛けるとシフトレバーを入れて車を走らせる。夜道のヘッドライトの先に写るのはどこまでも続くアスファルトだけ。周囲に視線を向けても見えるのは微かな星空だけ。

夜の冷たい風を浴びながら車を走らせるダンテはいつものようにフルスロットルで飛ばそうとするが、不意に右手の甲に熱が伝わる。

ちらりと見てみると目を覚ましたレティシアがそこに居た。

「ダンテさん、車を止めて引き返して下さい」

「目的地までの最短ルートはこの道だぜ？」

「それでもです。私の中のジャンヌ・ダルクが言っています。引き返せと。でなければ対峙する事になります」

「お嬢ちゃんを狙うサーヴァントか？」

コクリと頷くレティシア。それを見てダンテはシフトレバーを上げアクセル全開で突き進んだ。

「私の話を聞いていなかったのですか!? この先にはサーヴァントが！」

「逃げるのは俺の趣味じゃないんでね。それにどの道逃げられない。感じるぜ、奴の気配」

「え!?!」

ダンテの言う通りだった。ヘッドライトが照らす道路の更に先、徐々に近付いて来る人影をレティシアも見付ける。広い道路のど真ん中で大槍を担ぎながらこちらを睨み付ける存在を。

黄金の鎧とダンテと同じ銀髪、そして大槍。その姿から召喚されるサーヴァントに当てはめられるクラス、ランサーだと認識できた。

「話には聞いていた本物のサーヴァント……ダンテさん、やはり危険

です！ 今からでも——」

「あちらさんもこっちに気が付いてるよ。それに今更逃げた所で間に合わない。安心しろって、お嬢ちゃんには指一本触れさせないからよ」

「ですから……」

言っているのと車は減速しヘッドライトでランサーの姿を照らすと完全に停車した。間近で見るランサーの姿にレティシアは恐怖し体が震える。

それは向けられる鋭い視線からだけではない。始めて悪魔と出会った時と同じ、人間では絶対に勝てないと言う本能的な物を感じる。

けれどもダンテは始めて出会うサーヴァントを前にしてもいつもの態度を崩さない。

「コイツがサーヴァント……かつての英雄様か」

「貴様は……」

「オイオイ、喋れるのか？ 蘇ったって言うからてつきりゾンビみたいなもんだと思ってたのによ」

「貴様に用はない。今すぐこの場を立ち去るなら見逃してやる」

「さすが英雄様だ。でかい口を叩くじゃねえか。でもオツムが少し足りてないようだな。この道路は車が優先だぜ？ お前がなんて名前の英雄かは知らないが、少し勉強して来るんだな」

「二度目はない。即刻この場から立ち去れば見逃してやる。俺の目的はルーラーの排除だけだ」

「悪いな。このお嬢ちゃん俺がエスコートするって約束なんだよ。パーティーでダンスする相手は他を当たってくれ」

「警告はした。死ね……」

第二話 始まる聖杯大戦

大槍を構えるランサーは地面を蹴るとまるで弾丸のような速度で突進して来た。突き出す槍先は車の赤いボディに直撃する筈が、ぶ

つかりあつたのはダンテが握る大剣の切っ先。

互いの獲物が激突し衝撃波で空気が歪む。

「やれやれ、話の通じねえ英雄様だ」

「俺の攻撃を受け止めるだと？ 貴様、本当に人間か？」

「只の人間かどうか……試してみるか？」

「面白い……乗ってやる」

ランサーは戦闘態勢に入った事で魔力が爆発的に上昇する。レティシアは内なるジャンヌ・ダルクを通してその事を感じするが、ダンテは依然として余裕の態度を崩さない。

「ダンテさん！ 人ではどうやってでもサーヴァントに勝てません！ 逃げてー！」

「オイオイ、ようやく英雄様が話に乗ってくれたんだぜ？ こんな奴と戦うチャンスなんて滅多にねえよ」

「冗談を言っている場合ではありません！ 今すぐ——」

広い道路に立つ二人。レティシアの声はランサーの先制攻撃によりかき消される。

ランサーは大槍を連続してダンテの胴体目掛けて突く。その一突き一突きが空気を斬り裂き音速で迫るが、ダンテも右手に握る大剣で連続突きをお見舞いした。

そのスピードはランサーに引けを取らず、互いの獲物が再び何度もぶつかりあい激しい火花を散らす。

「まさか英雄様の力がこの程度だなんて言わないよな！」

「俺の攻撃に付いて来る？」

「勝負は始まったばかりだ。もっと楽しもうぜ！」

ダンテは最後の1突きを繰り返す。それはどの一撃よりも鋭く重たく、大槍で攻撃を受け止めるランサーはバックステップして数メートルだけ距離を離す。

すかさず走って距離を詰めるダンテは大剣で下から上に大きく斬り上げた。

「逃げるなよ？ 英雄様の名が泣くぜ」

「逃げるだと？ あり得ん」

「そうこなくっちゃ」

銀色の大剣と金色の大槍とが激突する。ランサーは柄でダントの攻撃を受け止めると瞬時に反撃へと移る。

岩石をも一撃で粉碎するランサーの槍先がダントの頭部、心臓を目掛けて繰り出された。サーヴァントでも戦闘力の低い者ならばこの時点で射抜かれているが、大剣を軽々と振り回すダントは簡単にこれらの攻撃を弾いた。

けれどもこの程度でランサーの猛攻は終わらない。地面を一蹴りすると三メートル以上は一瞬で飛び上がり、そのまま重力と合わさり強烈な突きをぶつけようとする。

「戦いつてのは剣を触り合うだけじゃないんだぜ。英雄様！」

「あれは……」

両手で腰のホルスターから銃を取り出すと上空から迫るランサーに狙いを定めてトリガーを引く。夜の闇に生える激しいマズルフラッシュ。それはまるでマシンガンのように止まらない。

発射される大口径の無数の弾丸。一直線にランサーに突き進むがもう少しの所で炎に阻まれる。大槍の先端から太陽のように燃え盛る炎、それが迫る弾丸を全て溶解させた。

「この程度で止められると思うな」

「悪いが止まって貰うぜ。車をぶつ壊されたら流石のお嬢ちゃんでも払い切れないだろうからな」

「車の心配をしている場合か？」

「俺を倒したいなら焼くよりもまずミンチにでもしてみなッ！」

そのままダントに向かって突撃するランサー。炎を纏う槍先にダントは再び大剣を両手で握り締めるをバットを振るようにしてフルスイングした。

二人の戦いを見ていたレティシアに届いたのはまずは光。ランサーの操る炎がダントの大剣により弾け、そして槍先と刃とがぶつかりあう激しい火花。

重量級の攻撃が衝突した事で発生する衝撃波が全方位に広がり彼女の乗る車のスプリングが軋みブロンドがなびく。

何秒か遅れて甲高い音が響き渡るとレティシアは思わず両耳を塞いでふさぎ込んでしまう。

「ぐうっ!? ダンテさん?」

もう一度前を見た時には二人の姿は見えなくなってしまっていた。けれども見えないだけでどこからか音は聞こえて来る。大槍と大剣とがぶつかる甲高い音が。

右を見ても、左を見ても、二人の姿は見えない。聞こえて来るのは上からだ。

「英雄様は空で戦った事があるか? 何事も経験だ。どうせ古臭い事しか知らないだろ? 教えてやっても良いぜ」

「必要ない。地の利がなからうと相手にとつて不足はない」

「そうかい? 俺に追い付いてくれるかな?」

見上げる先で繰り広げられる攻防。ダンテの振るう大剣とランサーの繰り出す大槍が幾度も激突する。

斬る、突く、斬る、突く。けれども互いに決定打は与えられないまま重力に引かれていく。人間離れした身体能力を持つ二人でも空を飛び続ける事などできはしない。

落ちて行く最中、ダンテは大剣を大きく振り下ろし、ランサーはこれを受け止めた。

「どうした? 慣れているのだろ? 空での戦いに」

「ああ、そうだな。だから……落ちるのはテメエだけだ」

ダンテはランサーの握る大槍の柄を足場にして更にジャンプした。幾らサーヴァントとは言え元は人間。初めての事に一瞬だけ対応が遅れてしまう。

目を見開く先、ランサーが見たのは反転して両手に銃を構えるダンテの姿。

「フオ~~~~!」

威勢の良い掛け声と同時に回転しながらマシンガンの様にエボニー・アンド・アイボリーを乱射する。頭上から迫る弾丸は正に雨の嵐。

けれどもランサーが動揺したのはその一瞬だけだ。高い戦闘能力

と培った経験が考えるよりも前に体を動かす。

大槍をプロペラのように高速回転させて迫る雨を全て弾き返した。

「俺にその武器は通用しない」

「流石は英雄様だ。だったらこれはどうだ！」

落下するランサーに狙いを定めダンテも大剣を振り下ろしながら急降下する。数刻前にランサーが繰り出した技と同様、重力が合わさった事で更に重たく威力が増す。

相手の頭部を叩き割るつもりで振り下ろされた大剣、それを受け止める大槍。

二人はもつれたまま地上へと落下して行き、アスファルトにヒビが入りクレーターが生まれる。その中央で攻撃を受け止めるランサーに依然ダメージは通っていない。

大槍を振るい、ダンテは空中で軽やかにバク転し地面に足を付ける。

二人の戦いは終わらない。互いに武器を構えて走り出すと再び空気を引き裂き、地を割る乱舞が繰り広げられた。

無数の斬撃が、無数の刺撃が、闇に火花を打ち込む。一進一退の攻防。

レテイシアはもはや口を挟む事すら許されず、只々二人の舞を見ているしかできない。

「凄いい……ダンテさん、あの人は一体……」

『魔剣士スパーダの息子……』

「え……知っているのですか？」

レテイシアの心の中に聞こえるジャンヌ・ダルクの声。彼女は知っている、かの悪魔の伝説を――

『二千年前、人々の平和が悪魔により碎かれようとしていた。それを阻止した悪魔であり英雄、魔剣士スパーダ。彼は正義の心に目覚め、闇の軍勢に立ち向かった。生前、私が聞いたおとぎ話です』

「おとぎ話？」

『ええ、現代の人では知らぬのも無理はない程に古いおとぎ話です。子どもの頃の私でも本気になどしていませんでしたし、天の声が聞こ

えるようになっててもそのような事は知り得ませんでした。主は平和を望み、私も祖国の平和を願って戦う日々。おとぎ話などにうつつを抜かす時間はありませんでした」

「でも、そのおとぎ話の存在が目の前に居る。スパルダの息子と言ったダンテさん。そのおとぎ話が本当だとしたら、ダンテさんは悪魔なのですか?」

『彼から悪魔の気配は感じ取れません。恐らく人間……ですがサーヴァント、それも三大騎士であるランサーと互角に渡り合える力を持つ事に説明が付きません。けれども今は私達の為に戦ってくれます。信じて良いでしょう』

「ダンテさん……」

見つめる先で二人の攻撃がかち合う。衝撃波が走り、一旦距離を取る両者。鋭い殺気を向けるランサー、ソレに対し依然として余裕の態度を崩さず口元に笑みを浮かべるダンテ。

大槍を構えるランサーは再び仕掛けるのではなく口を開いた。

「貴様、名は何と言う?」

「あん、名前だと?」

「我が名はカルナ、太陽神の子。強者と戦う事が我が本望。サーヴァントではないのに俺と対等に戦う貴様の実力に敬意を払う」

「そりやどうも。そこまで言うなら俺も教えてやるよ。俺の名前はダンテ」

「ダンテ……我が槍を恐れぬのなら掛かって来い」

「ビビるかよ」

全身から炎のように真っ赤な魔力を纏うランサーは必殺の一撃を繰り出さんと鋭い視線をダンテに向ける。一方のダンテも大剣を逆手に持つとヘラヘラとした態度を止め、握る大剣に魔力を流す。

大剣は持ち主であるダンテへ反応するように鏢の骸骨の瞳が赤く輝くと全体も赤黒く発光し始める。

互いに最強の一撃を繰り出そうと視線がぶつかり合い今正に放たれようとしたその時――

「行け、セイバー!」

突風が吹き荒れる。衝撃が走った。ダンテの物とは違う斬撃が両者の間に割って入る。アスファルトが砕かれ砂埃が舞う。

ジャンヌ・ダルクは感知し、レティシアは呟いた。

「二体目のサーヴァント……」

砂煙が晴れるとその姿が明るみとなる。

右手に握る剣、胸元と背中が大きく開いた銀色の鎧。肩まで伸びる灰色の長髪に胸に大きく刻まれた刻印。男は立ち上がるとその切っ先をランサーに向けた。

「お前は赤のランサーだな」

「そう言うそちらも、黒のセイバーだな。俺の前に現れたと言う事は、お前もルーラーが狙いか？」

コクリと頷く黒のセイバーと呼ばれる男。

唾然とするレティシアの元に現れた黒のセイバーのマスターが駆け寄って来た。

「ご無事ですか、ルーラー？」

「アナタは？」

「私は黒の陣営に属するマスター。名をゴールド・ムジーク・ユグドミレニアと申します」

目の前の男はダンテやサーヴァント達と比べてあまりにも小さい。カールした金髪、レティシアと同じくらいの身長。そして身にまとう白い制服を内側から広げる贅肉、腹は太鼓の様に出てしまっている。油ぎった顔、二重顎をブルブルと揺らしながらゴールドは話を続けた。

「我々が来たからにはもう安心です。赤のランサーよ！ 聖杯戦争を司るルーラーを排除しようなどと、これは究極のルール違反である！」

「否定はしない。だが黒の陣営のサーヴァントも現れたとなると作戦は中断せざるを得ないな。ダンテ、そして黒のセイバー、勝負は預ける」

言うところランサーは大槍を引き、体が光の粒子となって消えて行く。その場に立つのは剣を構えるダンテとセイバー。敵対する相手が居

なくなつては剣を取る必要もなく、セイバーは剣を鞘に戻しダンテも背に背負う。

「何だよ、折角良い所だったのに。オイ、お前もサーヴァントか？」

「如何にも。マスターの指示により、貴殿らを救済に参上した」

「必要ねえよ。お嬢ちゃんのエスコートは俺の仕事だ。お前はそこのオッサンと仲良くしてるんだな」

指を指すダンテに良い思いはせずゴルドは思わず怒気を孕んだ声を出す。

「私はオッサンではないわ！ それよりも誰なのだ貴様は？ サーヴァントと互角に戦うなどと」

「只の便利屋だよ。今はお嬢ちゃんをルーマニアまで連れて行く仕事の真つ最中だ」

「便利屋だとお？ ふざけているのか？ それよりも今は……」

ダンテから視線を切るとゴルドはレティシアに体を向ける。ランサーが言っていたように彼の目的も彼女、ルーラーの存在だ。

「ルーラーよ、お待ちしております。此度の聖杯戦争、死力を尽くして戦うと宣言致します」

「あ、あの……」

「所でどうです？ 我らが陣営、ユグドミレニア城に来ては頂けませんか？ 聖杯戦争の監視を行うのならユグドミレニア城よりも最適な場所はありません。どうか！」

自信満々に手を差し出すゴルド。けれどもレティシアはその手を握る事はなく、申し訳なさそうに答えるしかなかった。

「ゴルドさん、アナタは一つ勘違いをしています。今の私はまだルーラーではありません」

「ど、どう言う事ですか？」

「とある事情により召喚儀式が失敗してしまい、私はまだ普通の人間です。ルーラーとなるにはもう少し時間が掛かります」

「そのような事が……でしたら尚更、我らが城に来て頂いた方が安全です！ こちらにはサーヴァントだけでなくゴーレムとホムンクルスも居ます」

なんとか引き込もうとするゴールドだが、その間にダンテが割って入る。

「だとよ、お嬢ちゃん。このオッサンの話に乗るか？」

「だから私はオッサンではないわ！」

「いいえ、私はこのままダンテさんと行動を共にします。申し訳ないのですが、ゴールドさんの提案に乗る事はできません」

「そんな!? こんな男に護衛が務まるのですか？ それに——」

「完全ではありませんがルーラーとしての能力は少し使えます。ルーミアのトウリファスに入れば両陣営の状況はおおよそ把握できます。それにそちらの城に籠もれば聖杯戦争の平等性が損なわれると、私の中のルーラーが申しております」

「ぐぐうッ!？」

一度断られてしまえばこれ以上粘る事はできない。彼女はルーラー、聖杯戦争を司る者。下手に食い下がれば後にペナルティーを与えられるかもしれない。そうなれば聖杯を手にすると言う魔術師の悲願が遠退いてしまう。

悔しさに歯ぎしりを起こしながら、ゴールドはこの場を後にするしかない。

「行くぞ、セイバー！」

「御意」

ドシドシと重たい体重で地面を踏み付けながら離れていくドルトと彼に続くセイバー。ダンテは二人の背中を眺めながら車の運転席に飛び乗り、隣のレティシアにもう一度だけ問い掛ける。

「本当に良かったのか？ オッサンの言うように城に籠った方が安全だと思うがな」

「ダンテさん……この聖杯戦争は何かが違う」

「ジャンヌ・ダルクがそう言ってるのか？」

「はい、それが何なのかを確かめる為にもどちらかの陣営に肩入れする事は避けたいと」

「ふうん、俺は別にどっちでも良いけどな。まあ、オッサンとあの優男と一緒に動くくらいなら、お嬢ちゃんとのドライブの方が良いな。俺

の見立てだが十年もすれば良い女になる」

「またそんな冗談を……」

「いやいや、俺は女を見る目はあるんだ。お嬢ちゃんは絶対良い女になる」

「でしたらお嬢ちゃんと言う呼び方は止めて下さい。ちゃんとレテイシアと名前があります」

「言っただろ？　良い女になるのは十年後だってな。まだまだお嬢ちゃんだよ」

エンジンを掛けハンドルを握るダンテはボロボロになったアスファルトを避け車を走らせる。ヘッドライトが照らす道路の先はまだまだ長い。

第三話 赤い叛逆

ルーマニアのムレシユ県シギショアラ市。この街は世界遺産にも登録されており、近代的な建造物は一切なく、レンガやタイル、石畳で作られた旧市街の街並みを今でも保ち続けている。見上げた先にある時計塔は今でも時を刻み住民は古くも賑やかなこのシギショアラ市で平穏な毎日を過ごしていた。

そう、この街の平穏は突如として崩れてしまう。昨今、無差別殺人が発生しており犠牲者は十人を超えた。男も女も関係なく殺されていたが、二つだけ共通点がある。

一つは殺された人間の心臓がえぐり出されている事。もう一つは四人目以降に殺された人間は全て魔術師である事だ。犯人は普通の人間ではない。

そんな事はつゆ知らず、ダンテ達一行は長いドライブを終えてシギショアラの街に足を踏み入れた。

「良い街じゃねえか。観光にはピッタリだ」

「ですから観光ではないと……」

「わかってる。仕事はちゃんとやるよ。それよりも腹が減ったな。飯でも食おうぜ?」

「はあ、緊張感がないのですから。それとダンテさん、ご自分の分くらいはちゃんとお金を払って下さい」

「割り引いてやるって言ったろ?」

「絶対嘘です! 何度聞いても依頼料を教えてくださいえないじゃないですか!」

口論しながら歩くダンテとレティシア。二人は進んだ先で見付けたオープンカフェに立ち寄るとそれぞれに食事を取る。ダンテはいつもと変わらずチーズがたっぷり乗ったピザ。

「ルーマニアはちゃんとピザがあるんだな」

「そんな栄養が偏った物ばかり……」

「これが良いんだよ。それよりこれからどうするんだ? お望みのルーマニアには到着したぜ」

レティシアは摘んだティーカップをテーブルの上に置き、ダンテの顔を正面に見据えながら小さな口を開く。

「ジャンヌ・ダルクが言うには、トウリファスを目指して動くのが好ましいと。召喚の儀式が成功すればルーラーとしての能力が発動できます。ルーマニアの中心部からでも両軍の動きを十分に監視できる」
「なるほどね。お嬢ちゃんとのドライブをもう少し楽しめる訳だ」

「ダンテさんは本当に……ここからトウリファスまでも車で移動するのですか？」

「歩いて行く訳にもいかねえだろ。まあ、ここまですつ続けだったからな。今日は休憩して明日動くとしようや」

「そうですか。でしたら今日一日は休憩と言う事で」

細くきめ細やかな指を伸ばしティーカップの取手を摘むと静かに口元へ運ぶレティシア。中の紅茶を飲むと視線を左右に動かしウエイターにアイコンタクトを送る。

それを受けてレティシアの席にまで素早くやって来た。

「いかがなさいましたか？」

「紅茶のお代わりをお願いします」

「かしこまりました。少々お待ち下さい」

注文を受けて店内の厨房に向かうウエイター。レティシアが最後の一口を飲むと同時にダンテも最後の一切れを飲み込んだ。

「ふう、ならホテルの予約は頼むぜ。俺は少し用事ができた」

「用事とはなん——」

最後まで言い終える前に、既にダンテの姿は消えていた。右を見ても左を見ても、あれだけ目立つ格好をしているのに人混みの中に彼の姿は見当たらない。

一人残されてしまったレティシアはゆっくりとカップを置きウエイターがティーポットを持って来るのを待つ。

雲一つない青空、優しいそよ風。決してうるさくない人々の生活音に心安らぐ。椅子の背もたれに体を預けて少し眠ってしまおうかと考えてしまう程。

そのまままぶたを閉じようとした時、ある事に気が付く。

「全く……あッ!？」

／／／

石畳を闊歩するダンテはデビルハンターの嗅覚を頼りにある場所に向かつていた。進むに連れて人の数は減っていき、街の音も聞こえなくなってきた。

石とレンガで作られた建造物も見えなくなり、周囲には木々が立ち並び薄暗い雰囲気漂う。その先にあるのは死者の眠る場所。

数々の墓が建てられた墓地へ足を踏み入れ更に進むダンテ。その視線の先に目的の人物は居た。

肩まで伸びる赤褐色の髪の毛、黒皮のジャケットにズボンと革靴。筋骨隆々とした肉体と強面の顔はサングラスを掛けているが、その右目の辺りには獣の爪に引つ搔かれたような三本の傷痕。

男はタバコを吹かしながら目の前に立つダンテに鋭い視線を向ける。

「誰だ？ 見た事のない面だな」

「いや、偶々観光に来てただけさ」

「ほう、わざわざこんな墓地まで普通見て回るか？」

「ここから見れる景色も中々捨てたもんじゃねえと思うがな。夜になれば悪魔共が屍肉を求めて彷徨う絶景が。まあ、逆にアイツラを屍肉に変えるのが俺の仕事だけだな」

「悪魔だと？」

男の表情が更に険しく変わり、啞えていたタバコの灰がぽとりと落ちる。

「お前、悪魔を喚んだ事があるだろ？」

「聞かせろ。何者だ、お前は？」

「只のしがたい便利屋。けど裏の仕事はこう呼ばれてる。デビルハンター」

「悪魔狩り？ ふふ、そうか。それでデビルハンターさんは死霊魔術師の俺を退治しに来たって訳か」

「ネクロマンサー？ 別に死んだ人間の体をどうしようしようと俺は興味ない。だが悪魔を喚ぶとなれば話は変わって来る。こんな仕事

ばっかりやつてるからそう言う嗅覚は強いんだ。止めときな、人間に手懐けられる程悪魔は優しくない。魂ごと地獄に引き込まれたくないならここが潮時だ」

「悪魔か……確かに俺からすれば因縁浅からぬ存在だ。でもなデビルハンター。俺はまだ止める訳にはいかないんだ」

「そうか……」

互いの視線がぶつかり合う。張り詰める緊張、もう風の音さえ耳に入らない。どちらかが動きを見せた瞬間、勝負が始まると同時に決まる。ダンテはホルスターの二丁拳銃に、男は隠し持ったショットガンに意識を向けた。

刻一刻と時が刻まれる時間は無限とも思える程に長い。自らの体に流れる血の音さえ感じ取れるくらい集中力が高まる。

拮抗を破ったのはどちらが先か、ダンテはエボニー・アンド・アイボリーを引き抜き、男もショットガンを取り出すと互いにトリガーを引いた。発射される無数の弾丸。

けれども武器の特性上、有利を掴んだのはダンテだった。向かって来る弾丸に合わせてダンテはエボニー・アンド・アイボリーの照準を合わせてトリガーを引く。

発射される全ての弾丸が相手の弾丸とかち合い弾け飛ぶ。けれどもダンテの銃撃はこの程度で終わらない。目の前の男がもう一度トリガーを引く暇など与えず数え切れない弾丸を撃ち込む。

「ッ!？」

息を呑む、男は額に汗を滲ませた。

けれどもそれだけ。男の体は蜂の巣にはなっておらず、放たれた弾丸は斬り払われた。突如現れたのは赤いジャケットとショートパンツを着るブロンドをポニーテールに纏める少女。その右手にはダンテと同様に大剣を握っている。

少女は男を守るように立ち塞がると大剣の切っ先をダンテに向けた。

「テメエ、何者だ？ 黒の陣営が送り込んだ刺客か？」

「ああ？ どんなイリュージョンをやったんだ？ お嬢ちゃん、一体

どっから現れた？」

少女は文字通り突然現れた。瞬間移動などと超スピードではなく、その場に現れたのだ。多少スピードが早いくらいならダンテは見極められる。

思わず銃をホルスターに戻すと攻撃するのも中断して少女に問い掛けたが、相手はほとぼしるような殺意をダンテに向けて来た。

「質問してるのは俺の方だ。言え、さもないと首を取る」

「オイオイ、女の子ってのはもう少しお淑やかにするもんだ。まず、自分の事を俺って言うのは止めた方が良い」

「話を聞いてんのか！ それとな、俺の事を女扱いするな！」

「わかったよ、デンジャラスガール。そのごっつい剣から果物ナイフにでも持ち替えよう」

「ッ！」

「止めろ、セイ——」

男が止めに入ろうとした時にはもう遅い。少女が握る大剣はダンテの土手っ腹に刺さり切っ先は背中を突き抜ける。そして勢いのまま剣を地面に刺しダンテを串刺しにした。

「あくあく、やっちまいやがった……」

「うるせえッ！ どうせ敵だったんだ。死ぬのが少し早まったただけだ」

「それなら情報を掴んでからの方が良いだろ？ セイバー、ムカついたのはわかるが」

「ケッ！ 俺を女扱いしやがって」

「過ぎた事はしようがないか。セイバー、悪いが死体を運んで貰うぞ。ここに置いたままだと厄介だ。人払いの結界を展開するから夜には運ぶぞ。それまでは隠すしかないか」

「わかったよ、マスター」

少女はダンテを串刺しにする大剣を握るを地面から引き抜こうと力を入れる。だが、剣はびくともせず一ミリたりとも動かない。

「どうなってる？」

「やれやれ、気が早いな。デンジャラスガール」

「ッ!? 引け、マスター!」

瞬時に飛び退く少女はマスターと呼ぶ男を庇いながらも戦闘態勢を取る。魔力を開放させ全身に銀色を基調とした鎧を纏う。

聞こえて来たのは殺した筈のダンテの声。殺意と警戒心を向けたまま地面に寝転ぶダンテの様子を見てみると、まるで何でもないかのように彼は両手で大剣を掴み引き抜いていく。

「お前のようにガッツがある奴と会うのは……三人目だ」

「コイツ……本当に人間か?」

「お前だつて普通の女とは思えないな。全く……折角のコートに穴が空いちまった」

大剣を引き抜くダンテは立ち上がると杖代わりにして少女を見る。警戒する二人、殺されかけたにも関わらずまだ気さくに話し掛けた。

「所でデンジャラスガール。さっきそこの男をマスターとか呼んでたな? って事はアレか? サーヴァントって奴だな。こんなデンジャラスガールが英雄様とは——」

「ッ!」

ダンテが話し終える前に銀の鎧を纏う少女は地面を蹴った。武器である大剣は奪われているが肉弾戦も十分に強い。並の人間や魔術師では絶対に勝てない。

高速で接近する少女は目にも留まらぬ速さでダンテに肉薄すると穴の空いた腹目掛けて右手を突き出した。

「くたばりやが——」

轟音が鳴り響くと男の隣に立つ墓石が砕け散った。視線を向けると、そこに居たのは攻撃を仕掛けた筈の少女。

攻撃が来ると同時にダンテはわずかに魔力を発生させカウンターで相手に掌底を叩き込んだ。

起き上がる少女は体に掛かる砕けた石や土埃を振り払い、殺意を漲らせ怒号を吐く。

「テンメエエエッ!」

「どうしたデンジャラスガール? 剣がねえとこの程度か? ほら、返すよ」

折角奪った大剣を放り投げると少女は空中でぶん取る。同時に地面を蹴った。

「フンッ！」

体は風を突き破り、振り下ろす大剣は空気を斬り裂く。

セイバーは最優と称させるサーヴァント。以前戦ったランサーよりも強い可能性は充分にある。そんな彼女が振るう大剣を、ダンテも同じく背負う大剣を取り出すと受け止めた。

ほとばしる火花、甲高い金属音。

「へえ、お前も剣を使うのか？」

「どうだい？ 一緒に踊ってみるか？」

「上等！」

第三話 赤い叛逆

打ち合う、斬り合う、打ち合う、斬り払う。

二人の斬撃はもはや目に映らず飛び散る火花が微かに見える程度。だがこれだけ斬り合っているにも関わらず互いにダメージはない。

二人は柄を両手で握り大きく袈裟斬り。二本の大剣はぶつかり合い超音波のような金属音を鳴らし、ギリギリと鏝迫り合いになる。

「お前、本当に何者だ？ それにその剣もだ。俺のクラレントをこれだけ受けても刃こぼれもしねえ」

「ほう、剣に名前付けてるのか。そう言えばコイツを使い始めて結構長いな。リベリオンって言うんだ」

「叛逆か……面白しれえ。意地でもぶっ倒してやるよッ！」

一旦距離を離すセイバー。けれども勢いは全く衰えていない。突風を吹き荒らし再度接近すると握る大剣で袈裟斬り。ダンテも彼女の剣撃に合わせてリベリオンを振る。

何度も飛び散る火花、衝撃、金属音。セイバーの動きに付いて来るダンテはリベリオンで大きくすくい上げた。

「ほらよー！」

「喰らうかよー！」

攻撃を受け止めるセイバーだが体は空中に向かって大きく浮き上げられてしまう。

「クツ!? コイツ……」

「これも持って行け!」

リベリオンを逆手に持つとダンテは魔力を流し込む。赤く発光する大剣、ダンテはそれを空中で受け身を取るセイバー目掛けて斬り払った。

その一振りにより衝撃波が生まれ、更に流し込まれた魔力と一緒に飛ばされる。セイバーは握るクラレントで衝撃波を受け止めるが一切支えのない空中、ダメージはないが姿勢が崩れてしまう。

「もう一発だ!」

「喰らうのはテメエの方だ!」

魔力を開放させるセイバー。それに反応して周囲に赤い稲妻が発生した。稲妻は衝撃波を相殺し、次にダンテへ襲い掛かる。

轟音を鳴らし落下する赤い稲妻。地面が吹き飛び土煙と共に穴が開く。

「ハッハア! 驚いた、雷も出せるのか。おい、デンジヤラスガール。次はどんなイリュージョンを見せてくれるんだ?」

「次に見るのはテメエの死体だ! ぶちかましてやるツ!」

ダンテの挑発に乗るセイバー。だがマスターである男はそれを良しとしない。

「セイバー! わかっているな? 宝具は使うなよ!」

「わかってるよ、マスター。でもぶちかますのは本当だ。これ以上コイツに良い様にされるのは我慢ならねえ!」

姿勢を正し地面に着地するセイバーは大剣を構え全身から稲妻に変化した魔力を放出する。蓄えている戦術の引き出しを戦いが経過するにしたがい確実に開放させていく。

赤い稲妻を推進力にしてロケットのように突っ込む。

「くたばりやがれエエツ!」

「死ねるかよ!」

セイバーがロケットならダンテはミサイル。地面を蹴り真正面か

らセイバーに突撃するとインパクトの瞬間にリベリオンを突き出した。

激突する二本の大剣。今までは拮抗していた両者だが、軍配が上がったのはセイバーだ。ダンテのリベリオンが回転しながら上空へ浮き上がる。

「取った！」

セイバーは大きく振りかぶり袈裟斬り。ダンテの首を斬り落とそうとする。

けれども鋭い刃が到達する事はなく、轟音が響き防御の構えを取る彼の両腕に阻まれた。

「白刃取り!？」

「ちよつと違うな。それよりも良いのか？ 安心するにはまだ早いぜ」

「上か!？」

回転するリベリオンが落ちてくる。否、意思を持ってセイバーに襲い掛かって来た。

反応するセイバーは飛び退くが、リベリオンは逃げた先へも追い掛けて来る。回転速度も早くなり、受け身を取るセイバーの大剣をガリガリと削って行く。

「チイッ！ 洒落臭えぞー！」

クラレントで振り払い弾き返すとリベリオンは再び宙に浮かぶが、まるでブーメランの様に持ち主であるダンテの元に返って来る。

「つと。それじゃそろそろ決めるか」

「ハアアアッ！」

突撃するセイバーと待ち構えるダンテ。腹部目掛けて鋭い突きを繰り返すがダンテはスルリと身を振ると背後を取り、同時に肩を押して前のめりにさせる。足が纏れるセイバーはそのまま地面に倒れてしまうが瞬時に振り返る。

するとその時、首元にリベリオンに刃が突き立てられた。

「デンジャラスガール、これで少しは——」

「フンッ！」

鮮血が飛ぶ。

ダンテに腹部に再び大剣が刺された。が、まるで気にも留めていない。

「やれやれ、こっちは寸止めしてやったって言うのに」

「そんなの頼んだ覚えはねえよ」

「はあ、聞き分けのない嬢ちゃんだ」

「テメエ……」

「オイオイ、睨むなよ。わかつたって、攻撃はしねえよ。そっちの男にもな。どうやら俺の勘違いだったらしい」

「本当だろうな？」

横目でマスターの反応を伺うセイバー。それに男は無言で頷くとセイバーは突き刺した大剣を引き抜きダンテもリベリオンを首元から離し背に回す。

ようやく戦闘が落ち着き、マスターである男は前に出て名を名乗った。

「俺は獅子劫界離、アンタの名前を聞かせてくれ」

「ダンテだ。そっちのデンジヤラスガールは？」

「悪いが真名は教えられない」

「真名？ 名前を隠すのに意味なんてあるのか？ まあ良いや。素直

に教えてくれるとも思えねえしな」

「ダンテ、ここに何をしに来た？ 俺が目的か？」

「ああ、そうだったんだが……お前、悪魔に取り憑かれてるぜ」

「知っている。俺はその為にこの聖杯大戦に参加している」

「聖杯の力を使って呪いを解こうってか？ 聖杯ってのはそんなに便利なのか？」

ダンテはあくまでレイシアのボディガードとして動いているに過ぎない。魔術師の理念、聖杯戦争の本質を完璧には理解していない。

聖杯戦争に参加するマスターと呼ばれる魔術師は聖杯を手にする為に家系の血を繋いで来た。手にした者は奇跡さえも叶えてくれる

聖杯。獅子劫が聖杯に求めるのはそれである。

「便利なんてもんじゃない。聖杯を手にはできれば悪魔の呪いくらい払拭できる。そのせいで俺は子孫を残せない。俺が望むのは一族の繁栄だ」

「なるほどねえ……で、魔術師のアンタがサーヴァントと一緒にここに居るって事は敵も近いって事だな？」

「そうだ。この街では最近、魔術師を狙った連続殺人が起こっている。被害者は全員心臓をえぐり出されて死んでいる。こんな殺し方をする理由は一つしかない。サーヴァントの魔力の補充に使っている。敵のサーヴァントと言うのもあるがこんな事を見過ごす訳にはいかない」

「つまり自分が囷になるって事か？ 良いねえ、気に入った。だが敵さんも痺れを切らして来たみたいだ」

ダンテが言うのと昼間にも関わらず霞が掛かる。視界を遮る白い闇が街を覆い始めた。

「この霧は!? どうやらうかうかしている時間はないな。ぐうツ!? ゲハアツ! これは不味いな……セイバー、頼む。ここから動くぞ」

「このやり方……キャスターかアサシンか? わかった、急ぐぞ」

咳き込む獅子劫の体を蝕むのは現れた白い霧。セイバーは彼の肩を担ぐと墓場から移動を始め、ダンテも二人の後に続いた。

第四話 地獄の入り口

サーヴァントである少女の後に続きダンテはルーマニアのシギシヨアラの街を走っていた。街を覆う霧は吸い込んだ人間の体を蝕む。魔術師である獅子劫界離も例外ではなく、なるべく吸い込まないように袖で口と鼻を塞ぐが、それでも今や立つのも辛い状態だ。

そんな彼を見兼ねてセイバーは体を背負うと霧を突き抜けるべく思い切り走る。

「どこまで続いてるんだ？ 急がねえと不味いな。それよりもお前……」

「何だ？ そんなに見つめるな」

「お前は何ともないのか？ サーヴァントの攻撃、魔術師の簡単な術くらいじゃ防げない」

「ちよつと訳ありでね。まあ気にすんな。それよりもちよつと聞きたいんだが、アサシンとかキャスターとかって一体何だ？」

セイバーと横並びで赤いロングコートをなびかせながら街の中を走るダンテは霧を物ともせず聞いて来る。不審な顔をしてみせるが、セイバーはその質問に答えてあげた。

「聖杯戦争に召喚されるサーヴァントは七体、その七体はそれぞれのクラスに分けられる。俺がセイバー、他がランサー、アーチャー、ライダー、キャスター、アサシン、バーサーカー」

「なるほど。それでこの霧を出してるのがキャスターかアサシンのどちらかって訳か」

「キャスターとアサシンはこう言う陰湿なやり方が得意な奴が多い」

「そうか……それじゃもう一つ聞きたいんだが」

「まだ何かあるのか？」

「街の方にまで降りて来たつてのに人を全く見ないのはどう言う事だ？ この霧を吸って倒れてる奴も居ない」

「ああん？ 人払いの結界か？ 誰が発動させてる……」

「不味いな……お嬢ちゃん……」

墓場を下り住宅街を抜けた先にあるシギシヨアラの中央、そこまで

来るとようやく霧から抜け出せた。獅子劫はセイバーの背中から降ろされると肺に新鮮な空気を取り入れる。

それでも普通に呼吸ができるだけで蝕む毒のせいで体に力が入らない。

「はあ、はあ、はあ、セイバー助かった。作戦通りとは言えこれは辛いな。敵のサーヴァントとマスターを見付けるぞ」

「おう、そのつもりだ。で、俺の直感だが……こういう場合相手はすぐに来る！」

セイバーはクレラントを握ると獅子劫を足払いして横一閃。自分の体重を支えられず地面に倒れる彼が見たのは銀色の鎧を纏い大剣を振るうセイバーと、その斬撃を両手に握るナイフで受ける幼き少女。

短めの銀髪にアイスブルーの瞳、右の頬には縫いキズ。両手を包帯で巻き、露出の多い服装はまるで水着のよう。

獅子劫を背にして、現れたアサシンに切っ先を突き付けるセイバーは鋭い目付きで敵意を向ける。

「俺の勘は良く当たるんだ。その姿、やっぱりアサシンだな。生憎とソイツは俺のマスターだ。簡単にはやらせねえよ」

「ふふふッ……じゃあこれならどう？」

言うど腰に装備している何本ものナイフや短刀を獅子劫目掛けて投げ付けた。打ち払わんと構えるセイバーだったが、無数の銃声が響くと全ての攻撃が失敗に終わる。投げられたナイフは勢いを失くしアサシンの傍に跳ね返って来た。

「その果物ナイフは次にリングを剥くまでポケットにしまつときな」

「アナタ……誰？」

「只の便利屋さ。でもベビーシッターと保育士の仕事だけはノーサンキューだ。わかつたらさっさとママの所にでも帰りな」

「わかった。ならアナタから殺すね」

アサシンは落ちたナイフを拾いダンテ目掛けて駆ける。小柄な事も合わさり少女の身体能力は驚異的に高い。重力がないかのように軽やかでしなやかに体を動かし瞬く間に接近する。ダンテはエボ

ニー・アンド・アイボリーを取り出しトリガーを引きまくるが、マシンガンのように発射される弾丸の一発とて彼女にかすめもしない。

そして接近戦の距離まで詰め寄られる。リベリオンに持ち替えるダンは素早く袈裟斬り。

「空振りだね。わたしたちはここだよ?」

「わかってるよ!」

声が聞こえる方向へ剣を振り下ろす。だが切っ先が石畳を傷付けるだけで彼女の姿さえも視界に入らない。

この時、既にアサシンはダンの背後に回り、その首にナイフを突き立てようとしていた。が、その動作に一瞬ではあるが迷いが入る。

「うん? このニオイ……」

「ダンテ、後ろだ!」

セイバーの斬撃がアサシンを襲う。不意を突いたかに見えた攻撃だが、アサシンはダンを足場にしてジャンプするとスルリと避けてしまう。

「あはははは! マスターの方を殺そうと思ってたけどそちの男の人を先に殺した方が良さそう。魔力も充分に回復できるしね。セイバー? は次に殺してあげる」

「抜かせ! チイツ! すばしっこいクソガキが!」

「そちの男の人を殺したらすぐに殺すから」

言う周囲にまたしても霧が発生し、アサシンの体は白い闇の中へと消えて行く。こうなるとマスターである獅子劫を気にせねばならず、サーヴァント戦に集中できない。

「またこの霧か! マスター、まだ動けるか?」

「何とかな……」

「こうなると防戦一方だ。どうする……」

「そうでもないさ」

視線を向けた先で口を動かしたのはダンテだ。彼はやはりこの霧の中でも何でもないかのように平然と立っている。

「俺がおチビちゃんの相手をする。その間にお前はマスターを安全な所まで連れて行け」

「正気か？ サーヴァントでもないお前が勝てるとても」

「お前には勝つただろ？」

「ふざけるな、あれで全力な訳がないだろ。お前の体が普通じゃないのはわかったが、宝具を使われでもしたらひとたまりもないぞ」

「なら、その宝具って奴を使われる前に終わらせるだけだ。何だ、心配してくれるのか？」

「ば、馬鹿言うな！ 兎に角、お前は時間を稼げれば充分だ。すぐに戻る」

セイバーは獅子劫を背負うと少しでも早く移動を始める。二人を背にして、ダンテは最後に言付けを頼む。

「それと余裕があるならレティシアって名前のお嬢ちゃんを探してくれないか？ 十年もすれば良い女になる娘だ」

「自分でやれ！」

「やれやれ……さあ、躰の時間と行くか」

第四話 地獄の入り口

白い闇の中に佇むダンテ。右手にはリベリオンを握り、感覚を研ぎ澄ませ相手が動くのを待つ。

音も聞こえない。目を開いても一メートル先すら満足に視認できず、気配さえ遮断して、この空間は完全にアサシンに有利な状況。

五感の全てに感知されないアサシンはダンテの背後に迫る。

「アナタ、不思議なニオイがするね」

「後ろか！」

リベリオンで袈裟斬りするが反応した時にはもう遅い。アサシンの姿は見る事も叶わず霧の中へ消える。

「普通の人とは違うニオイ。でもサーヴァントとも違う。何のニオイ？」

「悪いが企業秘密だ」

「ええ、残念だなあ」

気が付くとすぐ隣でケラケラと笑みを浮かべて居る。目を見開く

ダンテはリベリオンで振り払うが、その刃は空を斬るだけだ。姿を消すアサシン、彼女の声がまるで幻聴のように周囲に響く。

「あはははは！　じゃあ早速だけど殺すね？　セイバーとマスターの方も追い駆けないと」

「こいつは……マジで早いな。時間稼ぎもできないとなるとデンジャラスガールに笑われちまう」

「フンッ！」

目には見えず音も聞こえない。空気の振動すらなく、ナイフを逆手に持つアサシンがダンテの首に迫る。絶対に避けられない一撃。

幾人の人間の血を吸ったのかわからないナイフの先端が突き立てられた。

しかし、アサシンの表情は冷めた物へと変わる。触れる刃は彼の首を搔つ捌く事はなく、漆黒の鎧に阻まれた。

「何これ？　魔術とは違う。アナタ……やっぱ人間じゃない？」

「企業秘密だつて言つたら？」

ダンテの全身を覆うのは魔力で形成された漆黒の鎧。鋭く光る眼光、禍々しき二本角。見る者を威圧し恐怖を与えるように肩や指先に至るまで尖ったデザイン。

戦闘力が低いアサシンの攻撃とは言え全くの無傷で防ぎ切るだけの強度。ダンテは空いた左手を伸ばすと彼女の腕を掴んだ。

「それよりも……捕えさせ」

「ッ!？」

ダンテは力任せにアサシンの体を地面に叩き付ける。本来なら相手の骨、地面ごと砕くだけの威力があるが、アサシンは背中を丸めると衝撃を受け流した。更に続けてレンガで作られた壁に目掛けて振り被るが、重力を操るかのように壁に両足を着地させてダメージを受けないようにする。

「ゴイツ、タコかよ。だったらコレならどうだ？　押してダメなら引いてみな！」

リベリオンを背負い銀色の銃を取り出すと、拘束されながらも逃げ回るアサシンに目掛けて弾丸を放つ。激しいマズルフラッシュ、甲高

い銃声。

しかしこれもアサシンはしなやかに体を動かしては動き続け、それでも避けきれない弾は握るナイフで弾き飛ばす。その高すぎる運動能力に思わずダンテも舌を巻く。

「中々やるな、おチビちゃん」

「うふふ！ 力比べだとわたしたちじゃ勝てないけど、当たらなかつたら意味ないよね？」

「それでもないさ」

赤い稲妻が轟く。強力な魔力で形成されたそれは幾本も天から降り注ぐと白い闇を消し去ってしまう。そしてダンテはアサシンを握る腕を高々と上げると、赤い稲妻を纏うセイバーが文字通り飛んできた。

「取ったぞ、アサシン！」

空中を一直線に突き進むセイバーは両手に握る大剣で大きく袈裟斬りした。小さな胴体を切断するつもりで振られた一撃。しかしアサシンは身を振りこの攻撃をも避けようとした。が、幾らアサシンの身体能力が高くともこの状況で空振りする程セイバーの戦闘能力も低くない。

狙いは外してしまいが、ダンテに握られた右腕を切断した。

「あゝあゝあゝアアアッ!?!」

「仕留め損ねたか？ でも一発食らわせてやったぜ！」

着地するセイバーに拘束から逃れるアサシン。ダンテは漆黒の鎧を解除し、セイバーの元に歩み寄る。

「思った以上に早かったな？」

「当たり前だ。それにお前になんか任せてアサシンに逃げられでもしたら最悪だからな」

「フフ、デンジャラスガールのイリュージョンで邪魔な霧も失くなくなった。さあ、どうするおチビちゃん？」

「だから俺を女扱いするな！」

片膝を付きダンテ達を睨むアサシン。斬られた右腕からは止めどなく血が流れ続ける。二対一の状態、それも片腕を失ったとなれば勝

っ見込みはない。

撤退すべくちらりと後方を確認し、霊体化も視野にいれて動き出そうとした。

瞬間、左足も吹き飛びアサシンは為す術もなく倒れ込んでしまう。

「いッ!? 何? 何なの? 別のサーヴァントの攻撃?」

足を吹き飛ばしたのは一本の矢。アサシンが探知できない弓矢による長距離狙撃で狙い撃ったのだ。そんな事ができるのはアーチャーを置いて他にない。

そのアーチャーはダンテやアサシンの前に姿を表す。

「逃しはせずに、黒のアサシン。汝はここで仕留める」

獣のような耳と尻尾。腰まで伸びる長髪は本来なら鮮やかなエメラルドだっただろうに、その面影は前髪にわずかに残っているだけで、これも獣のように茶色い。

深緑のワンピースのような服、その右手には黒く弓と黄金の矢を握る。そんな彼女の獣のように鋭い視線は二人にも向けられた。

「私の名は赤のアーチャー、マスターの命によりセイバーの援護に駆け付けた」

「そりやどうも。俺一人でも倒せたけどな」

「威勢を張る意味などない。セイバー、そっちの男は誰だ?」

「ちよつとした知り合いだよ。それよりも……」

セイバーは動けないアサシンの元に詰め寄るとクレラントの切っ先を首元に突き付けた。

「案外……あっけなかつたな、黒のアサシン。これで終わりだ!」

「来なさい、アサシン!」

大剣の切っ先が地面に突き刺さる。現れたのはまた新たな人物。されどサーヴァントではない。

長髪に緑のドレス、その表情は蠱惑的ですからある。そんな彼女の足元までアサシンは引きずられるようにしてやって来た。

右腕と左足を失い血だらけになった姿に彼女はボロボロと涙を流す。

「ああ……ああアアッ!? そんな……そんなあ……」

「お母さん……ここはダメ、逃げて……」

「アナタを置いては行かない。さあ、一緒に——」

残るアサシンの手を取ろうとする女だが、セイバーの大剣がそれに割り込む。彼女の目は相手をいつでも殺す覚悟がある。

「お母さん？ お前がマスターだな。お前らの聖杯戦争はここまでだ。潔くサーヴァントの首を差し出せ」

「ごめん、ごめんね。あの時アナタに助けられたのに、今の私にはアナタを助ける事ができないなんて。さっき令呪を一面使った。残りの令呪でできる事は、少しでもアナタを遠くに逃がすくらい」

「いや……嫌だよ、お母さん。ひとりぼっちは嫌なの！ お母さんと離れたくない！」

「でも私は魔術師じゃない。だからできる事はあと一つ。ジャック……二面の令呪を持って命ずる。アナタの——」

刃が肉を斬る。アサシンのマスターが最後まで言葉にする暇など与えず、セイバーはアサシンの首を跳ねた。

サーヴァントと言えど無敵ではない。普通の人間と同じように限界は存在し、アサシンの命はこれで潰える。

「言っただろ、これで終わりだと。おい、アサシンのマスター。サーヴァントが居なくなっただけ、これ以上の戦闘は無意味だ。おとなしくこちらに投降しろ」

「いいえ、まだ終わってない……」

「何を言っている？」

「終わってない、まだ終わってない。二面の令呪は発動した。あの娘の宝具も発動する！」

女の右手の甲に刻まれた赤い紋様、これこそがマスターに選ばれた証。全てで三画ある令呪はサーヴァントに対する絶対命令権。従えるサーヴァントにどんな命令をも遂行させる事ができ、それは同時に膨大な魔力を発生し、魔術師でないマスターであろうと絶対的なアドバンテージを生み出す事ができる。

その令呪が二画、真っ赤に発光しアサシンに発動した。

瞬間、斬り落とされたアサシンの頭部と体が弾け飛び周囲に濃い霧

を発生させる。

「寸前の所で間に合わなかった？ クソ、また霧か！」

再び白い闇は周囲を覆いセイバー達の視界を効かなくさせる。けれどもこの霧はさつきまでのとは全く違う。幻覚か、幻か、幼い少年少女達が目の前に現れる。

それはセイバーの前だけではない。アーチャーの前にも、ダンテの前にも。

「子どもだと!? これがアサシンの宝具なのか？」

「全く……子どものお守りは勘弁して欲しいぜ」

「冗談を言ってる場合か！ それに汝はサーヴァントではないのだから？ まず真っ先に狙われるぞ」

「ご心配ありがとよ。でも汝なんて呼ばれ方は好きじゃないな。ダンテって呼んでくれ」

「緊張感のない奴め。死んでも知らんぞ」

弓矢を構えるアーチャーとリベリオンを肩に担ぐダンテ。霧の中に現れた子ども達は何をするでもなく口々に囁いて来るだけだ。けれども可愛い物ではない。その言葉は一言一言が魂を蝕む怨念のよう。

「どうして……」

「ねえ、どうして……」

「どうしてなの？」

「どうしてわたしたちは死ななくてはならないの？」

子ども達の声、伸ばされる手は聞く者の心を捕えて離さない。その魔の手は赤のアーチャーへも伸びる。

「これは……幼い頃の私？ 女である事から父に捨てられ、それでも女神アルテミスに救われて生きていた頃の私……」

「寒いよ……」

「一人にしないで」

「苦しいよ……」

アーチャーの精神は確実に汚染されていく。もはや自らの力での脱出は不可能は程に、彼女の精神にはアサシンの思念が侵食してい

る。

「そんな事はない！ お前達にだって私と同じように幸せになる権利がある！ その為に私は全ての子どもが救われる世界を願って聖杯を——」

「それなら……一緒に来て……」

「うゝ あああアアツ!？」

銃声が響いた。

彼女の精神を引きずり込もうとした子どもの思念体に銃弾が撃ち込まれると霧となつて消える。

「気をしっかり持てよ、ネコミミガール」

「汝は……ダンテと言った……」

「仕事柄、こう言うのは慣れてる。そいつらの言葉に耳を傾けるな」

「しかしこの子ども達は!？」

「もう死んでる。こいつらは亡霊だ」

銃口を突き付けるダンテはトリガーに指を掛ける。瞳に写る亡霊を撃つ事に躊躇いはない。しかし銃声が鳴り響く事はなかった。

「どう言うつもりだ？」

「撃たせない……殺させない！ 子どもなんだぞ！」

ちらりと横目で見る先には弓矢を構えるアーチャー。狙うのは銃を握るダンテだ。

「俺が言った意味がわからないのか？ 亡霊をのさばらせてどうする？」

「それでもだ！ 私はこんな子ども達が生まれぬ世界を作る為にこの聖杯対戦に参加した！ この子は犠牲者だ！ 欲望が渦巻く時代のせいで使い捨てにされた哀れな子だ！」

残留思念を通して二人に伝わって来るのは辛く悲しい時代の背景。一八八〇年代のイギリス、ホワイトチャペルでは貧困が蔓延していた。女達は今日を生きる為に自らの体を売り渡し、子どもの存在など邪魔でしかなかった。

男も女も、大人も子どもも関係なくスラム街では毎日誰かが死んでいく。

漂う腐敗臭、疫病、平然と転がる死体。

そんな時代の闇が生み出したのが連続殺人鬼ジャック・ザ・リッパ―。

しかしアサシンはジャック・ザ・リッパ―として召喚されたサーヴァントではない。ホワイトチャペルで墮胎され生まれることすら拒まれた胎児達の怨念が集合して生まれた怨霊。

その亡霊がただ一つ思う願い。母の存在だ。彼女らは母と出会う事を望んでいる。ジャック・ザ・リッパ―はその為の器にしか過ぎない。

アーチャーはその事を知ってしまった。生まれる事すらできずに死んでいった胎児の願い。それは自らが理想とする世界にあつてはならない事。故に亡霊と切り捨てられず、声を遮断できない。

彼女は自らの意思でダンテに敵意を向ける。

「私はこの子達を助ける！ 聖杯にこの願いを託せれば、もうこんな悲惨な光景は生まれえない！」

「お前の気持ちはわかるぜ。誰だってこんなのを見せられたら胸糞悪くもなる。掃き溜めに転がるゴミ同然の扱い。でもな、こいつらはもう死んでる。死んだ人間は生き返らない」

「ならばこんな世界を許すと言うのか？ 子どもが親に愛されない世界を？」

「そうだな。会ったばかりのお前の事を俺は何も知らない。お前がそこまで子どもに執着する理由も。けどな、誰に助けられなくても、頼まれなくても、生きていける強さが人間にはある」

「だから何もしないのか？ 泣き叫ぶ子どもが目の前に居るのに！」

「俺は何回も言った筈だ。こいつらはお前が助けたがってる子どもでも何でもない。只の亡霊だ」

「よせ……やめ——」

アーチャーの忠告を無視してダンテはトリガーを引いた。

響き渡る銃声に導かれるように周囲を覆う霧は晴れていく。そして残るは沈黙のみ。

彼女達の残留思念は最後にアサシンの姿を表すとダンテの前に現

れた。

「アナタは強い人だね」

「俺が強いんじゃない。人間はみんな、悪夢なんかには負けない強さを
持つてる」

「そうなの？」

「そうさ」

「じゃあ……わたしたちが居なくなってもお母さんは大丈夫なの？」

「心配しなくても生きていくさ。良い女だしな」

「良かった……」

その言葉を最後にアサシンの姿は完全に消えた。街並みは完全に
元へと戻り、この場にはダンテとセイバー、アーチャーが残るだけ。

第五話 シャルルマーニユのパラディン

銃をホルスターに戻すダンテ。今までの霧で包まれた空間が嘘みたい。空からは太陽が燦々と降り注ぐ。けれども微かに聞こえるのは女のすすり泣く声。それを合図にしたのか、太陽は雲に隠れてしまった。

「死なずに済んだ……殺さずとも良かった……汝、ダンテと言ったな！ どうして撃った！」

「またその話か？ 死んだ人間の事をいつまで思っけても何にもならない。蘇る訳でもない」

「聖杯が……聖杯さえあれば救えるのだ！ あの子ども達を、この世界を変える事ができる！」

「英霊様って言うのは物事を考えるスケールがデカイな。世界を変えると来たか」

ヘラヘラした態度を崩さないダンテにアーチャーは青筋を立て矢尻を突き付ける。小さな口から出るのは張り裂けんばかりの怒号。

「何がおかしい……何がおかしいッ！ 子どもの事を願って何が悪い！ 私は父と母の愛に恵まれなかった。同じように辛い思いをする子どもは世界中に居る。その全てを救うのは魔法でも使わねば……奇跡を起こさねば無理だ。だから私は聖杯を手にする為にこの聖杯戦争で戦う！ 汝にこの思いを否定される謂われなどない！」

「誰に頼まれたでもないのに大層な願いを思うもんだ。蘇ってまで願う思いがそれか」

「黙れエエツッ！」

限界まで引かれた弦が指から離れ二本の黄金の矢が放たれる。再びホルスターに手を伸ばすダンテだが、間に入る騎士が大剣で弾き飛ばす。

その光景にアーチャーは涙に濡れる目を見開き、彼女に対しても殺意を向ける。

「セイバー!! 汝も私の邪魔をするのか？ この男は殺さなくてはならん！ このような大人が居るせいで不幸な子どもが生まれる！」

因果は断たなくてはならない！」

「別に止めはしねえ。俺だってコイツには借りがあるからな。ぶち殺してやりたいさ。でも今じゃねえ。人払いの結界の効果が失くなりかけてる。これを仕掛けたのはお前のマスターなんじゃないか？」

「くっ!?」

「ここでおっ始めたら確実に人目に付く。それはお前のマスターにとっても厄介だと思うけどな。ここは一度引いとけ」

歯が砕けんばかりに食い縛るアーチャーはセイバーの忠告を受け入れてか弓を引いた。しかし溢れ出る憎悪と憎しみが止まる事はない。殺意を込めた視線でダンテを睨み付ける。

「ダンテ！ 貴様の事は決して忘れん！ 貴様など人間の皮を被った悪魔だ！ 次に出会えば確実に殺す！」

最後の言葉を残しアーチャーは地面を蹴ると人間離れた跳躍で屋根の上を飛んで行く。飛び跳ねながら次第に遠ざかる背中、完全に警戒心を解いたセイバーは鎧を外し元の赤いレザージャケット姿へと戻る。

「やれやれ……随分と嫌われちゃったな」

「相変わらず緊張感のない野郎だ。アーチャーに限らず、相手を挑発するような事は止める。本当に殺されるぞ」

「ほう、やつぱり心配してくれんじゃねえか。お優しい事で」

「だ、誰がテメエの心配なんかするか！」

「それにしても人間の皮を被った悪魔か……」

「あの精神攻撃は黒のアサシンの宝具だ。放っておけばこちらが殺られていた。アーチャーの願いを成就させる為にも、あそこは殺すしかなかったんだ。今は頭に血が登ってその矛盾に気が付いてないけどな」

そう語るセイバーの瞳もどこか寂しそうに見える。

人払いの結界の効果が失われた事で街に人々の姿が戻って来た。その中には安全の為に逃したセイバーのマスターである獅子劫界離と、放ったらかしにしていたレイシアの姿もある。

「セイバー、終わったのか？」

「ダンテさん！ どこに行つてたのですか？」

「言つたら、ちよつとした用事だよ。そうだ、デンジヤラスガール。別れる前に一つ聞きたい事を忘れてた」

女扱いされる事に怒りを覚えるセイバーだが、この場で大剣を引き抜いたりはしなかった。それでも鋭い視線で睨み付けるくらいはするが。

「何だよ？」

「あの猫耳娘、赤のアーチャーとか言つてたよな？ って事は……」

「俺は赤のセイバーだ。それがどうした？」

「赤の陣営は味方なんだろ？ 少し前、赤のランサーって野郎にお嬢ちゃんが狙われた。何か知ってるか？」

獅子劫に視線を向けるセイバー。しかし彼もこの事に関しては何も関知しておらず静かに首を横に振る。

「そうか、ならしやうがないか」

「お前と共闘するのも今回限りだ。精々アーチャーに殺されないように隠れてろ。行こうぜ、マスター」

サーヴァントも居なくなりこの場を後にしようとするセイバーと獅子劫界離。ダンテとレティシアに背を向けて歩きだすが、魔力の気配を感知すると歩を止め振り返った。それはダンテとレティシアも同じで、四人が見つめる先は空だ。

「何だ、アレは？」

「マスター、どう思う？」

「間違いなく宝具だろ。最低限の認識障害と魔力遮断はしてるが……つたく、神秘の隠匿もなにもあつたもんじゃない」

「大きい……速度は遅いですが、この方角の先は黒の陣営……ユグドミレニア城があります」

見上げる先にあるのは空に浮かぶ巨大な要塞。いや、要塞と呼ぶにしてもデザインが整い過ぎている。

要塞にも関わらず緑豊かな木々が立ち並び、床や壁、柱は大理石で作られ、要塞全体にあらゆる種の植物が絡んでおり、更に要塞の周囲を囲むように二十メートルを超える漆黒のプレートが設置されてい

た。

空中要塞、空中庭園とも呼べる巨大は建造物は今、上空七五〇メートルをゆっくりと飛んでいる。

「で、どうする？ お嬢ちゃんも監視が目的なんだろう？」

「そうではありますけど……」

「まあ、思った以上に動きは鈍いし、空爆でもしてこないなら気にしなくても良いだろ。行き先もわかってるしな」

「ですね。では私達はあの要塞の後に続いて動くと言う事で。ルーラーの召喚の儀式にもまだ時間が必要なので、以前のように襲われでもしない限りは戦わず、離れた所で監視しましょう」

「そう言う事だ、デンジャラスガール。お前らは戦いに行くんだろ？」
「だからその呼び方を止めろって言ってるんだろ！ そうだな……あんなのが来たんじや黒の陣営だつて黙ってねえ。サーヴァント同士の正面からのぶつかり合いになる。戦場に遅参なんて騎士として恥ずべき行為だ。急ぐぞマスター！」

やる気を出すセイバーはこの場から走り出す中で獅子劫界離はダントの元に歩み寄る。サングラスに隠された表情は読み取れないが、その言葉には悲壮が漂う。

「ダント、お前が何者なのかはもう聞かない。だが一つだけ頼みがある。アンタの腕を見込んでだ」

「内容によるな。それと依頼料は高いぜ」

「都合の良い話とを感じるだろうが、もしもできるなら俺の体に取り付いた悪魔の呪いを払って欲しい」

「ほう……それは良いが、呪いを掛けた悪魔を見付けられない事にはな。それに数も多い。親切に見つかりに来てくれる程間抜けなら簡単だがな」

「そうか……無理にとは言わない」

「マスター、何やってるんだよ！」

「わかっている、じゃあなダント。アンタなら大丈夫だとは思いますが死ぬなよ」

獅子劫界離とセイバーは次の戦場に向かうべくこの街を離れて行

く。しかし、あくまでもレティシアのボディガードとして動いているダンテは事の成り行きを見守るだけ。

そんな彼の存在を遠くから眺めるサーヴァントの存在が一人。

空中庭園の中央に備えられた玉座へ背を預けるのは黒髪の女帝、赤のアサシン。漆黒のドレス、横長に伸びた耳、彼女の瞳から漂う高飛車な雰囲気。

「黒のアサシンを倒したか。しかし何者なのだ、あの男は？　ダンテと言っていたな。マスターはどう思う？」

アサシンの呼び掛けに振り返るのは黒い修道服に身を包む若き神父。名をシロウ・コトミネ。

聖堂教会から派遣された身であり、この聖杯対戦の監督役であると共にアサシンのマスターでもある。

褐色の肌によく染まった髪の毛。物腰柔らかな素振りであサシンの問い掛けに答えた。

「今はまだ我々の脅威となる相手ではないでしょう。ですが私の願いを成就させるにはルーラーの存在は邪魔になります」

「ならばどうする？　もう一度ランサーでも送り付けるか？」

「いいえ、様子を見る限り彼女はまだ召喚に成功していない。私の計画の支障にならないのであれば問題ありません。これから大聖杯を奪いに行くのです。余計な事はしない方が得策でしょう」

「そうか……お前がそう言うのなら手は出さん。だが私の庭園に土足で踏み込む不屈き者は始末せねばならぬなあ」

アサシンはおもむろに人差し指を突き出すと指先に魔力が集中し、赤いレーザーのように強力な魔力が発射された。空気を焼き尽くし目標を仕留めんと突き進む赤い魔力。しかし相手はするりと攻撃を避けると石で作られた壁が破壊される。

「気配は掴んだ。諦めて我の前に現れよ。さすれば一撃で息の根を止めてやるぞっ！」

「うきやきやきやキャキャアツ！　その願いを叶えてやる」

聞こえるのは地の底から響き渡る暗く冷たい声。耳にただけで心臓を鷲掴みにされるような、おぞましく恐怖を抱く存在。

何もない空間から現れる漆黒の両腕。その爪先は獣の鉤爪と変わらない。黒いローブを身に纏い、隙間から覗かせる顔は山羊の頭蓋骨の形をしている。音もなく現れる悪魔はアサシンではなくマスターのシロウの元へと這い寄った。

「お前の願いを叶えてやるぞ。一人の人間が抱えるにはあまりにも大きく、そして純粹で眩しい願い……」

「アナタは……悪魔ですね？」

「その願い……俺が叶えてやる。悪魔は代償を必要とする代わりにどんな願いでも叶える。貴様の願いも俺の——」

剣の切っ先がギリリと光る。レイピア状の剣が三本投げられるとドス黒い血が吹き出し悪魔の悲鳴が響き渡った。

「グギャあゝ アアアアツ!？」

「生憎と異端者の言葉を聞く耳は持ちませんね。それに悪魔になど頼まなくても私の願いは聖杯で叶えてみせる」

「うキャキャキャキャキャ！ お前の願いは俺が叶えてやる。そしてその時こそ我ら一族の悲願が達成される！ あひゃひゃひゃひゃヒヤヒヤヒヤあああ！」

突き刺された剣が音を立てて地面に落ちる。シロウの前に現れた悪魔は再び影へと消えて行った。何事もなかったかのように平然と剣を拾うシロウの表情には微かな笑みが浮かんでいる。

「大聖杯を手にする時は近い。悪魔などに手出しはさせません。それよりも彼……ダンテと言いましたね？」

「それがどうした？ 他人に興味を持ったか？」

「いいえ、違いますよ。ですが彼、まだまだ災難が続きますそうですね」

「災難？ フフツ、そうだな」

二人は感じ取っていた。黒の陣営のサーヴァントが一人、この地へ向かっている事に。

第五話 シャルルマーニユのパラディン

獅子劫界離らと別れたダンテとレティシア、そしてアサシンのマス

タワーであった六導玲霞はトゥリファスから離れたのビジネスホテルの一室に滞在していた。

日も沈み、三人は夕食を食べ終わると束の間の休息で体を休めている。

シャワーを浴びたダンテは上半身裸のままタオルで髪の毛を吹きながら我が物顔で室内をうろついているが、頬を赤らめるレティシアは気が気でない。

「ダンテさん！ 早く服を着てください！」

「そんなに怒る事ないだろ？ つい店に居る時の癖が出ちゃった」

「アナタを信用してボディガードの依頼をしましたが、女性が二人も居るのですからわきまえて下さい！」

「わかったって言ったろ？ それより本なんて広げて何してるんだ？」

レティシアに睨みを利かさねながら袖を通すダンテ。露出した肌が黒皮の服に隠される。

「数学の勉強です。聖杯大戦の最中とは言え時間があるのならやらな」と

「俺に緊張感がないとか言っただけか？ こんな時にお勉強か」

「数学……苦手なんです。それに本来なら私の体はジャンヌ・ダルクに授ける筈でした。そうでない期間が増えると途端に不安になって……」

「バッグの中にわざわざ入れて来たってか？ マジメなんだか融通がきかないんだかわかんねえな」

椅子に腰を下ろすダンテは備え付けのテーブルに高々と上げた足を降ろす。が、レティシアからの鋭い視線を感じるとゆっくり床へ戻した。

「で、アンタはこれからどうするんだ？」

「私は……」

か細い声で答えるのはうつむき加減にベッドに腰掛ける六導玲霞。アサシンとの戦闘が終わってからと言うものの、食事も取っていないければ水一滴さえも口にしていない。部屋に入ってからまともに言

葉さえ発さず、只々落ち込んでいた。

「サーヴァントが居なくなったらこの戦いに参加する必要もなくなつたんだろ？ どこかは知らねえがお家に帰んな」

「帰るような場所なんて……ないわ……」

「どう言う意味だ？」

「私は元々生贄だった、サーヴァントを喚び出す為の。死ぬ筈だった……でもあの娘は、ジャックは私を助けてくれた。死ぬ筈だった私を……アイツから助けてくれた」

「アイツ？ 生贄になる予定だったって事はアサシンの本来のマスターか？」

コクリと頷く玲霞。感情が希薄な彼女に対してもダンテはいつものようにポジティブに接する。

「アンタが昔何があつたかなんて詳しく聞くつもりはない。でも今はもう自由だ。人生は楽しく生きなきゃ損だぜ」

「じんせい？ 何をどう楽しめば良いの？ 自分の子ども同然に過ごして来た……短い時間だけど幸せをくれたあの娘はもう居ないの。それなのに……」

「ああ、人生相談なんて柄じゃねえ。お嬢ちゃん、変わってくれ」

教科書とにらめっこをしているレティシアは突然の事に握つていたシャープペンシルを落としてしまう程に動揺した。

「わ、私ですか!？ それは……ええつと……そうだ！ ジャンヌ・ダルクにお伺いを立たましよう！ 彼女の言葉ならきつとアナタを導いてくれます！」

「悪いが長つたらしい説教は隣で聞くのも御免だ」

「ダンテさんが言い出したんじゃないですか！ それにそれくらい我慢して下さい！」

「やれやれ、取り敢えず俺みたいにイケてる男でも捕まえるんだな。アンタは良い女だ、すぐに見つかるさ。子どもならソイツと作れ」

「子ども……」

「その第一歩として辛気臭い顔は止める。甘い物でも食えば気分も晴れるさ。もうそろそろルームサービスが届く筈だ」

言った傍から入り口の扉がノックされる。聞こえて来るのは少女のように可憐な声。

「ルームサービスをお持ちしましたあ！」

「来たか。風呂上がりにもストロベリーサンデーを頼んどいた。美味しいぞ」

立ち上がるダンテは軽快に歩を進めると入り口の扉を開けた。しかし目の前に居るのはホテルのボーイではない。ぱっちりとした瞳、ローズピンクの髪の毛は三つ編みにされて腰まで伸びている。黒い防具に白いマント。

目の前の人物は女のようにも見える。

更に用意されたカートに置かれているのは空になった三つの器。内側にはクリームとイチゴジャムの痕が残っている。

「オイオイ、食ったのか？」

「うん！ 見てたらお腹すいちゃって。えへへ」

「良いね、ストロベリーサンデーは確かに美味しいもんな」

「美味しくって全部食べちゃった！」

「折角だ、チップも払ってやるよ。受け取りな！」

銃声が響いた。ホルスターから引き抜いたエボニーから発射される一発の弾丸。

一メートルと離れていない至近距離からの発泡、普通なら額を撃ち抜かれて死ぬ。が、俊敏に反応すると向かって来る弾丸をつまみ着弾を防いだ。

「ふう、危ない危ない。酷いな、いきなり攻撃するなんて」

「知らないか？ 食い物の恨みは恐ろしいんだ」

「何度かやった事があるから良く知ってるよ。君がダンテだね？」

そっちが黒のアサシンの元マスターの六導玲霞。そしてルーラーの依り代であるレティシア」

「お前、サーヴァントだな。直接乗り込んで来るなんて中々根性あるじゃねえか」

「違う違う、ただバカなだけだよ。コソコソ隠れたりするの面倒だし。それよりも相談なんだけど、彼女……レティシアをこっちに譲ってく

れないかな？　大丈夫、痛い事は絶対にしないよ！」

銃をホルスターに戻すダンテだが、向ける視線はまだ警戒心を解いていない。

「はいわかりましたってなると本気で思ってるのか？　悪いがお嬢ちゃんは依頼人でね。途中でほっぽり出したら店の看板にも傷が付く」

「そこをなんとか！　ね、ね、ねえ！」

「ダメだね。それにストロベリーサンデーを食われた恨みもある」

「あッ!?　じゃあもう三つ……いや六つ持って来るから！　それなら良いよね?」

「ダメだ、俺は風呂上がりに食いたかったんだよ。待ってたら体が冷えちまう」

「そっか、ダメかあ。できれば話し合いで解決したかったんだけどね」

「だったらどうする？　やるか?」

ダンテの問い掛けに目の前の人物も視線を鋭くして答える。互いに覚悟を決めた。戦いの火蓋が切られようとしている。

「ボクの名前はアストルフオ。シャルルマーニュ十二勇姿が一人」

「へえ、英雄様は自分の名前も言わないくらい秘密主義かと思っただがお前は違うみたいだな。俺の名前はダンテだ」

「ダンテ……良い名前だね」

名乗り合う両者、さっきまでの会話はどこに行ったのかピリピリとした緊張感が漂う。部屋の中から様子を伺っていたレティシアは素早くダンテの背中に回ると、アストルフオに悟られまいとしながら囁く。

「ダンテさん、アストルフオが真名だとすれば相手は魔法の槍を持っている筈です。触れた相手を必ず落馬させる槍、あらゆる魔法を打ち消す本、吹くだけで相手を打ち倒す角笛」

「なるほど、良く知ってるなお嬢ちゃん。数学は苦手でも世界史は得意なのか?」

「ま、まあそんな所です」

さつとレテイシアは淡く光る端末をポケットの中に隠す。

真名を知られると言う事は自らの歴史を知られると言う事。それは得意とする武術や戦術、弱点さえも知られてしまう。故に聖杯戦争に参加するマスター、そしてサーヴァント自らも敵に真名を明かす事はない。

けれども目の前の人物はそれをあつさりと明かした。しかしそれが本当かどうかと言う保証はまだ持てない。

「お嬢ちゃんはアイツと一緒に部屋に隠れてな。コイツの相手は俺がする。なあ、アストルフオ？」

「そうだね。行くよ、ダンテ！」

「中々やるじゃねえか。でも芸術性が足りてねえな。見てろよ」

言うどダンテもダーツを掴みボード目掛けて投擲する。ダンテもアストルフオと同様に一投目を放つと、間髪を入れず次々に投げ続けた。

けれども狙いはアストルフオとは全く違う。突き刺さるダーツの数が増えていくとその全貌がようやく見え始める。

連続して放たれるダーツはハート型にボードへ突き刺さった。

「これぐらいやらないとな」

「おおッ!? でもこの場合点数はどうなるの?」

「うくん、そうだな……だったら別の奴で勝負だ」

エレクトリックダーツから離れる二人が次に向かうのは同じく室内競技。天井のライトに照らされるオイルが塗布されたレーン、その奥に並べられる十本の白いピン。

色とりどりのボールが数多く並べられているここはボウリング場。

「これなら優劣が付けられるだろ。ダーツはお前が先行だったから、ここは俺が先にやらせて貰うぜ?」

「良いよ! じゃあ一投目いってみよ」

黒いボールを掴むダンテはレールの前に立つ。けれどもその構えは通常のボウリングとは全く違う。まるで野球、左足を高々と上げて踏み込み体重移動させるとそのまま大きく振りかぶった。

「イイイイヤッ!」

風を突き抜ける轟音、高速回転するボールは加速しながら数メートル先のピン目掛けて一直線に飛んで行く。

瞬間、爆音が鳴り響き頂点のピンが真っ二つに割れて全てなぎ倒された。

「ハッハア! ストライク。次はそっちの番だ」

「よおし、ボクもストライク取るぞ!」

アストルフオもボールを掴み取るとピンに狙いを定めるがその投擲はボウリング本来の物とは全く違う。両手に掴んだボールをふわりと天井に向かって投げると同時にそのまま助走を付けて走り出す。

「いつけえええッ!」

重力に引かれて落ちてくるボール。アストルフオは地面を蹴り体を浮き上がらせるとボール目掛けて右手を振り下ろした。

スパイクと同時に轟音と衝撃。進むボールは空気を突き破りながら、目標であるピンに激突し全てをなぎ倒した。その中にはダンテ同様に何本か破損している物もある。

「ボクもストライク！ やったね！」

「やるじゃねえか」

「でもこのままだと二人ともずっとストライク取り続けて決着が付かないよ？」

「そうだな……だったら——」

また場所を変える二人が向かうのはビジネスホテルの外。月明かりの照らす空の元、日付も変わろうと言う時間帯でもあり人の姿は見当たらない。

「ねえねえねえ、次は何で勝負するの？」

「慌てるんじゃないよ。今度やるのは——」

「何をやってるのよアンタはアアッ！」

金切り声が響き渡る。思わず体をビクつかせアストルフオが視線を向ける先に居るのは白い制服を纏った女の姿。彼女こそがアストルフオのマスターであるセレニケ・アイスコル・ユグドミレニア。

ぎっくりと開けられた胸元とスカートのスリットから覗く脚線美からはエロスが漂う。灰色の長髪はポニーテールにされ、眼鏡を掛ける姿からは知性も伺えるのだが、激昂する今の彼女からはそのような様子は皆無。

鋭い視線は自らのサーヴアントを殺す勢いで睨み付け、歪む唇から見える歯からはギリギリと音が鳴る。

「アンタ、私が言った事を忘れたんじゃないでしょうね！」

「あ……アハハ。嫌だなあ、忘れてなんてないよ。本当なら話し合いで解決しなかったんだけどそうもいかなくて。だったらスポーツで解決しよう！ ってね」

「バカな事を言ってるんじゃないわよ！ 女一人連れて来る事もできないなんて。使えないにも程がある」

「ごめん、ごめん。ちゃんと連れて来るつもりだったんだって」

「もう良いわ、その必要はなくなつたから」

言うのと彼女、セレニケの傍に現れるのは同じ制服を纏う男達だ。彼らの瞳からはどこか精気が感じられない。そんな男達が抱えるのは気を失つたレティシアの体。

「あれ、どうやって連れて来たの？」

「そんなのどうでも良いでしょ！　　ったく、何で私が直接動かないとならないのよ……この女は私が連れて行く。アンタはその男を殺しなさい。邪魔になるわ」

「ええ〜!?　　戦うのお？」

「これ以上私を怒らせないで！　　言う事を聞かないなら令呪を使っても良いのよ！」

マスターに右手の甲に刻まれた三画の赤い紋章。令呪が光だすとセレニケは唇を動かす。

「令呪をもって命令する。その男を——」

「ああ〜ツ!?　　わかつたわかつたから！」

「私達が逃げるまでの時間くらいは稼ぎなさい！　　行くわよ」

アストルフオの動揺を前にして命令を中断するセレニケはレティシアを抱える男達と共にこの場を去って行く。

残るはアストルフオとダンテのみ。

「と、言う訳で……やっぱりこうなっちゃうか〜」

「大人しくここを通してくれればやり合わなくて済むぜ？　　悪いがお嬢ちゃんは返して貰う」

「それは無理！　　これでもボクはサーヴァントだからね。好きじゃないマスターの命令でも最低限の事はやらないとね。本当なら人質なんて卑怯な事はやりたくないんだけど、それがマスターからの命令。と言うより他のマスター達の総意かな？　　赤の陣営があんなのを用意して攻め込んで来るからさ。こっちもできるだけの準備はしないと」

「それがお嬢ちゃんてか？　　でもまだジャンヌ・ダルクは召喚されない。なのはどうするつもりだ？」

「さあ？　ボクもそこまではわかんないや」

アストルフオは右手を伸ばすと何も無い空間から武器を取り出す。現れるのは身長程もありそうな巨大な馬上槍。

黄金で彩色された馬上槍は芸術品として扱われてもおかしくない。アストルフオは槍のグリップを握るとその切っ先をダンテに向けた。「行くよ、ダンテ」

「OK、槍を使うって事はランサーってクラスか？」

「ううん、違うよ。ボクのクラスはライダー。ランサーは別に居る。でもこれ以上ペちやくちや喋り過ぎるとまたマスターに怒られそうだから」

「なるほど。それじゃ始めるか、アストルフオ……」

背中のリベリオンを掴むダンテも切っ先を相手に向ける。

第六話　片鱗

石畳の上を走る二人。互いの武器を握る右手に力を込め相手に向けて攻撃をぶつける。リーチの長い馬上槍を持つアストルフオの先制攻撃。鋭い一突きが繰り出されるが避けるダンテはリベリオンの届く距離にまで一気に詰め寄ると袈裟斬り。

けれども素早く反応するアストルフオは地面を蹴り後方に下がる。

「つとお。悪いけどリーチは保たせて貰うよ」

「そう連れない事言うなって。槍なんて使われたら一緒に遊べないだろ？」

詰め寄ろうとするダンテにアストルフオは右腕を突き出し容赦なく攻撃を繰り出す。

が、手応えはない。それ所か右腕を引き戻す事ができなかった。見ると切っ先を左脇に抱えるダンテが銀色の銃口を向けている。

「ッ!？」

気付いた時には遅い。甲高い銃声が響き渡り弾丸がアストルフオを襲う。

しかし腰の剣を引き抜くとこれを防いだ。

「銃を使うだなんて卑怯だぞ！」

「お互い様さ。そら、もういっちょ行くぞ」

左手にも銃を取るダンテはアストルフオの足元目掛けて二丁のトリガーを引き続ける。激しいマズルフラッシュと絶え間なく続く爆音。

石畳はたちまち粉々になっていく。

「うわあああつととととと!？」

ジタバタと足を動かし弾を避ける様は下手なダンスを踊っているよう。だがそれでもサーヴァントとして召喚された英霊。見た目は不格好でも弾は一発たりとも当たっていない。

「これ、もしかしてずっと避けてなくちゃいけない？ ダンスはもうこりこり！」

剣を握るアストルフオは地面を蹴り高々とジャンプする。降り注ぐ弾丸を振り切り、上空から重力のエネルギーも合わせて剣を振り下ろす。

「くらくー！」

「そうこなくつちやな！」

「からの〜」

リベリオンを引き抜きダンテも大きく振り下ろす。互いの刃がぶつかり合い激しい火花を上げる。

アストルフオのクラス、ライダーは接近戦が得意なクラスではない。だが戦う手段はそれだけではなく、秘策を持ってダンテと対峙する。

そしてその秘策は彼の背後から迫っていた。

「フオオオオッ！」

「あん？」

鋭い鉤爪が赤いコートを突き破り骨と肉に食い込むとダンテの体を持ち上げた。猛禽類を思わせる巨大な翼は空を仰ぐ。

その生物は現世には存在しない。上半身は鷲、下半身は馬と言う有り得ない生物。

「なんだコイツは？」

「ヒポグリフさ！ さあ、そのまま運んじやつて！」

「まったく……羨のなつてねえペットだ」

瞬間、空気が淀む。空気は凍てつき心臓を鷲掴みにされたよう。

恐怖、それは否応なしに相手の心の隙間へ入り込んで来る。ダンテは突き刺さる鉤爪を掴むと体から引き抜く。

その手は人間の物ではなくなっていた。鋭く伸びる爪、爬虫類を思わせる鱗のような皮膚。

アストルフオの指示はどんな事にでも従うヒポグリフはダンテのたつたそれだけの動作で彼を手放してしまう。

「っと、良い子だ」

重力に引かれて落ちて行くダンテは何事もなかったかのように地面に着地した。そしてヒポグリフは主であるアストルフオの元へと戻る。

「フオオオ」

「おお、よしよし。それじゃ、ボクはこれで帰るね！」

「おいおい、まだ始まったばかりだろ？」

「時間を稼げば良いって言われたし。勝負はまたの機会にお預けつて事で！ じゃあね〜」

言うどアストルフオはヒポグリフの背に乗りこの場を去ってしまった。大きく翼を羽ばたかせて空を飛んで行くヒポグリフにダンテは銃口を向けようとはせず、リベリオンを背負い大きくため息を吐いた。

「面倒な事になったな。今日は休むつもりだったが行くとするか。つたく、一人で深夜のドライブかよ」

空飛ぶヒポグリフは見る見るうちにダンテの元から離れて行く。背に乗るアストルフオは茶色の羽に包まれた首元を撫でると違和感に気が付く。

「どうしたの？ 震えてる……」

「フオウ……」

「ヒポグリフが怖がるなんて……ダンテって言ったっけ……」

後ろを振り向けど彼の姿はもう見えない。

戦いを終えてホテルに戻るダンテが目にしたのは部屋の隅で縮こまって震える六導玲霞だ。室内は綺麗な物でレイシアが居なくなってしまう以外の何も変わっていないように見える。

ダンテはゆっくり歩を進めると彼女の元へ近寄った。

「無事か？」

「え……ええ、何とか。ごめんなさい……」

「どうして謝る？」

「あの娘が連れて行かれそうになっても私は何もできなかった。こっやって震えてるだけで……」

玲霞は瞳に涙を貯めながら言葉を口にする。しかしダンテはレイシアの件に関して何も咎めようとはしなかった。

「気にするな。俺が失敗しただけだ」

「でも……」

「お嬢ちゃんは俺が何とかする。それよりもアンタはこれからの事を考えな。部屋は明日の朝にはチェックアウトしてくれよ。俺はもう行くぜ」

テーブルに置かれていくオープンカーのキーを手にするダンテは早々に部屋を後にする。玲霞は去って行く彼の背中を眺めるしかできなかつた。

／／／

進む空中庭園は雲の流れのようにゆっくりと移動しながら黒の陣営の拠点、ユグドミレニア城へと到着した。

既に決戦の狼煙は上がっている。玉座へ背を預ける赤のアサシンは魔術を駆使して決戦の様子を伺っていた。

「サーヴァントの数は六対六。向こうはアサシン、こちらはバーサーカーを失っている。しかしキャスターが殊の外使えん。それに我も空中庭園を制御せなばならぬ。どうするつもりだ？」

アサシンの問い掛けに答えるのはマスターのシロウ・コトミネ。この場に置いても彼は平静な態度のままだ。

「問題はありません。大聖杯は目前です。今回は私自ら戦場に赴きます」

「わかっているのか？ いや、忘れる筈もないか。今のお前はマスターだ。お前が死ねば必然的に私も消える」

「心配は要りません。私はこんな所で朽ち果てる訳にはいかない。この時を四百年待った……私の願いが成就された時、人類は救済される。怒りも悲しみもない世界へと生まれ変わる」

「人類の救済……それがマスターが聖杯に託す願い……」

二人が見下ろす大地では両陣営のサーヴァントが火花を散らしていた。黒のバーサーカーと赤のセイバーが互いの魔力を稲妻に変えてぶつけ合う。

「マスターは下がってろよ！ 行くぜ、バーサーカー！」

セイバーは銀色の鎧を纏い、右手には大剣を握り、鋭い視線を相手に向ける。黒のバーサーカーは白いドレスを着る虚ろな目をした少女。しかしバーサーカーのクラスは他のクラスとは異なり理性を持っていない。少女も八重歯をむき出しにしてセイバーを威嚇するが、発せられる言葉は獣のよう。

「うゝ うううッ！」

「でアアアッ！」

バーサーカーが握る宝具は両手で抱える程の巨大なメイス。それはセイバーが握る大剣とがぶつかり合い再び上空に稲妻が走る。が、互いにまだダメージは負っていない。

メイスと大剣が交わり鏢迫り合いになる。

「ぐぐぐウウウッ！」

「こんな物か、バーサーカー！ さつきと全力を出して掛かってこい。そうでないとテメエみたいな三下なんざ一瞬で殺してやるぞ！」

「ガアアアッ！」

一旦距離を離す両者。そして再び地面を蹴ると武器の射程距離にまで詰め寄る。

振られるメイスは空気を歪ませ、鋭い刃は空気を斬り裂く。ぶつかると、袈裟斬り、振り払う、横一閃。

地面にヒビが走り、放出される魔力は身体能力を飛躍的に上昇させる。いつまでも続くかのように見えた両者のぶつかり合い。

けれどもその軍配はすぐに上がった。

「ぐがアアアッ！」

「フンッ！」

バーサーカーのメイスの動きが止まった。

セイバーの空いた左手が鉄塊を掴み上げると彼女の動きをたちまち防いでしまう。

「ぐッ!？」

「だから言っただろ？ さっさと本気を出せってな！」

鋭い切っ先が少女の左肩を貫く。更にダメ押しで赤い雷を放出すると左腕が吹き飛んだ。

「ぐぎやああアアアッ!？」

自重を支える事もできず背中から倒れ込むバーサーカー。セイバーはチラリと切断面に視線を向けると、そこからは血の一滴すら流れていない。見えるのは何本もの配線とオイルだけだ。

「コイツ、人間じゃないのか？ へ、黒のアサシンはジャック・ザ・リッツパーで英雄でも何でも無い殺人鬼。お前は何だ？ 英雄所か人間ですらない継ぎ接ぎか」

セイバーの言う通り少女は元から人間ではなかった。人間を模して作られた存在。フランケンシュタイン博士が作り上げた機械人間。故に人間ならば致命傷のキズを負っても動く事ができ、故に人間ではできない事もできる。

少女は自身のリミッターを解除し宝具であるメイスを地面に突き立てた。

「がああアアアッ！ 私と一緒に……来い、赤のセイバー！」

視界を覆う程の稲妻が、雷が上空から降り注ぐ。全出力を開放して放たれるその一撃、まるで空に雷の樹木が生えているかのように。

少女は残る右腕に歯を突き立てると自ら引きちぎった。

「コイツ……何を!？」

「ぐウウウッ！」

引きちぎられた右腕から伸びるケーブル、バーサーカーは地面を蹴ると肩車のようにしてセイバーに組み付きケーブルを首に巻き付け

た。

瞬間、膨大な魔力と稲妻が一点に放たれる。それは最優のサーヴァントと呼ばれるセイバーでも防ぎ切れない程の。しかし同時にバーサーカーの体さえも朽ち果てていく。

「ゴイツ、宝具を使って自爆するつもりか!? でもな——」

周囲が閃光に包まれる。遅れて轟音と振動が周囲に響き渡った。

セイバーに逃げる暇などなく、二人の居た地点にはクレレーターが生まれていた。

「はあ、はあ、はあ……つたく」

しかし消えたのはバーサーカーだけだ。セイバーが纏う銀色の鎧はその殆どが破損していたが装着者である彼女自身は依然健在。それでもダメージを負うのは避けられなかったが。

魔術回路を通してマスターである獅子劫の声が聞こえる。

(無事か、セイバー?)

(これくらい……何ともねえよ……)

(だが令呪を使わなかったらやばかったろ? 相手は自滅覚悟の宝具を使って来たんだ。アレをまともに食らっていたらどうなったか)

セイバーがバーサーカーの宝具を防げた理由、それはマスターの令呪だ。令呪はサーヴァントに命令を聞かせるだけではない。一時ではあるが膨大な魔力を供給させる事で奇跡にも似た現象を起こす事が可能になる。

今回ののが正にソレ。令呪を一画使う事で全てを破壊するバーサーカーの宝具を防ぐ事に成功した。

(でも幸先が良いじゃねえか。アサシンとバーサーカー、これで二体倒した)

大剣を杖にして地面に立つセイバー。彼女はゆっくりと歩きだすとクレレーターに変化した地面を進んで行く。しかしその先ではまだサーヴァントが待ち構えている。

第七話 天魔失墜

クレーターを抜けてセイバーは歩き続ける。眼前にそびえ立つのは巨大な城、敵のねぐらであるユグドミレニア城。

バーサーカーを倒したが黒の陣営の攻撃がこれで終わる訳ではない。防いだとは言え宝具を受けたセイバーはボロボロの鎧のまま満身創痍で進んで行く。

「はあ、はあ、はあ……」

(すまん、セイバー。流石に全快させるだけの魔力は流せない)

「心配すんな。それより作戦通り頼んだぜ」

魔術回路のパスを通して会話するセイバーと獅子劫。二人は赤の陣営ではあるが他のマスターやサーヴァントとチームとして動くのではなく、動きやすい単独行動で敵陣に攻め入っている。

二人がこうしている間にも赤のライダーと黒のキヤスターが対峙しているし、ユグドミレニア城内から続々と現れるゴーレムやホームンクルス達を赤のアーチャーが次々に射抜く。

(わかってている。そっちが派手に暴れてくれたお陰でこっちは至って順調だ)

「よし……ならもう一発ド派手に行くかあ！」

セイバーの前に男が立ち塞がる。手には大剣を握り、纏う鎧は灰色。肩まで伸びる長髪をなびかせるのは黒のセイバー。

「赤のセイバーだな？」

「そっちは黒のセイバーだろ？ 探す手間が省けた。お前の首も頂くぜ」

剣を構える赤のセイバー。しかし相手は構えすら取らず無表情な顔を向けるだけ。

「バーサーカーとの戦いで酷くやられているな。そのような状態で俺に勝てるっても？」

「抜かせ、あの程度の相手何ともねえよ。手応えのある相手とやり合いたかった所だ」

「随分と見くびられた物だ」

「やる気がないならこっちから行くぜッ！ ハアアアッ！」

クラレントの柄を両手に握るモードレッドは黒のセイバーに向かって駆ける。しかし突如として彼女の足が止まってしまう。

目の前のセイバーが攻撃したからではない。どこからか飛来してきた剣のせいだ。赤のセイバーの眼前には地面に突き刺さる銀色の大剣。彼女はそれをどこかで見た事がある。鏢の部分にドクロの彫刻。

聞こえて来るのは軽々しいあの男の声。

「どうしたデンジャラスガール？ 随分とズタボロじゃねえか」

「このムカつく声……忘れもしねえ、ダンテだな！」

エンジンの甲高い音とマフラーから鳴り響く爆音、赤色のオープンカーが間に割り込んで来た。運転席から現れるのは真つ赤なコートをなびかせる長身の男。

「覚えててくれたのか？ 感激だねえ」

「さっさと忘れてえよ。それよりも何の用だ？ 邪魔するなら今度は殺すぞ？」

「こんなド派手なパーティーを自分一人で楽しむなって。俺も参加させてくれ。招待状は持ってないけどな」

「ケツ、良いぜ。だったらまずテメエから仕留めてやるよ！」

クラレントを振り上げるセイバーとリベリオンを地面から引き抜くダンテ。鋭い視線がぶつかる二人は再び剣を交える。

「ハアアアッ！」

「ハッハア！」

袈裟斬り、振り払い、横一闪。二つの刃が幾度もぶつかり火花が飛ぶ。互いに剣術の腕は一流。だがそのスタイルは全く違う。騎士として訓練したセイバーとデビルハンターとして経験を育んだダンテ。

構えを取るセイバーは威力がありながらも無駄のない動きでクラレントを振る。一方ダンテは決まった構えなどない。リベリオンの扱い方もチャンバラのそれだ。

二本の大剣が激突し鏢迫り合いになる。

「どうなっただよお前は！ 無茶苦茶な剣の使い方しやがって！」

「ああ、ガキの頃にオヤジに教わったんだ。お前はパパに教わらなかつたか？」

「パパだと？ 父上を侮辱するなッ！」

魔力を開放し力任せに剣を振り下ろすセイバー。斬撃は空間ごと断ち切る勢いでそのまま地面をえぐる。しかしその先にダンテは居らず、数歩下がった所でリベリオンを肩に担いでいた。

セイバはこめかみに青筋を立ててダンテを睨み付けている。

「テメエ……」

「悪かつたつて。そんなに怒るなよ？」

「俺の前で父上を貶す奴は誰だろうと許さねえッ！」

「だからどうする？」

「殺す！ うおおおオオオッ！」

剣を構え走り出すセイバーはダンテに向かって攻撃を繰り返す。バーサーカーとの戦いで負傷しているにも関わらず、その動きはさつきまでよりも早いくらいだ。

袈裟斬り、斬り上げ、再び袈裟斬り。休む暇もなく斬撃は続いていく。ダンテもセイバーの動きに合わせてリベリオンを振るう。

ぶつかる度に火花が飛び、互いに剣を振り続ける。ダンテは卓越した運動能力と反射神経で決まった構えなど取らずともすぐさま攻撃に移る事ができた。

しかもそのどれもがセイバーの攻撃に負けない程に強い。振り下ろすリベリオンを受けたセイバーの歩が二、三步下がる。

「ぐうッ!？」

「休憩した方が良くないんじゃないか？」

「うるっせえッ！」

口を動かしながらもダンテの攻撃は止まらない。距離を詰め斬り上げ、更に体全体を一回転させ逆袈裟斬り。

攻撃をクラレントで受ける事しかできないセイバー。そこにダンテは右手で銃を取り出しトリガーを引いた。マズルフラッシュと轟音が響く。

「ッ!?! でもなあ——」

腰を落とすセイバーは弾丸を避け、ダンテの両足を水平に蹴ると姿勢を崩させる。

「おお!？」

「取ったぞー!」

瞬時に立ち上がるセイバーは鋭い切っ先を突き出した。もう避ける暇はない。

だが必殺に思われた一撃を、指を出し剣の横腹を掴むとサーカスの雑技団のように逆立ちした。

「なッ!？」

「ハアッ! やるじゃねえか、デンジャラスガール」

あまりにも無茶苦茶な動きに思わず目が見開く。しかしそのわずかな隙が生じた間に彼女の視界からダンテの姿は消えていた。

「しまった。どこに――」

「後ろに居るぜ」

「ッ!？」

声の方向に振り返ろうとした時にはもう遅い。今度はセイバーの両足が払われ地面から離れる。

(やられる!?) でも魔力を開放すればある程度は防げる。それにコイツごと吹き飛ばしてやれば良いだけだ)

「つと。少し大人しくしてろよ?」

だがセイバーに攻撃は来なかった。痛くも痒くもない。気が付けば彼女の体はダンテの両腕の中で抱えられていた。背中を右腕で、両膝を左腕で、その抱え方はお姫様抱っこと呼ばれる物。

自分の今の状態を把握したセイバーは顔を真っ赤にして暴れだす。

「なッ!?! 何してんだよテメエは!?! 離せ、離しやがれ!」

「大人しくしろって言ってんだろ? あの優男は俺が相手する。選手交代だ、休んでな」

「だから必要ねえって言ってんだろ! アイツは俺がやる! それよりも早く降ろせ、このおー!」

「やれやれ、我儘なお姫様だ」

「ひめッ!?! お、俺は王になる男だ!」

「どっちでも良いよ。それより……」

トマトのように顔が真っ赤になる彼女を地面へと降ろす。地につき立ち上がりうとするセイバーだが、ダンテに肩を押さえ付けられて立ち上がれない。

一方のダンテは握るリベリオンの切っ先を黒のセイバーに突き付ける。

「デンジャラスガールはハーフタイムだ。ここからは俺がやる」

「余興は済んだか？ 貴公、ランサーと戦っていた男だな」

「そうだぜ、久しぶりだな」

「貴公の手腕は以前に見ている。ランサーと対等に戦えるだけの力。だが彼が全力を出していたとは言い難い。人間がサーヴァントに勝つなど並大抵の事ではないぞ？」

「そんなのやってみないとわからないだろ？ それよりセイバーが二人も居るとややこしくしてしようがねえ。お前名前は？ って、英雄様は秘密主義だったか……」

そう言うダンテに黒のセイパーは眉一つ動かさない。彼に軽口をどれだけ言われた所で精神状態が乱れる事はなかった。しかし黒のセイバーはその口を開く。

「良いだろう。貴公は聖杯大戦に参加するマスターでもサーヴァントでもない。礼儀を重んじるくらいマスターでも許してくれるだろう。俺の名はジークフリート」

「へえ、話を通じる奴じゃねえか。俺はダンテだ」

「ダンテ……相手をする以上、手加減はしない」

「上等だ。英雄様のジークフリートと戦える。こんな幸運、早々ねえぜ……」

第七話 天魔失墜

剣を握る二人はぶつかり合う。刃と刃が交わり、それだけで衝撃が生まれ周囲の空気が歪む。

ダンテが剣を振り下ろせば、ジークフリートも剣を斬り上げる。一

進一退の攻防がいつまでも続く。絶え間ない斬撃の乱舞。火花が舞い散り轟音が鳴り響く。

「流石は英雄様のジークフリートだ。良い腕してるじゃねえか」

「ダンテ、貴公は何の為に俺と戦う？ この聖杯大戦に参加もしていなければ赤のセイバーを助けに来たのも本心とは思えん」

「こつちも色々事情があつてな。お前らの所にアストルフオつて奴が居るだろ？ アイツにお嬢ちゃんを拐われた」

「お嬢ちゃん？」

「すんなり返してくれば俺だつて帰るんだけどな。どうする？」

ダンテからの問いをジークフリートは言葉では返さない。戦闘が始まってからも変わらぬ彼の表情。右手に握る愛刀、魔剣バルムンクの柄を両手で握り直すと彼は大きく振り下ろした。

「そうかよッ！」

「悪いがここから先は何人たりとも通す訳にはいかん。それがマスターからの指示だ」

「ならばっ倒すだけだ！」

ジークフリートからの一振りを押し返すダンテは再びリベリオンで攻め込む。袈裟斬りなどの斬撃を繰り返すがそれでは今までと同じ。相手は完璧に往なして来る。

「行くぜ、優男！」

リベリオンを目線の所にまで持って来るダンテは水平に構え、腕力で持ってジークフリートに投げ付ける。

「自ら剣を手放すだ?!」

「ダンスの時間だ！」

投げ付けられたリベリオンに一瞬ではあるが意識が途切れる。その隙を突きダンテはエボニー・アンド・アイボリーの銃口を向けてトリガーを引いた。

激しく光るマズルフラッシュと飛来する大口径の弾丸。

「ぐッ！」

バルムンクでリベリオンの投擲を受ける。が、リベリオンは弾かれる事なく空中で回転したままジークフリートを襲う。そして無数の

弾丸が鎧に直撃した。

だが彼に銃弾は意味をなさない。

「このような攻撃で！」

腕を振り払い弾かれるリベリオンは回転しながらダンテの手元へ戻る。

「どうなってんだよ？ 確かに鉛玉をぶち込んだ筈なのに」

「普通の人間と同じにして貰っては困るな。俺はサーヴァントだ。そうでなくともそのような攻撃で死ぬ事はない」

「(丁寧にどうも)」

言うところダンテはエボニー・アンド・アイボリーのトリガーを連続して引く。けれども狙うのはジークフリートではなく、彼より一メートル手前の地面。弾丸が地面に直撃し大量の土煙が上がる。

「目眩ましのつもりか？ その程度で！」

バルムンクで振り払えばたちまち突風が生まれる。土煙は途端に吹き飛ばされ、開かれた視界の先にはもうダンテの姿はない。

「こいつでどうだ！」

「上から来ようが！」

重力に引かれてダンテが真上から攻める。大きく振り上げたリベリオンをジークフリートへ叩き付けるが、彼も難なく攻撃を受け止めた。衝撃にジークフリートが踏ん張る両足を通し地面にヒビが走る。

けれどもダンテの攻撃はこれだけではない。以前に撒いた布石が全方位から相手を襲う。

「これは!？」

「そう言わずにもう一発くらい貰つとけ！」

目眩ましの為に乱射した弾丸、それらは地面を弾いて反射する。無数の弾丸は幾度もの反射を得てジークフリートを軸にして戻って来た。

全方位から迫る銃弾。流星の彼の一瞬ではあるが動揺が走るが鎧はダメージを通さない。

「ぐッ!?!」

だが彼は自らの体を庇った。ダンテを押し返すと背後から迫る弾

丸を斬り払う。だが、その隙を見逃してくれる筈もない。

「フンッ！」

「俺はこんな事では死ねんのだ！」

鋭く突き出されるリベリオンの切っ先は彼の背中の肉を貫いた。そしてそれは心臓が位置する場所。激しい血しぶきが上がりダンテの顔を濡らす。

「取ったぞ、ダンテ！」

振り返るジークフリートにダンテの手がリベリオンから離れる。そしてジークフリートはバルムンクの切っ先を相手の心臓部に突き立てた。吹き出る血は同様に彼の顔も汚す。

だが、戦いの決着はまだ付かない。

「あん？ サーヴァントつてのは心臓ぶっ刺しても生きてられるのか？」

「それはこちらのセリフだ。心臓を貫かれて生きている人間などない」

「お前だつてそうじゃねえか」

「俺はもう人間を捨てた身。サーヴァントとしてではない。邪竜ファヴニールの血を浴びた時から、俺は人々の願いを叶える願望機になった」

「何だそりゃ？ お前、聞いてもない事をペラペラ喋るタイプか。気をつけないと嫌われるぜ」

「フツ……そうだな……」

体到大剣が刺さった状態で会話する二人の光景は異様だ。傷口からは止めどなく血が流れ出ているが気にも留めていない。

「ダンテ、お前は何の為に戦う？ 何の為に生きる？」

「哲学か？ 悪いが考えた事もないね。晩飯にはオリーブを抜いたピザ、デザートはストロベリーサンデー。シャワーを浴びてベッドに入れば朝までぐっすりだ。後はたまたまに悪魔共をぶっ倒せば気分は爽快さ」

「お前には欲があるのだな。俺には何もない。空虚な心だ。自らに望みがなければ、他者の望みを叶えればこの空っぽの中身も埋まるので

はと考えていたがそんな事はなかった。人々は様々な願いを俺に託し、俺は様々な願いを叶えてきた。希望も夢も未来もない虚しい生だった」

「当たり前だろ？ そんなのは人間の生き方じゃねえ」

「ならば教えてくれ。どうすれば俺は人間に成れる……人間に戻る事ができる……」

「知るか。どいつもこいつも俺に人生相談して来やがって。俺は神父様じゃねえんだぞ？ それよりも縁遠い、悪魔をぶっ倒すデビルハンター。でも今じゃ、サーヴァントなんて奴らとも戦ってる」

「実に楽しそうに生きているな。貴公は」

「人生つてのは刺激があるから楽しいんだぜ？」

言うどダンテは心臓部分に突き刺さる大剣を両手で引き抜き、対面するジークフリートも同様に体から剣を抜いた。魔剣バルムンクを杖代わりにするダンテは笑みを浮かべながら話を続けようとする。

「お喋りはここまでだ。仕切り直しといこうぜ」

二人は互いに剣を投げ合い元の持ち主へと返す。静寂した空気が周囲を包み込む。しかし、戦いは始まらない。

ダンテでもジークフリートでも赤のセイバーの物でもない魔力が新たに感じ取れる。それを見てセイバーはダンテの隣へ立つ。

「どうやらそうもいかなかったぜ。新しいサーヴァントだ」

「アイツか？」

視線の先に居る人物。全身を青いマントで覆い金色のマスクを被るのは、黒のキャスター。その声はマスクのせいにくぐもっているが男の声。

「何をしているのですか、セイバー？ 只の人間を相手に……このような前線に出るのは僕の性分ではないのですが、少々気になりましたね」

「キャスターか？ すまない、少し手こずってな」

「いいえ、むしろ手こずってくれたお陰で助かりました。僕の宝具を完璧な物にする為のね。その人間」

キャスターは右腕を伸ばすとダンテに指を突き付けた。思わず右

へ左へ首を傾げるダンテは隣に立つセイバーをじっと見つめるが、彼女は肘で脇腹をこつく。

「お前の事だよ」

「だよな。で、俺に何の用だ？」

「人間……と言うには些か正確ではありませんね。ですが呼び方など些末な問題。重要なのは僕の宝具に使用する炉心足り得るかだろうか。アナタは素晴らしい！ 魔術師とは違い魔術回路は持っていないようですが、その体から発生する魔力量は一級品だ！」

「おい、デンジヤラスガール。これって褒められてるのか？」

「ああ……多分な」

「その炉心って奴と俺と何の関係があるんだ？」

「簡単に言うって死ぬって事さ」

これだけのサーヴァントが揃っているにも関わらず会話だけが繰り広げられる奇妙な光景。そこでようやくダンテとセイバーはキャスターに剣を向けた。

「悪いがその話はナシだ。俺の話聞いてなかったか？」

「あんな格好してる奴だ。どうせ性格も陰気だろ？ 人と会話するのも久しぶりなんじゃねえか？」

「なるほど。友達にはなれねえタイプだな」

「違いねえ」

切っ先を向けられるキャスター。しかしマスクのせいでその表情や感情はわからない。それでも二人を前にして怖気づく様子は全くなかった。

「赤のセイバー、バーサーカーとの戦闘で体は満身創痍でしょう？ そんなアナタなら僕でも勝機はある。セイバー、僕は援護します。アナタは前に」

ジークフリートにマスクを向けるキャスターだが、彼はその指示には従わなかった。まぶたを閉じ剣を収めるとダンテと赤のセイバーから背を向ける。

「セイバー、どう言うつもりです？」

「マスターに呼ばれた。悪いが手は貸せない」

「見え透いた嘘を……セイバー！」

「同じ事を言わせるな。手は貸さん。ダンテ、貴公の生き様を俺に見させてくれ。それで何かがわかるかもしれない」

ジークフリートは歩を進めこの場から離れて行き霊体化してしま
う。景色の中へと消えて行く彼の姿に口元を釣り上げる。

「見たいなら勝手に見てろ。おい、デンジヤラスガール。俺もこの先
に用があつてな。さっさと終わらせるぞ」

「当然だ。キャスターなんざに手こずったらセイバーの名が廃る。そ
れより俺の足を引つ張るなよ？」

「こっちのセリフだ。付いて来れるか？」

黒のキャスターと赤のセイバーとダンテ。サーヴァント同士の間
決が始まる。

第八話 動き出す黒幕

黒のキヤスターは至って冷静だ。いや、悟っているとも言える。負傷しているとは言えセイバーと一対一で正面から戦って勝つなど困難を極める。が、彼は逃げも隠れもしない。

魔力を開放し、術式を組み上げ周囲の石や岩石を一点に集めていく。そして出来るのは主の命令に忠実に従う岩石でできた人形、ゴーレムが四体、五体と無数に生まれる。

セイバーは一步踏み出すと啖呵を切った。

「キヤスター、まさかこの程度で俺を止められるなんて思ってるのか？」

「まさか……このゴーレムは僅かな時間稼ぎに使えば充分。本命は僕の宝具」

「させる訳ねえだろ！」

地面を蹴り突風が舞う。先を塞ぐゴーレムの一体の頭上に現れたセイバーはクラレントを大きく振り下ろし一撃で粉碎した。

「流石は最優と呼ばれるセイバー。こんなゴーレムを倒すなど造作もないか」

「雑魚は消えろッ！」

柄を握り直し横一闪。ゴーレムでは逃げる事も防ぐ事もできず、鋭い刃が更に二体斬り裂いた。破壊されたゴーレムは元の岩石や石へと戻る。

戦闘が始まって僅か数秒の間に形勢はセイバーへと傾く。だがキヤスターにとってはその数秒で充分だった。魔法陣を展開しまた新たな術式を練り上げる。

「地ははに生まれ、風ちせいを呑み、水いのちを充たす。火ぶきを振るえば、病あくまは去れり。不仁は己が頭蓋を砕き、義は己が血を清浄へと導かん。霊峰の如き巨軀は、巖の如く堅牢で。万民を守護し、万民を統治し、万民を支配する貌を持つ」

「やらせねえって言ってんだよ！」

キヤスターの術式を阻止しようとセイバーは走るがゴーレムは倒

せども倒せども地中から生えるように生まれ続ける。

「チッ！ 雑魚がどれだけ集まってもなあ——」

轟音が響き渡る。戦うのはセイバーだけではない。この場には彼も居る。最強のデビルハンターが。

「イヤッハアッ！ どうしたデンジャラスガール？ まだ休憩が足りなかつたか？」

エボニー・アンド・アイボリーを構えるダンテは絶え間なくトリガーを引き続ける。ゴーレムと言えど元は岩石。大口径の弾丸が次々と岩肌を砕き頭部を吹き飛ばす。

マズルフラッシュはまだまだ光り続ける。弾丸は胸を突き破り、腕を吹き飛ばし、生まれてくるゴーレムと並ぶ勢いでバタバタと倒していく。

「銃も使った方が楽だろ？」

「そんな無粋なモン、騎士が使えるか。俺はこいつ一本で充分だ！」

「そうかい。なら、さっさとアイツをぶっ倒すぞ」

「言われるまでもねえ！ 俺がやる！」

両腕を左右に交差させトリガーを引くと二体のゴーレムが倒れる。そしてセイバーの宣言と同時にダンテも走り出すが、キャスターの術式も完了しようとしていた。

「デンジャラスガールには悪いが俺が一番乗りだ」

「抜かせ！ テメエなんぞに負けられるか！」

「汝は土塊にして土塊にあらず。汝は人間にして人間にあらず。汝は楽園に佇む者、楽園を統治する者、楽園に導く者。汝は我らが夢、我らが希望、我らが愛。聖霊ルーアハを抱く汝の名は原初の人間アダムなりッ！」

同時に剣を振り下ろす二人。だが切っ先がキャスターの体に届くよりも前に大地が大きく揺れ動く。地震か、地割れか、とても立っていられず剣を地面に突き立て何とか体を支える。

そして揺れの原因が現れようとしていた。周囲の地面がせり上がり、二人は危険を察知して後方へと逃げる。

「普通の揺れじゃねえな」

「多分、キャスターの宝具だ。これは思ったよりも不味いかもな……」
せり上がる地面の中央に立つキャスター。その姿は見る見る内に高くなっていく。地中から現れるのはさつきまでのとは比べ物にならない程に巨大なゴーレム。しかし、その体は岩石で形成されていない。

肉、屈強な筋肉と骨を持った体長一五メートルにも及ぶ巨人。キャスターは巨人の手の平の上に立っている。

「ケテルマルクト、お前はもう自由だ。僕の夢の実現の為、あの男を取り込み完全な存在となるのだ！」

一步を踏み出すゴーレム、ケテルマルクト。その歩みは地を揺らす。後ろに続く足跡には新たな草花が生まれる。

ケテルマルクト、それは原初の人間の模造。

第八話 動き出す黒幕

「あの男を取り込めば僕が理想とする世界……楽園が創造できる！
世界を！ 民を救える！」

一步一步進んで来るケテルマルクトを待ち構えるダンテとセイバーは、自らの頭身を遥かに超える巨人を前にしても口元に笑みを浮かべていた。

「石人形の次はデカブツ退治か。デンジャラスガール、動けるな？」

「誰に物を言ってる？ キャスターを討ち取るのは俺だッ！」

「そこなくっちゃな！」

地を駆ける二人。ダンテはリベリオン、セイバーはクレラントを手
に巨人の足元へと迫る。敵と認識するケテルマルクトは握り潰さんと手を伸ばすが、巨体故に動きは俊敏ではない。指先が触れる間もなく、二人の剣は両足を切断した。

「ハアアアッ！」

「デリヤアアッ」

刃は皮膚を斬り裂き骨を断ち切る。支えが失くなった巨体は重力に引かれゆつくり崩れ落ちて行く。セイバーはその瞬間、本命である

キャスターに狙いを定める。

「デメエを倒すのは——」

地面を蹴り魔力を放出するセイバーはロケットの様に加速し一直線にキャスターへ飛んで行く。赤い魔力の渦の中で剣を構えるセイバー。接近戦でその一撃を防ぐだけの力をキャスターは持ち合わせていない。

「来るか、セイバー……」

「この俺だああッ！」

両腕を大きく振り上げ袈裟斬り。魔法陣で防御の構えを取るキャスターだが、鋭い刃と高出力の魔力は意図も容易く斬り裂き、そのままキャスターの胴体まで真つ二つにした。

「無駄だよ……ケテルマルクトはもう止まらない……」

「何だど？　ぐうツ！」

崩れ落ちた筈の巨人は地に足を付け立っている。そしてその手はセイバーの体を鷲掴みにし握り潰そうとした。

もはや巨人はキャスターの指示に従うのではない。自らの意思を持って動いている。その傍らで、キャスターは自身の体が消えるその瞬間までケテルマルクトの姿を瞳に焼き付けた。

「聖杯への願いなど些細な物だった……完璧な炉心を取り込んだケテルマルクト……それさえ見る事ができれば僕は……」

「こいつ……斬った足がもう再生してる!?　があ、あ、アアアッ！」

屈強で巨大な手で握り潰す。たったそれだけの動きでセイバーの骨は軋み体が悲鳴を上げる。両腕を塞がれた状態では剣も使えない。

しかし彼なら銃が使える。轟音が鳴り響き銃弾が掴む指を吹き飛ばす。

「ダンテ!？」

「キャスターの野郎はやったか？　それなら……」

落下するセイバーを脇に抱えるダンテ、その体勢にセイバーは戦闘の真つ最中にも関わらず赤面してしまう。

「な!?　離せ、離せよ！　俺を女扱いするんじゃねえ！」

「わかってるよ。ちよつと待ってる」

そのまま着地すると抱えたセイバーを降ろす。地に足を付けた彼女は赤面しながらもダンテに詰め寄り胸ぐらを掴んだ。

「テンメエ、何回も何回も俺を女扱いしやがってッ！ 次にやったら本気で殺すからな！」

「悪かったよ。それよりもあのデカブツだ。キャスターは倒したんだろ？ どうして動いてる？」

見るとダンテが放った弾丸が吹き飛ばした指も切断面から瞬く間に新しい指が生え回復してしまう。そしてケテルマルクトは魔力を開放させ地面に手の平を向けた。ゴーレムが生まれるのと同様に石や岩石が集まり、巨人は身の丈程もあるこん棒を手にした。

「アイツ、炉心とか言ってたな。憶測だが炉心に当たる部分を破壊すれば止まる筈だ」

「それで……その炉心の場所は？」

「わかれば苦労しねえよ。マスター、どう思う？」

魔術回路を通してマスターである獅子劫に問う。別行動を取る彼にもセイバーを通じて状況だけは理解できていた。

（断言はできない。だが一五メートルはある巨体だ。全身に魔力を供給するとすれば頭部か心臓か）

「頭か心臓か……どっちだ……」

「悩んでもしょうがねえ。だったら俺は心臓をやる。そつちは頭だ」

「おい、勝手に決めるな！」

「向こうもそう待ってはくれないみたいだ。来るぞ！」

岩石で形成されたこん棒が巨人の頭上から振り下ろされる。二人は瞬時に散開し、数秒後には轟音と衝撃が響き渡った。

「チッ、アイツに言われて動くなんてムカつくけどよ、今はこのデカブツを倒すのが先だ。マスター、心臓を狙える位置に行ったら一気に宝具を開放する。行くぜ！」

地を駆けるセイバー。巨大なだけで動きの鈍いケテルマルクトへ肉薄するなど容易い。が、その考えは早々に捨てなくてはならない。

ケテルマルクトの動きは刻一刻と進化する。巨体にも関わらず動きは人間と同じ。

「さっきまでと動きが違う。チイツ！」

振り下ろされるこん棒を避けずにクレラントで受ける。地面にヒビが走るが物ともせず、剣を振り払い岩石のこん棒を破壊した。

「これならー！」

けれどもまだ勝機は生まれない。ケテルマルクトは地面に向けて手を掲げ再び武器を精製する。しかし今度は岩石のこん棒など幼稚な物ではない。集まるのはガラスの光沢を持つ黒い岩石、黒曜石と呼ばれる物。

作り上げるは両刃の剣。無骨な見た目とは裏腹にその刃は鋭い。

ケテルマルクトは両手で柄を掴み黒曜石の剣を振るう。

「早い!？」

「遅いぞ、デンジヤラスガール！」

エボニー・アンド・アイボリーを前方に交差して構えるダンテは目にも止まらぬ連射を見せ付ける。絶え間なく続くマズルフラツシユはライトを点灯しているよう。そしてマシンガンの如く発射される大口径の弾丸は、セイバーに振り下ろされる黒曜石の剣の動きを止める。

「ダンテ!？」

「時間を掛けると余計に面倒だ。さっさと決めるぞ！」

「わかってるよ！ 黙って見てろ！」

走るセイバーはケテルマルクトの剣先から逃げるとダンテもトリガーを引くのを止めた。振り下ろされる刃は大地を叩き割り衝撃は空気を揺らす。

クラレントを両手で構え切っ先を天に向けるセイバーは自身の魔力を開放させた。

「全力開放で行くぜエエツ！」

彼女が握る白銀の大剣がその姿を開示する。鏢に当たる部分が左右に展開、全身から放出する禍々しき赤黒い魔力。

赤い雷鳴が轟き大地が揺れ動く。宝具、彼女が放つ一撃必殺の技がケテルマルクトの心臓部に目掛けて放たれようとしていた。

「クラレントオオオ——」

けれどもダンテも負けてはいない。セイバーに先を越されまいとケテルマルクトの両足の間へ潜り込み、リベリオンで両足首を斬り刻む。

幾ら再生能力が早いケテルマルクトでも切断された足を回復させるのに数秒は掛かる。再び自重を支えられず落ちていく巨人に、ダンテはまだ攻撃を止めはしない。

「こんなもんじゃねえぞ。ぶっ飛びな！」

突き出された切っ先は天を向く。リベリオンはケテルマルクトの腹部を突き上げその巨体を空中へと打ち上げた。そしてエボニー・アンド・アイボリーを取り出し心臓部に狙いを定め撃ちまくる。

鳴り響く銃声、弾丸は巨人の胸板をボロボロにした。けれども決定打はまだ与えられていない。

「あのムキムキの筋肉をぶち抜くには銃じゃダメか。オチオチしてたらデンジャラスガールに先を越される。やっぱコイツでぶった斬るしかねえか」

銃をクルクルと回しながらホルダーに戻すと背中のリベリオンを手取る。地上に向かって落下して来るケテルマルクトの心臓部目掛けてダンテは地面を蹴り飛んだ。真っ赤なロングコートをなびかせ空中を突き進んで行く。

そしてそれはセイバーも同じ。全身に赤黒い魔力の渦を纏いながら、頭部目掛けて一直線に進む。放たれるは必殺の一撃。

「ブラッドアアアアアアアアッ！」

白銀の大剣から放たれる赤雷、高濃度に凝縮された魔力はまるでビームのように発射され、無抵抗なケテルマルクトの頭部に直撃した。

凄まじい再生能力を誇るケテルマルクト。だがセイバーの宝具を跳ね除けるまでは到達していない。時を同じくしてダンテも心臓部にリベリオンを突き立てた。

「ハアアアッ！」

空中で繰り出されるリベリオンの鋭い突き。それはミサイルか、ダンテの体ごと突き進む剣は空気の層を突き破る。瞬間、ダンテの体

に雷が走った。

ダメージを受けたのではない。彼の姿はその時、異型の者へと変化していた。全身は爬虫類を思わせる鱗、肉を斬り裂く為に発達した鉤爪。見られただけで震え上がる鋭い眼光。

しかし、人成らざる姿が見えたのもこの一瞬だけ。

空中で突き進むダンテ、握るリベリオンの切っ先はケテルマルクトの分厚い胸板を一撃で破壊していく。肉をぶち抜き、骨を粉碎し、そしてそのまま心臓を突き抜け背面から出た。

「ハッハア！ 惜しかったな、デンジヤラスガール。俺の方が早かった」

「馬鹿言うな。今回は俺の勝ちだ」

ケテルマルクトの急所を破壊した二人はそのまま地面へ着地すると後ろに振り返る。巨人の体は地上に落下する間もなく光の粒子となり消えて行く。沈黙が周囲を包みながら、残るのは炉心として使われた物。

否、それは物ではなく人間の形をしている。

「おい、デンジヤラスガール。今度は何だと思う？」

「だから俺に聞くなって。でもまあ……お前を炉心について言っただくらいだから、人間を使っただんじゃねえの？」

「なるほどな」

言うどダンテは地面に横たわる人物へ歩み寄る。その人間はまだ幼い少年。下着を付けるだけで他は全裸の肌は生白い。息はか細く表情も蒼白としている。片膝を付くダンテは少年に呼び掛けた。

「ボウズ、生きてるか？」

「ハア……ッ……あ……」

「こりやヤバそうだ」

「ヤバイなんてもんじゃねえよ。コイツはホムンクルスだ」

「ホムンクルス？」

「ああ、巨人の炉心に使う為だけに作られたんだろ。コイツの体には魔術回路が通ってる。でももうズタボロだ。どうやったって治らない。後は死ぬだけだ」

セイバーはマスターである獅子劫の言葉を代弁する。ダンテはそれを聞いても尚、この場から動こうとはせず少年の体を抱え上げた。「どうするつもりだ？」

「こんな所に置いておく訳にもいかないだろ。取り敢えず車のシートにでも寝かせてやる。お前は先に行つてろ」

立ち上がり歩を進める。セイバーは彼を止めようともせず、かと言つて先に進む事もなかった。背を向ける彼の姿を睨むようにじつと見つめる。

けれどもダンテの歩みを止める存在が他にも居た。途中で退場した黒のセイバーだ。

「うん？ 英雄様か、どうした？ まさか今からやり合おうつてか？」

「そうではない。その少年、俺に預けてくれないか？」

「何するつもりだ？」

「すぐに終わる……」

言われてダンテは何も言わず少年の体をジークフリートに預けた。少年の体を抱えるジークフリートは片膝を付きもう一度地面に体を置く。そしてじつと少年の顔を見つめたまま。

「俺は間違いを犯していた。自らが考えるのではなく、誰かに回答を求めていた。他人の願いを叶えるばかり……そんな事では空虚な心はいつまでも埋まらない。ダンテ、短い時間だが貴公に出会えて良かった。ほんの僅かではあるが人としての生き方がわかった気がする。俺が本当にやりたい事も……」

ジークフリートは自らの左胸を鷲掴みにした。爪が皮膚を突き破り指が肉に食い込んでいき血が滴る。赤のセイバーは彼の行動に思わず目を見開く。

「お前、何してんだ!？」

「この少年を助ける……それが今の俺にできる唯一の事だ。俺のやりたい事……サーヴァントとして現世に召喚されてようやくわかった。正義の味方……」

「ホームクルスを助ける事が、正義の味方なんかになる事がお前の願いなのか!？」

「そうだ。子どものような願いと笑うか？」

そしてジークフリートは自らの心臓を取り出した。人間を超越した存在故か、このような状態になってもまだ彼は生きている。そして握る心臓は鼓動を続けており、ジークフリートは心臓を瀕死の少年へ掲げた。

心臓は吸い込まれるように少年の体内へ入って行く。

「これで少年は助かる」

「でも、それじゃあお前が!？」

「そうだな、俺は死ぬ。だが少年は助かる。これで良い……俺は二度目の生など要らない。彼を助ける事ができて本望だ。俺の願いは成就した……」

ジークフリートの命の灯火が消え行くのと同じくして、死にかけていた少年の肌の血色が正常に戻りつつある。

サーヴァントである彼は光の粒子となり、空の星々に溶け込むようにして現世から姿を消した。

「やれやれ……どうせならガキのお守りまでやれよ。一体、誰が面倒見るんだ？」

「俺は無理だぞ。マスターもな」

「俺だつてベビーシッターと子守りの仕事は引き受けねえようにしてるんだ。でも、しょうがねえか。取り敢えず車に置くか。そしたらそのまま城に乗り込もうぜ。デンジヤラスガール、乗るかい？」

「お前に借りを作るのは癪だが徒歩で行くよりは早い。乗らさせて貰う」

「なら付いて来な」

ダンテは何度目か少年を抱え上げると真っ赤なオープンカーに向かって歩き出し、セイバーも彼に続いて行く。

後部座席に少年を横たわらせてダンテは運転席、セイバーは助手席に乗り込み目的地へ視線を向けた。

「あの城が黒の陣営の本拠地か。でもなんだ？ 随分と周りが静かになつてねえか？」

「静かだど？」

クラッチを踏み込みキーを回す。エンジン音が鳴り響きマフラーから排気ガスが放出される。後輪が空回りし土煙を上げながら、ハンドルを握るダントはフルスロットルで車を走らせた。

進んで行く景色の中で、黒の陣営の動きが明らかに鈍くなっている。ゴーレムや武装したホムンクルス達は城内へ後退して行く。そして赤の陣営も、下がって行く彼らに攻め入ろうとはしない。

「どうなってる……いや、魔力の流れが変わってる」

疑問に思うセイバーだが、その答えを彼女はわからないしマスターである獅子劫でさえも今はまだわからない。

それを知るのは空中庭園に陣取るシロウ・コトミネのみ。玉座に背を預ける赤のアサシンの隣で彼は地上の戦況を覗いていた。

「大聖杯はもうすぐ私の手に……」

「黒のキャスターも落ちたか。だが本当にこのタイミングで良かったのか？　せっかく集まった他のマスターを殺すとは……」

「聖杯戦争とは最後に残った一人のみが万能の願望機を手にする事ができる。僕達以外の存在はいずれ邪魔になります」

「フフフツ、とても神父の言葉とは思えんなあ。魔力供給が断られた影響でライダーは勝てる筈の戦いに敗れた。黒のアーチャーと相打ちだな。まあそれも、マスターからすれば都合か」

「そうですね。黒の陣営に残るサーヴァントは二体。ライダーとランサー。どちらも僕の脅威足り得ない」

「だが赤の陣営はどうする？　セイバーはこのまま城へ乗り込むつもりだが、アーチャーとランサーはどう出るかわからんぞ？　ほら、噂をすれば影が現れおった」

空中庭園の玉座の間に来るは二体のサーヴァント。アサシンが言うように、赤のアーチャーとランサーが目の前に現れた。二人が向ける視線は殺気そのもの。相手の事を一切信用などしていないし、この瞬間にも襲い掛かる勢いだ。

一歩前に出るアーチャー、鋭い視線はそのままにドスの利いた声で口を開く。

「どう言うつもりだ、シロウ・コトミネ？　マスターとの魔術回路の接

続が途切れた。ランサーもだ。私達のマスターはこの空中庭園に居る。貴様らが居ながらこの庭園が攻め込まれるなど考えにくい。それもマスターだけを。その余裕の態度も輪を掛けて怪しい。説明して貰うぞ？」

「ええ、良いですよ……」

第九話 我が名はジャンヌ・ダルク

笑みを浮かべて歩を進めるシロウ・コトミネ。アーチャーとランサーの前に立つ。しかし、彼が口を開けるよりも早くアサシンが事を告げる。

「全く検討が付かぬ事もあるまい。今は同盟を結んでいるがそんな者は束の間の契約。黒の陣営を亡き者にすれば、残った者同士で出し抜き合いをするだけ。この戦いが終わった後の事を考えていなかったとでも?」

「確かにそうだな。だが、汝の事しか考えぬと言う点では貴様も同類の筈だ」

「そうかもな。しかし状況は劇的に変化している。貴様らのマスターはもうこの世に居ない」

「懦弱なマスターなどに未練はない。アサシン、私を見くびるなよ? 魔力供給が絶たれようとも、貴様を倒す事など容易にできる!」

「試してみるか?」

煽るアサシンに殺気を漲らせるアーチャーは弓を手に取る。一触即発の事態にも関わらず、マスターのシロウ・コトミネは以前として冷静だ。

「アサシン、彼女とこの場で戦うのは時期尚早です。今の僕達では本気を出したアーチャーとランサーには勝てません」

「チツ……わかつている。ちよつとした戯れよ」

「アーチャーもランサーも、私の元を離れるにしても話くらいは聞いて頂けませんか?」

静かに頷き弓を戻すアーチャー。ランサーも同様に攻撃の姿勢は取っていない。

「私は大聖杯を必ず手に入れます。ですが御二方の願いも叶えます」

「……どう言う事だ?」

「それを説明する為にもアナタの願いを聞かせては頂けませんか?」

アタランテ……」

ギリシヤ神話に登場する女神アルテミスの加護を授かって生まれ

た純潔の狩人。それがアタランテ。

「私の願いはこの世の全ての子供らが愛される世界だ」

「なるほど……聖杯はアナタの願いを叶えてくれるでしょう。そしてその願いは私が思う願いと沿うものだ。ランサー、アナタが聖杯に思う願いとは何ですか？」

「俺が聖杯戦争で戦うのは俺を召喚したマスターの為だ。そのマスターが居なくなつたのであれば、シロウ・コトミネ……俺は貴様を殺す。それがマスターへ送る最後の手向けだ」

「そうですか……」

大槍を構えるランサーとそれでも尚、冷静な態度を崩さないシロウ・コトミネ。彼には隠された事実がある。

「ならばランサー、私と再契約をしてはみませんか？」

「再契約だと？」

「悪い条件ではないと思いますよ。アナタは私の為に戦う。それは前マスターの意向にも反していない筈です。それに私はアナタのマスターとは決定的に違う事があります」

「何だ、それは？」

「フフフツ、お教えしましょう——」

／／／

赤いオープンカーが止まる先は巨大な城門がそびえ立つ。だが黒の陣営の防御は薄く人の気配も感じられない為、ダンテは観光地に来た気分だ。

「着いたぜ。敵の拠点だ」

「黒のサーヴァントも残り二体だ。ライダーとランサー……どんな相手かは知らねえが戦闘力を考えるとランサーの方が厄介だ」

「ライダーなら知ってる。確か名前はアストルフオって言ってたな」

「アストルフオ？ 能力は？ 武器は何を使っていた？」

「俺に聞くより自分で確かめた方が早いぜ。アイツだ」

城門前に仁王立ちする一体のサーヴァント。ローズピンクの髪の毛を三つ編みにした小柄な体格、右手に握るのは巨大な馬上槍。

「やつほく、久しぶりだねダンテ。そっちは赤のセイバー？」

「ああ、それよりも良いのか？ 黒の陣営のアサシンとキャスターは俺達がぶつ倒した。そっちのサーヴァントは残り少ないんじゃないか？」

「アハハ、そうなんだよね。残ってるのはボクとランサーだけ。つまりボクが二番目に偉いつて訳！」

危機的状況でもアストルフオは以前出会った時のまま明るく気さくだ。車のシートから降りるダンテとセイバー。彼女は握る白銀の大剣の切っ先を相手に向け口角を上げる。

「へえ、二番目か……つまりぶつ倒されても文句は言えねえよな？」

「ボク戦うのはそんなに好きじゃないんだよねえ」

「だったら死ねッ！」

飛び出すセイバーは両手に握る白銀の大剣を振り下ろす。が、寸前の所に馬上槍に止められる。鋼と鋼がギリギリとぶつかり合い甲高い音を鳴らす。

「うわつとお!? 流石にこれは不味いかも？」

「どうした？ テメエの力はこんなもんか！」

「生憎とこんなもんでね。こう言う時は！」

アストルフオはセイバーを押し返すと巨大な馬上槍を前方に構える。すると槍全体が黄金に輝き始めた。

白銀の大剣で防御の構えるを取り攻撃に備えるセイバー。

「宝具か!? 面白え……来い！」

眩い光は時間と共に大きくなり、どんな強力な攻撃が放たれるのか。光は更に強くなり思わず目を塞がなければ前が見えない程に。

「コイツは!？」

身構えるセイバー。けれども見た目の派手さとは裏腹に魔力の流動は全く変わっていない。

「逃げるっちゃー！」

結局、何も起こらないまま強力な光が収まるとアストルフオは背を向けて全力で走り出した。見掛け倒し、否、目眩ましでしかない行動にコケにされたと感じるセイバーは、額に青筋を立てその背中を追い掛ける。

「待ちやがれ！ 背を向けて逃げるなどと、それでも英霊か！」

「それでも英霊だよお〜！」

「だったら俺と戦え！」

「や〜だよ〜！」

追いかけてつこを始める二人は城内へと入って行く。ダンテはその二人を止めるでもなく、助けた少年を後部座席に置いたまま歩を進めた。

「あつちはデンジャラスガールに任せるか。俺はお嬢ちゃんを返して貰う」

リベリオンを背負い真っ直ぐ通路を進んで行く。行く先はわかっている。アストルフオの物でもセイバーの物でもない魔力の流れ。黒のランサーしか考えられない。

床一面に敷かれた真っ赤な絨毯。壁にはロウソクに火の付いた灯具が幾つか掛けられており進む先を照らしてくれる。

壁や天井、扉の一つまで装飾された城内はきらびやかと言う他ない。しかしダンテはそんな物に一切興味はないし目移りすらしなかった。求める物は唯一つ、そしてそれはこの先にある。

そびえ立つように巨大な観音開きの扉の前に立つダンテ。

「英雄様はここか……」

ドアノブを握ろうともせず足で豪快に蹴飛ばす。開けた先は空間が広がっている。ロウソクの火で明かりが灯され、天井には巨大なシャンデリア。歩を進めるダンテの前に居るのは三人。

白い制服を纏う長髪の青年、その隣には全身黒づくめで右手には槍を持つ金髪の男。そして足元には横たわるレティシアの姿が。

「王子様なんて柄じゃないが助けに來たぜお嬢ちゃん。お前がランサーとマスターだな？」

ダンテの問いに答えるはマスターである白い制服を纏う男。彼は横たわる彼女を抱き起こし両腕で抱えながら、ゆっくり、ゆっくりとダンテの元へ進んで行く。

「如何にも。私こそがユグドミレニア一族の当主であり、黒の陣営を束ねるマスターでもあるダーニック・プレストーン・ユグドミレニア

だ。ダンテ、君の事はこちらでも観させて貰った。只の人間とは思えぬ卓越した身体能力。サーヴァントと戦えるだけの戦闘力」

「褒めてくれるのは嬉しいけどよ、俺が欲しいのはそんなんじゃないわかってるだろ？」

「今と言う状況では君の存在は脅威になるかもしれん。故にここで死んで貰う」

「へえ、やれるもんならやってみな」

リベリオンを手取るダンテ。そして対峙するは黒のランサー。彼も右手に槍を持ち前に出ると正面に立つダンテと視線が交わる。口元に蓄える髪の毛と同じ色をした髭、深い彫りとシワ、開く口から聞こえる声は低く、気品と迫力が伝わって来た。

「たかが人間が余の許可なくこの地に足を踏み入れるなど万死に値する」

「オイオイ、良く見たらジジイじゃねえか。手に持ってるのは杖か？」
「蛮族と口は聞かぬ。死ね……」

空いた手を前方に掲げる。ランサーの禍々しき魔力が開放され、突如として地面から巨大な杭が無数に突き出した。杭はダンテに向かって走る。

「狂ったパーティーの始まりだ！」

ホルスターからエボニー・アンド・アイボリーを取り出すと向かって来る杭に照準を合わせてトリガーを引く。

マズルフラッシュと共に大口径の弾丸がマシンガンのように発射され、向かって来る杭を瞬く間に破壊する。けれどもランサーの攻撃はこの程度では終わらない。

「確かに……貴様は普通の人間とは違うようだ。だが余と対等に渡り合えるだけの力などない！」

「そいつはどうかな？」

ダンテのすぐ足元からも無数に杭が突き出した。けれどもダンテの反応も早い。ジャンプすると杭が体に刺さるよりも早く上に飛びトリガーを引く。

弾丸が杭を砕くが次は破壊しただけでは終わらなかった。折れた

杭から、破壊された杭の破片から新しい杭が生える。視界を覆い尽くす程の杭がダンテに迫り、同じだけの弾丸を撃ち込む。

「ハッハア！ やるなジジイ！」

だが全てを破壊はできない。背後からも迫る鋭い杭。ダンテはちらりと背後を見ると両脇でこれを挟み、ランサー目掛けて空中を飛んで行く。両腕をクロスさせトリガーを引きながら、回転して進むダンテ。

だがランサーは向かって来る弾丸を槍で振り払う。その一振りですべての弾丸が明後日の方向へと飛ぶ。しかしダンテの動きは止まらない。

ランサーの頭上まで行くトリベリオンを振り下ろす。

「なんだ、使えるじゃねえか。その杖、歩く為のじゃないかったのか？」

「どこまでも余を愚弄するか？」

「テメエをぶっ倒すまでだ」

「不愉快な……ならば少し本気を出してやろう」

リベリオンの刃を受け止めるランサーの槍。彼はダンテを押し返すと自らの槍を振るう。

地面に着地するダンテも素早く体勢を整えリベリオンで斬る。袈裟斬り、斬り上げ、逆袈裟斬り。だが刃はランサーに届かない。大剣と槍の刃がぶつかり合い激しい火花と轟音を上げる。

「ジジイはベッドに寝てろってんだ」

「寝るのは貴様だ。墓の中でな」

あらゆる方向から何本もの杭が迫り来る。一旦下がるとリベリオンで斬り払い、エボニーで撃ち込む。しかしそれは隙となる。一気に詰め寄るランサーが鋭い突きを繰り返しながらも何とか防ぐ。それでも背後から無数の杭が迫る中で、ダンテはリベリオンに魔力を流し込む。

「そう焦るなよジジイ。パーティーは始まったばかりだ」

投げ付けられるリベリオンは高速回転しランサーへ飛ぶ。槍の刃と幾度もぶつかり合い火花を上げるが、この位ではランサーを討ち取

る事はできない。

「舐めるなよ人間！ 貴様との遊びに興じている暇などない！」

リベリオンを弾き返す。明後日の方向へ飛んでは行くが、軌道を変えると主の元へと帰って行く。

その頃にはもう、ダンテは背後の杭を全て撃ち落としており、帰って来たりベリオンを右手で掴んだ。

「そう言うなって。それよりこんな社交ダンス、いつまで続ける気だ？ もっと激しく行こうぜ」

／／／

背後から追い掛けて来るセイバーから逃げるアストルフオ。戦おうとしないアストルフオに苛立つのはセイバーだけではなかった。マスターであるセレニケだ。

（何をやってんのよアンタは！ どこまで私を苛つかせれば気が済むのよー！）

「いやいや、これも作戦！ 作戦だから！」

（ただ逃げ回ってるだけの何が作戦よ！ もう良い、こうなったら令呪を使うしかないわね）

「ええッ!? わかった、わかったからあ！」

立ち止まり振り返るアストルフオ。それに伴いセイバーも走るのを止めて立ち止まると剣を構える。

「ようやく戦う気になったか？ 追いかけてこはもうお終いだ」

「まあそんな所。本当はもうちよつと時間が欲しかったんだけど」

「やる気になったなら何でも良い。さあ、武器を構えろ」

言われて馬上槍を構えるアストルフオ。しかし本気を出して魔力を開放する所か闘志すら感じられない。そんな調子では流石のセイバーでも剣を振れないでいた。

「何なんだよお前は！ 調子狂うな」

「マスターがやられた？ ダンテじゃない……となるとセイバーのマスター？」

「へへ、作戦成功って所だな。気が付いてるんだろ？ お前のマスターはもう居ない。つまり俺と戦うしかないって事だ」

セイバーとは別行動を取る獅子劫が狙うのはマスターの暗殺だ。人間ではサーヴァントに勝てない。故にセイバーに前線で暴れて貰い注意を引いている間に相手のマスターを殺す。そして彼はその作戦を成功させた。

薄暗い城内の一室、埃も漂うその部屋の中は血生臭く、一人の若い女がうつ伏せに倒れている。アストルフオのマスター、セレニケ・アイスコル・ユグドミレニアだ。

白い制服は自らの血で赤く染まり、整った顔立ちからはもはや精気は感じられない。獅子劫はショットガンに弾を込めると用の失くなった部屋から立ち去りながらセイバーと会話を続ける。

(作戦通り上手く行った。ライダーのマスターを倒した。マスターを失ったサーヴァントは魔力が尽きるまでは現界するが、それまでに再契約するマスターを見つければ復帰できる)

(そんな事はさせねえよ。ライダーはここで倒す)

(頼む。俺は残るランサーのマスターを狙う。マスターが居なくなつたとは言え油断するなよ)

「言われるまでもねえさ……」

会話を終わると獅子劫は気配を消して城内の通路を進み、セイバーも剣を引くとアストルフオに呼び掛ける。

「どうするライダー？　そうでなくとも形勢は不利だ。それともまた逃げるか？」

「うーん、黒の陣営としてこのまま戦うってのも良いんだけど……折角現世に召喚されたんだし、ボクはもつと広い世界を見てみたいな！」

「何だそりゃ？　英霊として戦う道を捨てるのか？」

「ソレはソレ、コレはコレ。でもキミがそれでもボクと戦うって言っただつたら、こつちも持てる全てを使ってキミと戦う！　それがシャルルマーニュ十二勇姿としてのボクの誇りだ！」

馬上槍を構えるアストルフオ、今度こそ本気だ。ここでセイバーが剣を構えれば、相手は宣言通り持てる全ての力を駆使して彼女に戦いを挑む。騎士として決闘の相手には申し分ない。

「でも逃げるッ！」

「はあ!? 待ちやがれ！」

「ごめ〜ん! あとちよつとで良いから。新月の夜になれば真名を思い出すみたいだからさ。それまで待つて」

「待つ訳ねえだろー！」

再び追いかけてつこを始める二人は城の置くへ進む。遮る者も居らず、ロウソクの火が夜の通路を照らし静寂が広がる通路で影が動き足音だけがドタドタと響く。

走るアストルフォは城内に複数ある扉を開けては進み開けては進み。セイバーも急いでその後を追いつけるが、アストルフォは入り組んだ城内の構造を知っている。

気が付けばその背中は見えなくなっていた。

「逃げ足だけは素早い奴だな。あれで英霊なのか? 兎に角、見つけ出して首を取ってやる」

見失ったアストルフォを見付けようと進むセイバー。そうして数分も歩いていると最深部へ到着する。そして視界に映るのは開けっ放しにされた巨大な扉と戦闘の形跡。

「サーヴァントの魔力……ランサーか!」

急いで扉を開け中に飛び込む。そこで目にした物はランサーと一対一で対等に渡り合うダンテの姿。

振られる剣と槍の乱舞。ぶつかり合う度に飛び散る火花。

ランサーは新たな侵入者の存在を感知すると槍を引き、一旦ダンテと距離を取った。

「赤のセイバーか? それにしてもライダーは何をしている?」

「アイツなら尻尾巻いて逃げたぜ。ライダーよりも前にまずはお前だ、ランサー」

「調子に乗るなよセイバー。そしてその蛮族もだ。貴様らを倒すくらいなら全力を出すまでもない」

槍を握る金髪の男、黒のランサーは現れたセイバーに向かって槍を掲げると声高々に宣言する。

それを聞くセイバーは口元をニヤリと動かし、ダンテの隣に立つ

た。

「よお、思ったより早かったじゃねえか」

「うるせえ、こっちはライダーに逃げられてむしゃくしゃしてるんだ。だから奴は俺が貰う」

「パーティーの招待状は持つてるのか」

「あるわけねえだろ？」

「上等だ。今日は激しい夜になる」

剣を構えるダンテとセイバー。ランサーはそれでも余裕の笑みを崩さない。

「フフツ、二対一であろうと余の優位は覆らない。貴様も、赤のセイバーも、我が領土に土足で踏み入る蛮族は余の手で葬り去る！」

槍を構えるランサーと臨戦態勢に入るセイバーとライダー。その後ろで見守るダーニツクはランサーの自信とは裏腹に焦っていた。

（不味いな。確かにこの地で戦うランサーの能力は強い。だが赤のセイバーとそのマスターに黒の陣営の状態は筒抜けだ。他のサーヴァントが乗り込んで来る可能性も高い。強いとは言え奴とて無敵ではない。令呪を使う手もあるが……まずはこの女を使うか）

見つめるのは気を失ったレティシア。抱える彼女を冷たい床の上に置くと直ぐ様、魔術回路から魔力を流し魔法陣を展開させる。

「調べは付いている。この女はルーラークラスの依り代。理由はわからんが未だに召喚はされていないが、お陰でこちらに優位に使う事ができる」

彼女の体構造が覗かれる。ルーラーの依り代とされた彼女の体、召喚の儀式も途中で終わったと言えど彼女の体は普通の人間と比べて代わりつつある。

体内から湧き出る高濃度のオド。そして背中全体に広がる令呪の紋章。

「やはりな。ルーラーは聖杯戦争の裁定を司る存在。他のサーヴァントを従える為の令呪も複数宿している。以前と変わらん。ならばこの令呪、私が頂く……」

レティシアを寝かせる床の魔法陣が強く光り輝く。ダーニツクは

右手を背中に触れさせ、左手を首に掛ける。

「さあ、裁定者！ ルーラーよ！ 貴様の令呪は大聖杯を手にする私の物だ！」

更に強く光り輝く魔法陣。そして掴む左手は彼女の柔肌に食い込みくびり殺す勢い。そう、令呪を引き抜けば彼女の存在は必要なくなる。邪魔でしかない。故に躊躇なく殺す。殺すしか選択肢はない。

ルーラーとして正式に召喚されればダーニツクは間違いなくペナルティーを受ける。それが何なのかは想像が付かないが、いずれにせよ大聖杯が遠退く事にならない。

「アツハハハハッ！ この女が持つ全ての令呪も！ 大聖杯も！ 他の誰にも渡しは——」

「そんな事はさせません」

声が聞こえた。女の声だ。けれどもどこから聞こえたのか。セイバーの声ではない。ランサーでもライダーでもない。ならば誰なのか。

ダーニツクが令呪を奪い、殺そうとしている眼の前の少女。否、裁定者ルーラー。

「なッ!？」

「アナタに令呪を与えたりはしません。レティシアを殺させはしません。いいえ、もう指一本とて触れる事はありません」

「貴様は……」

展開する魔法陣が崩壊する。触れる指が何もされていないのに引き剥がされ、そして体ごと吹き飛ばされる。巨大な柱にぶつかるダーニツクは何とかこれ以上飛ばされずに済んだ。

視線を向ける先にはまぶたを開けるのも辛い程に眩く輝く人の姿。

「召喚したのか!? あの女がルーラーを?」

「ダーニツク・プレストーン・ユグドミレニア……」

収まる光、その場に立つのは少女レティシアと同じ姿をした別の何か。深い蒼の鎧を纏い、手には大きな旗を持つ。長いブロンドを三つ編みに束ねる彼女。

神々しくも凛々しいオルレアンの乙女。

息を呑むダーニツクに向かって彼女は言う。

第9話 我が名はジャンヌ・ダルク

第十話 バンパイアハンター・ダンテ

オルレアンの乙女と呼ばれた英霊ジャンヌ・ダルクは掲げる旗の先端をダーニツクへ突き付ける。彼女の瞳に睨まれるダーニツクは思わず額に汗が滲む。

「馬鹿な!? このタイミングで召喚するなど!?」

「その事を貴方に説明する必要はありません。それよりも重要なのはレティシアを手に掛けようとした事。聖杯大戦のルールを逸脱した行為。到底見逃せる物ではありません」

「くっ!? 殺すか?」

「いいえ、ですが貴方が聖杯を手にする事はもうありません。令呪を剥奪します」

「フフッ……ッアハハハ! 令呪を剥奪? そんな事はさせんよ。聞こえているだろ使い魔! 貴様の宝具を発動させる!」

ルーラーであるジャンヌ・ダルクを前にしてダーニツクは叫ぶ。その姿勢はどこか狂気じみている。そして彼の言葉を聞いたランサーの目の色が変わった。ダンテとセイバーを前にしながら、ランサーは視線だけで相手を殺す勢いでマスターであるダーニツクに振り返る。

「貴様、今何と言った! 宝具を使うだと?」

「もはやなりふり構っている余裕などない! 私は何としても大聖杯をこの手にし、ユグドミレニアを勝利に導かねばならん! 使い魔の心情など知った事か! 第一の令呪を持って命ずる!」

「貴様アアアッ!」

ランサーは激しい怒りの形相に変わると槍を片手に自らのマスターの元へと飛んだ。鋭い視線はもはやダンテもセイバーも、ジャンヌ・ダルクも写っていない。彼は自分の手でマスターを殺してでも宝具を発動させるのを止めるべく、ダーニツクに詰め寄る。

が、時は既に遅かった。

それはジャンヌが止める暇もなく、劇的に訪れる。

「待ちなさい!」

「英霊ヴラド・ツェペシュ! 宝具レジェンド・オブ・ドラキュリアを

発動せよ！」

「ダアアアニツクウウツ！」

切っ先は腹部を捕え皮と肉を突き破る。白い制服は血に染まり、勢いのままに体は壁に叩き付けられ砕けた壁が砂埃を上げた。

ランサーの一撃で瀕死の重症を負うダーニツクだが、血反吐を流しながらも口元は笑っている。

「フハハハハツ！ 大聖杯は……誰にも渡さん。令呪は残り二画……」

「ぐうツ!? 発動するのか、宝具が!? ダーニツク、余はあの宝具は使わん！ あのような無様な醜態を晒すくらいならこの場で自害してくれる！」

ダーニツクの令呪は発動しており、ランサーの宝具も本人の意思を無視して発動せんとする。苦しみながらも槍を抜くランサーが次に狙うのは自らの首だ。切っ先を天に向け、首に突き立てる。

「第二の令呪……大聖杯を手に入れるまでお前は生き続ける！」

ダーニツクが叫ぶと右手の令呪が眩く光り発動した。ランサーが握る槍の切っ先は寸前の所で自らの首を斬り落とせない。どれだけランサーが力を込めても槍は一ミリたりとも動く事はなかった。

「ぐうううツ!? もはや死ぬ事すら……がアアツ！ 違う、違う！

余は吸血鬼などではない。ワラキアの王でありヴラド二世の……」

「最後の令呪だ！ 吸血鬼ドラキュラ！」

「ガアアアツ！」

ランサーの体が？化していく。骨格から変わり、鋭く伸びる八重歯に大きく開く眼は赤く染まる。背中の皮膚が裂け、体内から黒い翼が生えた。腐食したように白くなる全身の肌。その姿はまさに吸血鬼ドラキュラと呼ぶに相応しい。

それでも、体が変化しようとするランサーの自我はある。三画目の令呪を使おうとするダーニツクを見るドラキュラは、彼が口を開けるよりも早く首に牙を突き立てた。

「グウウウ！」

「それで良い……我が血を体内に取り込め……そして……我が存在を

その魂に刻み付けろ！」

最後の令呪が光り輝く。ダーニツクの血を吸い取るドラキュラは両手で頭を抱えるとその場で悶え苦しみます。

「があああうウウツ!? どうなっている? 余が消える!? 流れ込んで来る!?!」

「アツハハハハッ! 令呪など奪われる前に使えば良いだけの事。そして我が肉体ももはや必要失くなった!」

「ダーニツク! 止めろ! 宝具を使うだけでは飽き足らず、余の尊厳さえも踏みにじるか!」

「私は大聖杯さえ手に入れられればそれで良い! 言った筈だ、貴様のような使い魔の心情などどうでも良いとな!」

ダーニツクが発動させた最後の令呪により、ランサーと彼の精神とが融合しつつあった。自我を保たんと抵抗するランサーだが、その身は魔力により召喚された存在。

どう足掻こうとも令呪の命令に逆らう事はできない。

苦しみ、暴れまわるランサーをジャンヌは見ている事しかできなかった。

「あれがランサーの宝具……レジエンド・オブ・ドラキュリア……」

「少し見ない間に服のセンスが変わったみたいだな」

「ダンテ……」

振り返った先には赤いロングコートを身に纏うダンテと赤のセイバーの姿。

「それよりもアイツは何だ? 普通じゃねえのは確かみたいだが」

「ランサーの体はマスターであるダーニツク・プレストーン・ユグドミレニアの精神に乗っ取られようとしています。もはや私の力でも助ける事はできません」

「そうか。だったら……」

ダンテはアイボリーを構えると躊躇なくトリガーを引いた。爆音と共に一発の銃弾が発射され、一直線に突き進むと苦しむランサーの額を撃ち抜く。穴の開いた頭部からはドス黒い血が流れ出すが、彼の体が倒れる様子はない。

「ダメだな。やり合うしかない」

「ダンテ、貴方は逃げて下さい。レティシアが依頼したのはあくまで私が召喚されるまでのガードの仕事。貴方はこの聖杯大戦の関係者でもありません。ここからは私一人で——」

「そう言うなよ。折角のパーティーを一人で楽しむ気か？」

「冗談を言っている場合ではありません！今のランサーは非常に危険です。貴方はそれがわかっていますか？」

「わかっているさ。だから俺がやる。お嬢ちゃんは城の中に居る奴らを非難させとけ。手加減できるかわからねえからな。それと外の車を傷付けさせるな。借金が増えちまう」

「本気なのですか!? あのランサーの姿、戦闘能力も飛躍的に上昇しています。普通のサーヴァントでも一対一で勝てるかどうか……」

「向こうがパワーアップしたならこっちだってパワーアップするまでだ」

「パワーアップ？」

「そら、さっさと行きな。車は頼んだぜ」

言われてジャンヌはこの場をダンテに任せ振り返ると傍に居るセイバーにも呼び掛けた。

「でしたら赤のセイバー。貴方もここから一度引いて下さい」

「アホ抜かせ。誰が引くだつて？」

「ランサーの宝具、レジェンド・オブ・ドラキュリアは戦闘能力を向上させるだけではありません。今の彼は吸血鬼その物。彼の牙に噛まれた人間も同様に吸血鬼になってしまう。だから私は城内の人を避難させます」

「あんなのが何体にも増えるのかよ？」

「彼は何としても止めなくてはなりません。吸血鬼が増えれば私達でも手に負えないかもしれません。ですから最優先で中の人間を遠ざけます。貴方とそのマスターの目論見も検討が付いています。騒ぎに乗じて聖杯を奪う考えなのでしょう」

「ケツ、何でもお見通しか」

「ですが今はその考えを捨てて下さい。貴方はマスターと合流し共に

中の人間を」

「……わかったよ」

頷くジャンヌと共にセイバーは背を向け走り出す。敵を前にして逃げ出すなど騎士として恥ずべき行為だが、サーヴァントとしてルーラーの指示に従わなくてはならない。

無視する事もできたが、彼女の言うように吸血鬼が増えれば聖杯戦争と無関係な人間まで巻き込まれてしまう。

それだけは何としても避けねばならない。騎士の誇りもそうだが、いずれは王にやらんとするセイバーはそちらを選んだ。

「でもよルーラー？ アイツ一人に任せて大丈夫なんだろうな？」

言ってたがランサーの強さはさっきまでとは比較にならねえぞ。それにダンテはサーヴァントじゃない」

「私はレティシアを通して彼の事を見てきました」

「あん？」

「もしもあのおとぎ話が本当なのだとしたら……魔剣士スパーダが本当に居たのだとしたら……彼は……」

そして残るのは吸血鬼と化したランサーとダンテのみ。背負うリベリオンを手取るダンテは、あれだけ忠告されたにも関わらず危機感どころか緊張感すら感じさせない。

「俺の本業はバンパイアじゃなくてデビルハンターなんだがな。まあそんなのはどうでも良い。楽しいパーティーの続きといこうぜ」

第十話 バンパイアハンター・ダンテ

リベリオンを構えてダンテは走る。そして以前として動きの止まったままのランサーにも変化が。撃ち抜かれた額から血が止まり、内部の弾丸が吐き出される。傷口は瞬く間に回復し、復活した吸血鬼ドラキュラが動き出す。

「やったぞ！ これで我が精神はサーヴァントと共に生き続ける！

人間、ダンテと言ったな？ 雑魚は消え失せろ！」

「そうかい！」

振り下ろされるリベリオンの刃。ランサーも握る槍を振るい火花が飛ぶ。更に剣を振るうダンテは立て続けに攻める。

袈裟斬り、斬り上げてまた袈裟斬り。ランサーも向けられる攻撃を槍で防ごうとするが、その動きはどこかぎこちない。

精神が融合したランサーであるヴラド・ツエペシユとダーニツク・プレストーン・ユグドミレニアが葛藤している為、肉体が命令の伝達に追い付かない。

けれどもそんなのは一時の物。バンパイアとしての本能が、血を求め、食料である人間を殺さんと牙を剥く。

「カアアアッ！」

「派手に行こうぜ！」

エボニー・アンド・アイボリーを取り出し至近距離から弾丸の雨を浴びせる。目を覆いたくなるマズルフラツシユと共に無数の弾丸がランサーに肉体を貫く。

しかしどれだけ撃ち込まれてもダメージを受けている様子はない。更にダンテはリベリオンで袈裟斬りし、胴体に巨大な傷を入れる。

「なるほど。パワーアップは伊達じゃねえってか」

「ガアアアッ！」

開いた手で握り拳を作り力任せに殴り付ける。人間を超えた、吸血鬼のサーヴァントが繰り出す攻撃はそれだけでも強力だ。空気が唸り、強靱な骨と筋肉により放たれる拳をダンテはリベリオンの腹で何とか受けるが、あまりの衝撃に体は後方に流されてしまう。

見るとランサーが受けた傷は数秒と経たず回復していた。

宝具レジェンド・オブ・ドラキュリアの能力が彼の身体能力を飛躍的に上昇させている。だが歴戦のデビルハンターであるダンテはこの程度では驚きもしない。

「ちよつとばかし頑丈になったみたいだな」

「舐めた口を！ もはや私は誰にも止められん！ 大聖杯を手にする

まではな！ 貴様を殺すなど虫を潰すに等しい！」

「やってみな」

「ガアアアッ！」

大きく口を開き雄叫びを上げるランサーは床を抉る程のパワーで蹴るとダンテに迫る。握る槍で鋭い突きを繰り返すも、横に飛ぶダンテは回避すると同時にトリガーを引く。

向けられる銃口にランサーは左腕で銃弾を受け止めると、無数の弾丸がポトポトと地面に落ちる。銃での攻撃は効果がないに等しい。けれどもダンテの口元はまだ笑っている。

「ほら、どうした？ もっと来いよ？」

「グルううう！ 何度やつても同じだ。たかが人間が私に勝てる道理などない！」

叫ぶランサー、そして背中の翼を大きく広げ羽ばたかせると、今度は上から攻める。

「死ねええええいッ！」

「そうこなくつちやな！ デヤアッ！」

次は天井を蹴り落下して来るランサー。向けられる矛先にダンテは真正面から挑み、リベリオンで力の限り薙ぎ払う。

鋼同士がぶつかり合い超音波のような音が響き渡る。揺れる空気、衝撃波。

ランサーは回復した左手を伸ばすと鋭い爪で肉を引き裂かんとする。振り下ろされる爪は空気さえも斬り裂くが、エボニーを構えるダンテは正確に狙いを定めてトリガーを引く。

銃弾は五発、指の関節部に撃ち込まれるも皮にはかすり傷も付かない。それでも軌道を反らすくらいはできた。

引き裂かれる空間は衝撃波を生み、避けるダンテの背後にある壁を鉤爪状にえぐる。

ちらりと振り返りその威力を目にするダンテは尚も挑発を止めない。

「どうした？ バンパイアってのはこんなもんなのか？」

「何をしている吸血鬼ドラキュラ！ さっさとあの男を殺せ！」

「グギャああアアッ！」

雄叫びと共にランサーの姿は霧となって消えた。

「あん？」

「殺す！」

再び現れた先はダンテの背後。その首筋に八重歯を突き立てるが、啞え込むのはリベリオンの刃だ。

「つと!? へへ、そうでないと張り合いがねえ」

「たかが人間が、私の邪魔をするなッ！」

「ハアッ！」

押し返すダンテ。ランサーは再び霧となつて消え不意を突き殺さんとするが、攻撃するには必ず実体化する必要がある。その一瞬さえわかればダンテには充分だ。

横からでも背中からでも真上からでも、ダンテに不意打ちは通用せずリベリオンで往なされる。

「どうなっている？ コイツは——」

「デアアッ！」

振り下ろされる刃がランサーの右腕を切断した。

吹き出る血、ぼとりと落ちる腕。だが流れ落ちる血はまるで糸のように動くと落ちた腕を絡め取り切断面にまで運んで来る。切断面同士が密着し、傷は瞬間に回復。しかし握っていた槍が手から離れてしまい唯一の武器が失くなってしまふ。

だが今の彼は吸血鬼。己の肉体だけで戦つてもサーヴァントを倒せるだけの充分な力がある。

「ガアアアッ！ 誰にも私の野望を阻む事はできん！ ましてや人間などにイイイ！」

「ああ、そうだな。爪の手入れでもしてやろうか？」

「今度こそ死ねえええい！」

両手の爪を駆使して原始的に引つ掻き回す。けれどもたったそれだけの攻撃で触れてもない壁や床を引き裂いていく。振り下ろされる爪の軌道上にある物は全て。

そんな規格外の相手を前にダンテは一步たりとも引かない。相手を見据えて剣を振るう。

「ハアッ！ ハッハア！ もつと来いよ。それとももう終わりか？」

「キシヤアアアッ！」

爪と刃が交わり火花が散る。リベリオンでチャンバラを幾度も繰り広げ、迫る引つ掻き攻撃を何度でも防いで見せる。袈裟斬り、振り払うとまた袈裟斬り、逆袈裟斬り。

飛び散る火花は激しさを増し、ダンテとランサーの攻撃は目に見えない程に早い。ぶつかり合う爪と刃。

「くびり殺してくれろ！」

業を煮やすランサーは首元へ左手を伸ばす。しかしダンテが見逃す筈はなく、鋭い切っ先が皮膚を突き破り骨を断つ。だが彼の動きは止まらない。リベリオンに左腕を貫かれながらも更に前へと伸ばし柄を握り締め、残る右手でコートの襟を掴むと吸血鬼の口元がニヤリと歪む。

「捕まえたぞ。もう逃さん！」

力任せに掴み上げるとコートごとダンテの体を後ろの壁にぶん投げた。コートをなびかせながら飛んで行くダンテは数秒後には壁にぶつかり土煙の中に隠れてしまう。

その土煙に向かってランサーは伸ばした爪の引つ掻き攻撃を無数に繰り返す。

「ガアアアアアア！ 粉微塵になるが良い！」

ランサーの言葉通り、その周辺はガレキへ変わっていく。床が削れ壁が失くなり、砕けた小石が無数に飛び交い煙が視界を遮る。

普通ならこれだけで肉が細切れになってしまう。だが攻撃はこれでは終わらない。

ランサーは鋭い瞳を光らせるとその体を？化させた。化物である吸血鬼から、その体は規格外に大きい大蛇へと？化する。大きく開かれる口は通路ごと飲み込まんとする程に大きく、全身を動かし煙の中に飛び込むと肉の一片さえもこの世に残さんと全てを飲み込んだ。

それでも残るのは巨大な体が飛び込んだ事による振動の余波とガレキの屑だけ。

「グウウウ……大聖杯は誰にも渡さん。後はセイバーとルーラーか。フフフツ、だが吸血鬼となったランサーの能力を使えばトゥリファス

中の人間を吸血鬼にする事もできる。混沌の中であの二人だどれだけできるか……そうすれば残る赤の陣営を攻め落とすなど容易な――

言葉が詰まる。声が出ない。

大蛇は動きを止め、静寂とする空間の中でどんよりとした空気だけがゆっくり流れる。膨大なオドの流れが渦巻き一点に流れ込む。それは大蛇の腹の中。

「ぐ……ガガ……」

渦巻く膨大なオドの流れは凝縮し、そして爆発した。まるで落雷が起きたように。

寸前の所で霧となりオドの爆発から逃れるランサーは実体化して前を見据えた。そして目にする、自らの眼前にいる存在を。

「何だ？ まだ生きているのか……」

「ああ、ピンピンしてるぜ」

吸血鬼の瞳に映るのは人間ではない。男の手には同様に鋭い爪が伸び、皮膚は真っ赤なコートと同化し爬虫類の鱗のよう。強靱な肉体は変わらず、銀色の髪の毛は逆立ち恐ろしい牙を向く。向けられる視線はもはや人間の物ではなく、鋭い眼光を受けただけで震えが止まらない。

「お前は……お前は!？」

「どうした？ そんなに驚く事があったか？」

「人間ではないのか……」

「お互い様だろ？」

目の前の男は人間ではない。闇の世界に生きる存在、悪魔だ――

「キシヤアアアツ！」

「トロいぜー」

吸血鬼は右腕を振り上げるが、それよりも早く悪魔の刃が振るわれた。振り下ろされるリベリオンから衝撃波と共に赤黒い魔力を飛ばす。

爪を振るう暇もなく、吸血鬼は体を胴体から真っ二つにされる。

「ぐがあああアアツ!?! コイツは……コイツは……」

「さあ、こつからが本番だぜバンパイア。杭はないが、その心臓にたっぷりぶち込んでやる」

軽快な口調はそのままに、悪魔は大剣を担ぎながら歩を進める。斬られた体を元に復元する吸血鬼だが、その心情はさつきまでとは全く違う。その事にダーニックは感づく。

「こいつ……震えているのか?」

人を超越する存在である吸血鬼。食物連鎖のピラミッドの頂点に位置すると言っても良い。だが悪魔は違う。彼らはピラミッドの外側の住人。

その事を吸血鬼は骨の髄まで、遺伝子の一片にまで刻まれている。故にヴラドの本能が叫ぶ。

吸血鬼では彼に絶対には勝てない

「行くぜ、メインディッシュの時間だ!」

「逃げなくては……」

翼を広げる吸血鬼は空を飛び悪魔から逃げようとするが、ダンテはエボニー・アンド・アイボリーを素早く構える。

足が地面から離れ飛び立つも、銃口から放たれる激しいマズルフラッシュと弾丸が威力を増して翼の片方を撃ち抜く。今までは銃での攻撃などダメージにならなかったが、激しい銃撃は魔力を帯びており一発一発がランサーへ確実にダメージを与える。

ズタボロになる翼は根本から折れ、体も床へ落ちていく。

「ぐうッ!?　せめて……せめてあそこまで!」

「オイオイ、さつきまでの勢いはどうした?　そう言えば……虫を潰すに等しいとか言ってたな?」

「行かなくては……」

もはや吸血鬼に戦意などない。生き残る為、目の前から逃げる為だけに必死になって足を動かす。

だが瞬間移動したかのように悪魔は突然目の前に現れた。

「無視するなよ。流星の俺も悲しいぜ」

「邪魔をするなアアアッ!」

八重歯をむき出しにして両手の爪で攻撃を試みるが、相手の肉を引

き裂くよりも早くダンテの蹴りが吸血鬼を襲う。無数の蹴りが腹部に叩き込まれ肉と骨が悲鳴を上げる。

数え切れない連撃を食らわせフィニッシュは顎を蹴り上げた。体が浮き上がり、背中が天井へ激突するとそのまま地面へと引っ張られる。

「グウウウ!! 行かなくては……」

「どこに行くつもりだ？ 悪いが追いかけてここはナシだ」

這いつくばってでも前に進むランサー。そんな彼の背中に容赦なくリベリオンの切っ先を突き立てる。だが今度はダメージが通らない。

霧となるランサーは攻撃を避けると振り返りもせず一目散にこの場から立ち去る。

「はぁ……結局こうなっちまうか」

リベリオンを肩に担ぐダンテもランサーが向かう先に向かって走る。彼が向かう先は大聖杯が保管された場所。

第十一話 嘲笑

霧となり逃げるランサーは振り向く事もせず一目散に進む。目的の物はすぐ目の前だ。実体化すると木製の扉をぶち破り、前のめりになりながらも前に進む。

「聖杯は……大聖杯だけは誰にも……」

吸血鬼となり戦闘能力が強化されたランサーが今や形無しだ。それでも形振り構っては居られない。背後からは悪魔が迫っているのだから。

震える体で腕を伸ばし扉に手を付くと力任せに吹き飛ばす。ようやく辿り着いた大聖杯の保管場所。が、目の前には見慣れない男の姿。その手に握るは黄金に光り輝く大聖杯。

「貴様、何者だ！」

「おや？ 私のお事をお忘れですか？」

「何なのだ……この震えはランサーの物ではない。私が怯えている？」

「初対面でもないのに自己紹介をすると言うのもやぶさかではありません。ダーニック・プレストーン・ユグドミレニア……」

「貴様は?! そんな馬鹿な!」

目を見開くランサーが見つめる先、大聖杯を手に取る神父の姿。それは赤のアサシンのマスターでもあるシロウ・コトミネ。

彼の体が震える原因はコレだ。

ゆっくり歩を進めるシロウは吸血鬼を前にしても笑みを崩さない。「何を驚く事があるのです？ 貴方が生きています。私が生きていても不思議ではないでしょう」

「くッ!? 忘れる筈もない。六〇年前、冬木の聖杯戦争で貴様と戦った。その時のサーヴァント、ルーラー!」

「ええ、そうですよ。貴方は魔術を行使して延命しているようですね。私とは少し違いますが」

「亡霊が! 大聖杯を渡しはしない!」

爪を突き立て牙をむき出しにしてシロウに向かって駆けるラン

サー。それでもシロウは落ち着いて行動を起こす。十字架を催したサーベルを一本取り出し、目前に迫る吸血鬼を捉える。大きく振り下ろされる爪を半身を反らして避け、その一瞬の隙に切っ先を心臓部に突き立てた。

本来ならこの程度の攻撃はダメージにすらならない。が、突き立てられた剣からは蒼炎が上がり吸血鬼は反撃すらできず悶え苦しむ。

「ぐがあああアアツ!？」

「私はルーラーであつたと共に今では聖職者です。吸血鬼の事は良く知っていますよ。その能力は確かに強力ですが同時に弱点も生まれる。浄化の力を持つ武器に弱くなる。こんな細い剣一本でも——」

引き抜くシロウは握る剣で更にX字に斬り付ける。吸血鬼の斬られた部位からはより大きな蒼炎が上がり、より大きな悲鳴が響き渡つた。

「グギャアアアアア!？」

「簡単に倒す事ができる。もはや立っているのもやつとでしょう。では祈りの時間です」

剣を構えるシロウ、最後の時を迎える吸血鬼に静かに詠唱を歌う。その唇から発せられる詠唱は吸血鬼が最後に耳にする言葉だが、悲鳴と絶叫、燃え盛る蒼炎の音のせいで彼の耳に届く事はない。

私が殺す。私が生かす。私が傷つけ私が癒す。我が手を逃れうる者は一人もいない。我が目の届かぬ者は一人もいない。打ち砕かれよ。

敗れた者、老いた者を私が招く。私に委ね、私に学び、私に従え。休息を。唄を忘れず、祈りを忘れず、私を忘れず、私は軽く、あらゆる重みを忘れさせる。装うなかれ。

許しには報復を、信頼には裏切りを、希望には絶望を、光あるものには闇を、生あるものには暗い死を。

休息は私の手に。貴方の罪に油を注ぎ印を記そう。

永遠の命は、死の中でこそ与えられる。

——許しはここに。受肉した私が誓うこの魂に憐れみを。キリエ・エレイソン——

喉元に突き立てられる最後の一撃。鋭い切っ先は空気を斬り裂き、吸血鬼の皮膚を貫かんとする。だが、吸血鬼を狙う存在はもう一人。銃声が鳴り響き、シロウが握る剣が弾き飛ばされた。

「ほう……もう来ましたか」

「そいつは俺の得物だぜ。勝手に横取りするなよな？」

赤いロングコートを身に纏い右手には銀色の銃、背中には鎧に罫體が彫刻された大剣を背負う男。歩み寄る彼の姿が影から現れる。

「ダンテ……彼女のボディガード」

「ああ、でもソイツをぶつ倒さないとクビになるかもな。だから譲ってくれないか？」

「そうですか。ですが、もう遅い……」

体に付いた蒼炎はもう消える事はない。力なく崩れ落ちる吸血鬼は全身が炎に包まれ肉が灰へと変わっていく。

もはや立ち上がる事も声を上げる事もできない。燃える蒼炎に冷たい視線を向けるシロウ。

「これでランサーも消えた。そして大聖杯は我が手に……」

「大聖杯ねえ……俺ならそんな胡散臭えのにわざわざ頼まねえよ。ああ、でも借金は返して欲しいな。そんなでもって札束のバスタブに浸かりたいぜ。デザートにストロベリーサンデーを用意して、ベッドでぐっすり寝た朝にはデリバリーでLサイズのピザでも頼むか。勿論、オリーブは抜きだ」

「私はそのように刹那的な欲求の為にこれを使ったりはしません」

「そうかい？ でもな、金だけじゃ欲求は満たせない。どれだけ金があってもできない事がある」

「そうですね。その意見には同感です。私の願いはどれだけの金塊や札束を積み上げた所で叶う事はない。この万能の願望機がなければ……ダンテ、貴方ならわかってくれる筈です。デビルハンターとして日夜、悪魔と戦う貴方なら……」

「俺の裏の仕事を知ってるのか。で、お前の願いは何なんだ？」

「ふふっ……私の願い。それは全人類の救済です」

シロウの口から発せられる大聖杯に託す願い。けれどもそれを聞

いた瞬間、ダンテは口から大きいため息を吐いた。

「やれやれ……何だってお前ら魔術師やサーヴァントは頼んでもねえのにそんな大層な願いを考え付くんだ？」

「おや？ 私の願いを理解して頂けないですか？」

「聞きたくもなかったぜ」

「では何故、貴方は悪魔を退治するのですか？ 理由もなく戦っているのですか？」

「ガキの頃に殺されかけたし、恨みもある……でも一番の理由は決まってる」

「ほう……」

リベリオンを構えるダンテは一気に詰め寄ると右腕を突き出した。ミサイルのように鋭い一撃が繰り出される。

しかしシロウも無防備にここまで来た訳ではない。召喚した赤のアサシンが影の中から現れると華奢な腕で切っ先を受け止めた。

その腕は黒い鱗で覆われており、リベリオンの刃を受けても傷すら付いていない。

「お前がその神父のサーヴァントか？」

「如何にも……相手なら我がなってやろうか？」

「良いね、刺激的な女は好みだ」

「刺激程度で済むと思うなよ？」

二人の鋭い視線が交わる。殺気が入り乱れ、火蓋を切るのはどちらが先か。

しかしリベリオンが振るわれるよりも早く、アサシンの技が発動するよりも早く、更にもう一人の乱入者が現れた。彼女は地面を蹴り飛び上がる、握る旗の矛先を両者の間に振り下ろした。

瞬時に反応する二人は後方に飛び退き、ダンテはリベリオンを肩に担ぎ、アサシンはマスターであるシロウを守る体勢に入る。

「無事ですね、ダンテ？」

「ああ、この通り。今からダンスパーティーをやるつもりだったんだ」「そうですか、良かった……我が名はルーラー、ジャンヌ・ダルク。赤のアサシンのマスター、シロウ・コトミネ」

ちらりと視線を向けるジャンヌは胸をなで下ろし、旗の矛先をシロウに向ける。同時にその凜々しい瞳も彼に向けたまま彼女は口を開く。

「いいえ、天草四郎時貞……貴方は以前の聖杯戦争で召喚されたルーラーですね?」

「ふふつ……今と言う時にはそのクラスは何の役にも立たない。そう、冬木での聖杯戦争が終わり六〇年。受肉した私はこの時が来るのをずっと待っていた」

「かつての英霊が望まれもしない人類の救済などと……」

「私はもう引き返すつもりはありません。立ち塞がるという言葉のなら……」

握る剣の切っ先を向けるシロウ。ジャンヌは怯む事なく言葉を続けるが、既に話し合う段階は等に過ぎている。

「今を生きる人々を尊いとは思わないのですか? ルーラーに選ばれた貴方なら——」

「その為の人類救済です。もう誰も、悲しい思いをしなくても良い」

アサシンの口元が笑う。高濃度の魔力の光弾が複数、天井を突き破りジャンヌに襲い掛かる。視線を移すジャンヌは構えを取るが、それよりも早くに背後から抱きかかえられた。

彼女の意思とは無関係に体が後方へ動く。

「ダンテ!」

「トークショーは終わりだ、お嬢ちゃん!」

ジャンヌを抱えながら右手に銃を抜くダンテは迷わずトリガーを引く。シロウに迫る弾丸だが、アサシンの鱗は容易に受け止める。

そして破られた天井からは更に多くの光弾が降り注ぐ。

舌打ちをするダンテはジャンヌを脇に抱えながら、光弾に狙いを定める。だが一発や二発で相殺できる威力ではない。

背中のリベリオンに手を伸ばすが、赤い残像が視界に映ると光弾を一振りの元に全て薙ぎ払う。

「逃げるぞ!」

「デンジャラスガール! 良いぜ、付いて来いよ!」

「うるせえッ！ さっさと走るぞ！」

敵対する二人に背を向けると一目散に走り出すダンテとセイバー。アサシンは右手を伸ばすと、降り注ぐ光弾がより一層激しくなる。突き破る光弾に残骸とガレキが飛び散りながら、二人は長い通路を駆け抜けた。

「ここであの女を倒そうとしたら城ごとぶっ壊れる。ムカつくけどな」

「でも聖杯は取られちゃったな」

「奪い返せば良いだけだ！」

振り返ると同時に大剣を振り下ろし、迫る光弾を撃ち返す。壁や天井を破壊しながら、セイバーは再び走り出しダンテに横並ぶ。

「取り敢えずマスターと合流だ。あのまま突っ込むのは幾らなんでも無謀だ」

「そう言う事もちゃんと考えられるんだな。戦うしか脳がない訳じゃないってか」

「俺の事を何だと思ってるんだ！」

逃げながらも言い争う二人の横で彼女の声はか細い。ダンテは脇をつつかれるとようやく視線を向けた。

「あ……あの！」

「あん？ どうしたお嬢ちゃん？ じゃなかったか、今は英雄のジャンヌ・ダルク様か」

「抱えて貰わなくとも一人で走れます！」

「そうかい？」

言うどダンテはジャンヌを手放し、着地する彼女も走り出すと彼の横に並んだ。

「こんな時じゃなけりゃ両手に花なんだがな」

「全く貴方は……」

「俺を女扱いするなッ！」

そんな三人を他所に、シロウとそのサーヴァントはユグドミレニア城を後にしようとしていた。右腕を下げるアサシンは踵を返すシロウに付いて行く。

「良いのか？ この場で仕留めずとも？」
「構いません。それより今は時間が惜しい。空中庭園に戻りましょう」
「わかった。マスターが言うのなら従おう。あのような雑兵、いつでも潰せる」

第十一話 嘲笑

城外へと逃げ延びる三人は空を見上げていた。同時に周囲の人間は何をするでもなくうつむいている。

否、人間と呼ぶには語弊があった。白い制服を纏う彼ら、彼女らはホムンクルス。ユグドミレニアが戦力として扱う為だけに作られた人造生命体。

その中で彼の存在はすぐ目に付く。ずんぐりとした体型、たるんだ二重あごと油ぎった顔。

かつて黒のセイバーのマスターだったゴールド・ムジーク・ユグドミレニアが短い足を懸命に動かしダンテに詰め寄る。

「一体これはどうなっている!? 城がボロボロに……いや、それよりもダーニックはどうなった？ ユグドミレニアはどうなるのだ!？」

「知るかよ。それよりもオッサン」

「私はまだそんな歳ではない!」

睡と一緒に怒号を飛ばすゴールドだがダンテは気にも留めない。上空に向かって指を指すと話を続けた。

「あのでっかいのが赤の拠点ならアイツラもあそこに行つた筈だ。ほら、ここから離れてく。この城には飛行機とかないのか？」

「そんな物を用意してある訳がないだろ!」

「うーん、どうするかな……」

顎に手を添えるダンテは見上げる空中庭園をまじまじと見つめた。大聖杯が奪われた今、飛行機を手配して潜入するのでは時間が掛かり過ぎてしまう。かと言って状況を打開する名案がすぐに浮かぶ訳もない。

数秒の間考えていたダンテだが、ちらりと視線を横に向けると二人の姿が現れた。セイバーのマスターである獅子劫と黒のライダーのアストルフオ。

「セイバーもみんな無事だな？」

「マスター!?! どうしてそいつが隣に!」

「まあ慌てるな。どうやら敵対するつもりはないらしい。それにライダーが居ればあの要塞にも乗り込める」

「本当だろうか?」

鋭い眼つきで疑いの眼差しを向けるセイバーにアストルフオはケラケラと笑顔を振り撒く。

「もう黒のサーヴァントもボク一人みたいだし、聖杯も持っていてちやつたんでしょ? だったら行くしかないじゃん! おいで、ヒポグリフ!」

アストルフオの声に応じて空から一匹の幻獣が降りてくる。巨大な翼を羽ばたかせ減速するヒポグリフはアストルフオのすぐ傍に着地し顔をすり寄せた。

「よしよし! じゃあ行こう、早い方が良いでしょ?」

「まあ、確かに。今だけは信じてやる。マスター、乗ってくれ」

ヒポグリフの背中に乗るアストルフオ、セイバーも獅子劫の腕を引くとそれに続けて乗り込ませる。この時アストルフオはある事に気が付いた。

「えッ!? もしかして全員乗るの? セイバーとダンテも?」

「それしか行く方法がないって言ったのはお前だろ。俺も!」

言うところセイバーは地面を蹴り背中に乗るとヒポグリフの膝が少し曲がる。首元を優しく撫でるアストルフオ。

「大丈夫う? 無理しちゃダメだぞ?」

「じゃあ行こうぜ! 飛ばせライダー!」

「わかったよ。ダンテはどうするの?」

「足にでも掴まっていくさ。アンタも来るんだろ? 英雄様?」

頷くジャンヌは視線を向けた。

ヒポグリフが両翼を広げ、重たい体を動かしゆっくり四脚が地面か

ら離れる。翼が羽ばたく時に生まれる風にジャンヌの前髪が揺れ、体が完全に浮き上がるとヒポグリフは空を飛ぶ。

ダンテは最後に振り返るとゴルドに呼び掛けた。

「オッサン、借りてきた車は頼んだ」

「だから何度言えばわかる！ 私はオッサンではない！」

「へへッ、行くとするか英雄様？」

「わかりました」

同時に地面を蹴る二人は右手で前足を掴む。

「フオッ！ 飛べるじゃねえか。で、何か言いたい事でもあるんだろ？」

どう見ても重量オーバーに見えるがヒポグリフは自在に空を飛び、移動を始めている空中庭園に向かっている。

ジャンヌは風の音の声がかき消されないように口を大きく動かす。

「ダンテ、今までレティシアを守って頂きありがとうございます」

「仕事を頼まれたからな。だが、こんな事になっちまった。アンタが召喚されなかつたらやばかった」

「少々強引ではありましたが、彼女を守る為です。本来なら私を召喚するには時間が足りていませんでした」

「でも居るじゃねえか」

「ですからルーラーとしての能力を完全には行使できません。ここから先の戦いでお役に立てるか……」

「心配するな。ケツなら俺が拭いてやる。それに今はアイツも居るしな」

言うどダンテはヒポグリフの背中に乗るセイバーに視線をチラリと移す。

「兎に角、今は時間がありません。彼の願い、人類救済……そのような願いを聖杯に託す訳にはいきません。彼は私が止めます」

「頼もしいこった」

ヒポグリフは翼を羽ばたかせ懸命に空を仰ぎ進む。幸いなのは大聖杯を自らの手で奪取する為にシロウは空中庭園をユグドミレニア城に近づけていた事。それでも目指す場所は雲よりも高い。

吹き付ける風が凍てつく。

／＼／

ダンテ達よりもひと足早く空中庭園に戻るシロウとアサシン。その玉座へ腰を下ろすアサシンは足を組み肘置きに腕を置く。

「雑兵共が追い掛けて来ているな。アーチャーとランサーを向かわせる。構わぬであろう?」

「ええ、任せます。私は仕事がありますので。この大聖杯を……ヘブンスフィールを発動させます」

「マスターの願い……人類の救済か……叶えてみせろ」

「ご期待に添えてみせます」

玉座を後にするシロウと魔術で外の様子を観察するアサシン。そうしている間にもダンテ達一行を乗せたヒポグリフが空中庭園に近づきつつある。

「我が庭園にケダモノなど……散れ……」

アサシンが意識を向ければ庭園を囲むように配置された全長二〇メートルを超える巨大な漆黒のプレートから強力な光弾が無数に発射された。

だがヒポグリフは幻獣、普通の動物とは違う。空中を縦横無尽に動き回り、それでも避けられない物は背に乗るセイバーが放つ赤雷が相殺していく。

「チイツ、忌々しい。アーチャー、ランサー、聞こえるな? 侵入者を排除しろ。それがマスターの指示だ」

アサシンの声を聞き、影から二人の姿が現れる。赤のアーチャーとランサー。シロウの謀略によりマスターを殺された二人だが、利害の一致により今は彼の元に着いている。

アーチャーの願いはシロウの思う願いと沿う物だ。

「アサシン……侵入者にあの男は居るか?」

「あの男? セイバーのマスターが一人、もう一人は我に刃を向けた愚かな男だ」

「アイツの相手は私がする。ランサー、異論はないな?」

「構わん。俺はセイバーとライダーを相手にする。ルーラーもとなれ

「少し骨が折れるがな」

「すぐに終わらせる……奴だけは私の手で仕留める」

歩を進めるアーチャーは再び影の中へと消えて行った。異様な雰囲気をかもし出すアーチャーに、ランサーもアサシンも何も言わず視線を向けるだけ。

けれども誰一人として気が付いていない。ダンテ達以外にも、この空中庭園に潜入する存在が居る事に。

闇の住人が声を潜め、人々をあざ笑っている事を。

第十二話 悪魔の力

空中庭園の真上にまで迫ったヒポグリフ。

地上に居た時にも感じていた事だが、その巨大な建造物の存在に獅子劫は舌を巻く。

「驚いたぜ……もう目と鼻の先だったのに細部はまだ米粒みたいに小さいな」

「何だマスター、ビビってるのか？」

「そんな訳ないだろ。もう聖杯戦争は大詰めなんだ。聖杯を手にして、終わらせる！」

ヒポグリフに向かって来るのは強風だけでない。空中庭園に備えられた防衛装置が、強力な魔力をレーザーのように発射して来た。

「みんな、振り落とされなさいよ！」

アストルフオが風にかき消されないように叫ぶと無数のレーザーが四方から襲い掛かって来る。翼を飛ばたかせ右へ左へ動く。だが相手のレーザーは無尽蔵に、数えきれない数が向かって来る。その数にアストルフオも少し顔を歪ませた。

「うゝえ!? ちょっとマズいかも」

「もつと近付け、ライダー！」

セイバーが叫ぶと赤雷が光り、接近するレーザーを撃ち落として行く。アストルフオはそれに応じ領くと、ヒポグリフも翼を折り畳み空気抵抗を減らし空中庭園に目掛けて一気に詰め寄る。空気をかき分け、加速するヒポグリフ。

全身の羽毛が激しく揺れながら弾丸のように突き抜けて行く。

その中でセイバーは獅子劫の腕を掴むと剣を右手に取り向かって来るレーザーを振り払った。激しい閃光を撒き散らしながら刃はレーザーを撃ち落とす。

「突入するぞマスター！ 一番乗りは俺達だ！」

「ここからか!？」

「おうとも！ 気合い入れろよ！」

ヒポグリフの背中から飛び降りる二人は重力に引かれて落ちて行く

く。それを見るダンテは隣のジャンヌに視線を向けた。

「こりやデンジャラスガールに先を越されちまうな。どうするお嬢ちゃん？」

「今の私はルーラーです。見た目は変わりませんがレテイシアではありません」

「そうかい？ まあ細かいことは気にすんな。俺達も行くとするか。エスコートは必要か、英雄様？」

「私は問題ありません。ですがダンテ、貴方は——」

ジャンヌも隣のダンテに視線を向けるが、その時にはもう彼の姿は見当たらない。先に飛び降りたセイバー達の方を見れば、それに続いて赤いロングコートを風になびかせながら飛び降りるダンテの姿が。

小さなため息をつくジャンヌ。

「全く……人の話は最後まで……アストルフオさん、私も空中庭園に乗り込みます。ご武運を！」

ヒポグリフの足から手を離すジャンヌもまた重力に引かれて落ちて行く。

重たい荷物が失くなり身軽になるヒポグリフ、その背中でアストルフオは夜空に視線を向けた。

「ボクもすぐに追い付くからね！ それじゃ行こう、ヒポグリフ！ このデツカイ要塞をぶっ潰すぞ！ ようやく真名を思い出したんだもん。惜しげもなく全開で行くよ！」

今宵は新月。空を見渡せど星々の輝きしか見る事は叶わない。この僅かな時間こそがアストルフオの真の能力が開花する。ハードカパーの書物を取り出し、真名を唱える事で秘められた宝具の力が発揮した。

「我が名はシャルルマーニュ十二勇士が一人、アストルフオ！ いざ勝負！」

庭園を囲むように配置された二十メートルを超える巨大な漆黒のプレートが複数、ヒポグリフとそれに乗るアストルフオに狙いを定めると強力な魔力の光弾を無数に発射した。

夜空を流れる彗星の如く、迫る光弾に対してアストルフオはそれで

も口元に笑みを浮かべている。

「今のボクは一味も二味も違うよ。我が心は月もなく……恐怖に震え、去れど断じて退きはしない。宝具開放、キャツサー・デ・ロジエステイラ！」

アストルフォが宝具の真名を唱えると、手に持つ書物からページがちぎれ飛ぶ。それも一枚や二枚ではなく、数え切れない紙がヒポグリフの周囲に舞い上がる。しかしどれだけの数の紙がちぎれ飛ぼうとも書物のページは変わらずに存在していた。

宝具キャツサー・デ・ロジエステイラはその力を発動させる。ちぎれ飛ぶ紙が太陽の輝きのように発光し、迫る光弾を受け止めた。

大地を容易く砕くだけの威力を持つ空中庭園から発射された光弾。発光する紙はその全てを完全に無効化した。

「えへへッ、どんなもんだい！ ボクもまだ聖杯を諦めた訳じゃないからね。このままこの要塞をぶっ潰して良いところ取りしちゃうぞ。行くよヒポグリフ！」

手綱を握るアストルフォはヒポグリフを加速させ、空中庭園を囲む漆黒のプレート目掛けて一直線に突き進む。

発動した宝具により守られている今のアストルフォはどんな攻撃も寄せ付けない。光弾を弾きながら、プレートにぶつかって行くヒポグリフはそのまま防衛装置を破壊した。

「まずは一つ。このまま全部やっちゃうぞ！」

／／／

庭園内へと潜入するのはセイバーとそのマスターである獅子劫。何事もなく着地したセイバーは獅子劫の体を持ち上げ地に足を着けさせる。

「着いたぜ、マスター」

「パラシュートもなしに空を飛ぶのは流石にこたえるな……」

「何情けないこと言ってるんだよ。さあ、聖杯を奪いに行くぜ」

「ああ、行く——」

ここは敵の本拠地、侵入者をそのままにしておく事など有り得ない。一息すら付かせる暇など与えず、鋭い矢の一撃が獅子劫の心臓部

目掛けて飛ぶ。

しかしそれを見逃すセイバーではなく、瞬時に前に出ると向かって来る矢に白銀の大剣を振り下ろした。

「少し前までは味方だった筈なんだがな。昨日の味方は今日の敵か」
「私には私の願望がある。貴様に聖杯は渡さん。だがそれ以上に……」

怒気を孕むアーチャーの視線は空を見上げ、握る弓で無数の矢を放つ。空気を引き裂きながら飛ぶ矢だが、星明りとは違う激しい閃光と轟音が響き、矢は空中で破壊されていく。

そして真っ赤な影が庭園内にまで到達すると、目を見開くアーチャーの眼が血走る。

「待っていたぞ、この時を……ダンテエエツ！」

「そう吠えるな、耳が痛くなっちまう」

「貴様のような悪魔と語る舌は持たん！　ここで殺すツ！」

ゆっくりと歩を進めるダンテに対してアーチャーはすかさず矢を射る。右手のアイボリーの銃口を向けトリガーに指を掛けるが、上空から降りて来た彼女の一振りが矢を弾き飛ばす。

続けて現れたのは旗を持つ聖処女、ジャンヌ・ダルク。

「弓を引きなさい、アーチャー！」

「お前は……あの男が言っていたルーラーか」

「天草四郎はルールに反して大聖杯の力を行使しようとしています。そうならば——」

「知っている。だがそれは私が望む世界……子ども達が皆愛される世界……それが叶うのならば！」

「アーチャー……貴方は……」

ジャンヌの言葉は彼女に届かない。それを察するダンテは彼女の肩に手を置く。

「狙いは俺なんだろう？　お嬢ちゃんは先に行きな」

「ダンテ……ですが……」

「時間はそんなに掛からないさ。それより聖杯の方がヤバいんだろう？　間に合わなくなっても知らねえぞ」

数秒思考するジャンヌだが頷くと最後に隣に立つダンテに視線を向けた。

「わかりました。それと同じことを何度も言わせないで下さい。今の私はレティシアではありません」

「英雄様だろ？」

「ここは任せます。セイバーとそのマスター、私達は奥に進みますよ」
言うところジャンヌはこの場から走り出し、セイバーと獅子劫もチラリとダンテの姿を最後に見るとジャンヌの後に続いた。

残されるダンテとアーチャー、二人の視線が交わる。

「それじゃ……時間もないしきつさとおつ始めるとするか」

「悪魔め……私は貴様のような人間を決して許さない！ そのせいでどれだけの子ども達が傷付いたと思っている！ こんな悲劇はもう繰り返させない。だから私は聖杯を手に入れる！ 貴様のように心を持たぬ悪魔は、私の全てを使ってでも排除する！」

「なるほど。まあ、こつちとしても全力で来てくれねえとつまんないからな。ぶつ潰させて貰うぜ、英雄様？」

「私は悪魔などに負けはしない……」

アーチャーは懐に手を伸ばすとある物を手にした。それは禍々しい雰囲気を纏う猪の皮。彼女を見るダンテの眼つきも変わるが、止める間もなくアーチャーは猪の皮を自身の体内へと吸収させた。

「おい、止めろ！」

「悪魔を殺す！ その為ならば私はッ！ アグリオス・メタモローゼ！」

「ッ!? やりやがった……」

アーチャーの中からドス黒い魔力が爆発的に溢れ出る。同時に彼女の体にも変化が現れた。瞳は獣のように、髪の毛も灰色に変わる。両手足には鋭い鉤爪。体に装備する防具も黒い剛毛に変化し、その姿は人間の物では失くなってしまふ。

女神アルテミスが地上を罰するべく送り込んだ魔獣カリュドンの皮。その皮を取り込んだ者に魔獣の力を与える呪いの宝具。

内側から溢れ出るドス黒い魔力、怒りと殺意、それは――

「ダンテ！ 貴様を殺す！ 私の全てを使つてでも貴様は必ずッ！」
「オイオイ……それが英雄様の力か？ そんなのは英雄でも何でもない」

第十二話 悪魔の力

地を蹴り弓を引くアーチャー。放たれる矢もドス黒い魔力を帯びており、攻撃力として見ただけでも相当な物になっている。だがダンテはリベリオンを構えると真正面からコレを受け止めた。振り下ろす刃は漆黒の矢を全て斬り落とす。

「美人の顔が台無しだぜ？」

「殺す……殺してやる……殺してやる……コロシテヤル！」

「こりやあ残念だ。もう英雄様でも、人間でもなくなったか」

「それは貴様だ！ 人間の姿をした悪魔め！ 私の理想を叶える為、子ども達の無念を晴らす為、悪魔は殺すッ！」

再び弓を引くアーチャー。無数の漆黒の矢が放たれ、ダンテも握るリベリオンを振り回す。音突き破る速度で迫る矢。振り回されるリベリオンは全てを切り払い、どれだけの矢を受けてもヒビ所か傷すら付かない。

リベリオンを肩に担ぎ、ダンテは相手に向かって挑発する。

「どうした、もう終わりか？ こんなんじや悪魔を殺すには力不足だな」

「貴様を殺す！ 殺さなくてはならない！ 私が望む世界に悪魔など入らせぬ！ タウロポロスッ！」

弓を力一杯、引きちぎれるのではないかと言うくらい引くアーチャーは漆黒の弓を更にドス黒く染めて空に目掛けて矢を放った。雲に穴を開けて突き抜ける矢。

そして空を漆黒に染め上げると上空から無数の矢が雨の如く降り注ぐ。それもダンテに目掛けて一直線に。

見上げるダンテはリベリオンを背負うとアーチャー目掛けて全力で走り出す。瞬間、今まで立っていた場所に漆黒の矢が数え切れない

程突き刺さる。

「見た目は派手だが……悪いが今は急いでるからな。遊んではやれねえぞ」

エボニー・アンド・アイボリーを構えるダンテは走りながらトリガーを連続して引く。発射される弾丸は庭園内の柱へ撃ち込まれ、白い砂埃が舞うと柱は自重に耐え切れず根本から倒れる。

視線を変えもう一本の柱にも弾を撃ち込む。

二本の巨大な柱が倒れ、その影に隠れるように走るダンテ。だが漆黒の弓は石で作られた柱など障害にならない。数秒後には柱は粉々に砕け散り、舞い上がる砂煙で視界が効かなくなる。

瞬間、煙の中から光る物が飛来した。反応するアーチャーは左手の鉤爪で迫る物体を振り払い、甲高い金属音と火花が飛び散る。

「小賢しい！ 上だな！」

「弾丸の雨を浴びな！」

アーチャーの更に上空へと一瞬の内に飛び上がったダンテはこのまま一方的に攻撃されてばかりではない。重力に引かれ落下しながらも体を回転させトリガーを引きまくる。マシンガンのように発射される大口径の弾丸。

だが宝具により強化されたアーチャーも負けてはいない。鋭い眼光を向け弓を引くと、ダンテに負けない程の矢を放つ。強化された矢は弾丸など簡単に弾き飛ばし、再びダンテに襲い掛かる。

「当たるかよ」

ダンテは体をよじりながら両手の銃をホルスターに戻し手を伸ばす。ついさつきアーチャーが鉤爪で弾き飛ばした物体を手を取った。リベリオンを持つと空中で振り回し漆黒の矢を斬り落とす。そしてそのまま自重と重力を合わせ、真下のアーチャーの頭部目掛けて刃を振り下ろした。

「チツ……すばしっこい奴だ」

「悪魔……悪魔あああッ！」

「そう叫ばなくても聞こえてるよ」

「死ねエエエッ！」

その場から飛び退き攻撃を避けるアーチャー。獣のような雄叫びを上げ、ダンテに詰め寄ると次は両手の鉤爪で連続攻撃を仕掛ける。本来のアーチャーの筋力はそのままで高くはないが、今の彼女ならセイバーやバーサーカーが相手であろうと一撃で致命傷を与えられる。それが人間相手ともなれば死は避けられない。

だがダンテはその全てをリベリオンのチャンバラで防いでいく。「こんな所で死ぬなんて御免だ。せめて最後にピザくらい食いたいぜ」

「減らず口を！ 只の人間がサーヴァントに勝つことなど！」

「やってやろうか？」

「グガアアアッ！」

リベリオンで袈裟斬りするダンテに鉤爪で振り払うアーチャー。火花が飛び散り、アーチャーの体が後方へ押し込まれた。しかし距離が開けば彼女が得意とする弓が光る。

けれどもダンテは余裕の表情を崩さない。

「当てられるか？」

「舐めるナアアアッ！」

弓の弦を力一杯引き漆黒の矢が放たれる。ダンテもリベリオンに魔力を流し、刃を振り下ろすと赤黒い衝撃波を飛ばす。互いの一撃がぶつかり合い、轟音と衝撃波で土煙が上がる。

視界が悪くなる瞬間を突き上空へ飛ぶダンテ。だがその位でアーチャーは欺けない。

「同じことをした所で私に勝つ道理などない！ タウロポロス！」

「そうでもないぜ？」

降り注ぐ無数の矢。身を振りながらエボニー・アンド・アイボリーを取り出すダンテはアーチャー目掛けてトリガーを引く。

「当たるものか」

「いいや、ビンゴだ」

弾丸がアーチャーに直撃する事はなかった。強化された身体能力で右へ左へと飛ぶと簡単に避けてしまう。だがダンテの狙いはそれではない。

アーチャーが放ち、ダンテが避けた数え切れない矢、それらは全て空中庭園を貫いていた。足場にしていた地面はもはやボロボロ。そこに狙いを付けたダンテはトリガーを引き、アーチャーの足場が完全に崩れた。

「なに!?…ぐッ!?!」

「たたっ斬る!」

ガレキと共に庭園内部へと落ちて行くアーチャー。しかし魔獣リュドンの皮により強化された彼女は魔力を流すと背中から黒い翼を広げるが、彼女目掛けて急降下するダンテはリベリオンを力任せに振り下ろす。

流石のアーチャーでも空中での反応は遅れてしまい、防ぐ事もできず右翼を切断されてしまった。

「があ、ああアアアッ!?!」

切断面からは血が流れ、張り裂けんばかりの悲鳴が鳴る。そんな状態で何ができる筈もなく、アーチャーは錐揉みしながら内部の床へ激突した。

それから少し遅れて天井部分のガレキも落下し広範囲に土煙が舞う。内部では視界が全く効かなくなる中、ダンテは真つ赤なロングコートをなびかせながら床へ着地した。

「おい、どうした? もっと来いよ。悪魔を殺すんじゃないのか?」

「ぐうッ!」

煙を晴らしながら矢が飛来するが顔をわずかに傾げるだけで避けてしまう。

地面を蹴るアーチャーは横へ飛び、壁にまで到達すると両足の鉤爪をアンカーのように食い付かせ、そのまま弓を引いた。

更に壁を蹴り次の壁へ。壁を引つ掻きわずかな時間体を支えまた弓を引く。そしてまた飛ぶ。

縦横無尽に落下した室内を飛び回り、狙いを定め無数に弓を放つ。

「肉片!つこの世に残さん! 吹き飛ばええええ!」

四方八方からダンテに目掛けて迫る漆黒の弓。それら全てを避け

る事は不可能。ダンテは避けようともせず、矢の雨の中に飲み込まれた。轟音と衝撃が室内に広がり、床へ戻るアーチャーは射抜いた先を見つめる。

確実に当てた、それでも何故か確証が持てず弓は握ったままだ。

瞬間、物凄い量と密度のオドが爆発し、自らが放った弓が弾き飛ばされていく。反応するアーチャーは身を屈め飛んで来た弓を避ける。そして立ち上がった先に見えたのは、キズ一つ負っていないダンテの姿。

「貴様……一体何を!？」

「行くぜ! 終わりだ!」

「なッ!？」

加速するダンテはリベリオンの切っ先を突き出す。弓を手放し、咄嗟に両腕で防ごうとするがもう遅い。刃は深々と突き刺さり背中まで貫通し、そのまま壁にまで激突した。

「ぐはアッ!？」

血反吐を流し、腹部に突き刺さるリベリオンを押し返そうと両手で刀身を掴むがびくともしない。弓もなく、鉤爪もダンテの体にまでは届かない。マスターからは実質魔力を供給されているのみで体を治癒させる事もできない状況。

「ぐう……うう。うううッ! 私……私はこんな所で! 殺してやる

……殺してやる!」

「往生際の悪い奴だ。だったら……」

リベリオンに魔力を流し込み刀身が赤く発光する。最後の一撃を与えんと力を込めるダンテ、そして覚悟するアーチャー。それでも目の前の男を殺そうと左手は刀身を掴み、右手は限界まで前に突き出す。

「ぐうウウウ!」

「……止めだ」

突然リベリオンを引き抜くダンテ。自由の身になるアーチャーだが受けたダメージは重く、腹部から大量の血を吹き出すと前のめりに

倒れた。

這い蹲りながら、血反吐で汚れた口元と血走る瞳でダンテの事を見上げる。

「何故……殺さない？ 私のことを見下して！ やはりお前は——」

「泣いている」

「なに？ それが何だと言うのだ！」

「お前だってわかってる筈だ。その力を使う意味を。悪魔を殺すんだろ？ お前がそうなつちまってどうするんだ？」

「私は……愛されぬ子ども達が幸せになるようにと戦った。だがサーヴァントとして召喚された現代でさえも、不幸は続くばかり。私は未来の為に戦ったのに……そんな子ども達をお前は殺した！ 聖杯を使えば救えたのに！ だから私は……子ども達を救えるのなら何だってやる！」

「そうか。そりやお前の言う通り愛されないガキは不幸なのかもな。けどな、不幸だろうと何だろうと負けない強さを人間は持つてる。お前はそれを捨てて悪魔になった」

「フフフ……知ったような口を……」

「知ってるさ。昔の俺がそうだった」

「え……」

ふと、アーチャーの瞳から殺意が消える。血溜まりが広がる床、ダンテは言葉を続けた。

「お前が言う理想が叶えば俺のオヤジとおふくろは生き返りでもするのか？ 今更しやしやり出られても鬱陶しいだけだな。オヤジには一発蹴り入れるとして、おふくろはうるさそうだな。毎日ピザ食って、気分が乗った時だけ仕事する生活の方が俺の性に合ってる。二人が居たらそんなこともできないかもな」

「お前もそうだったのか……ならば何故、私の思いがわからない……」
「独り善がり過ぎるぜ。まあ、もう話すこともないだろ。あとは一人で考えな」

「だったらこれだけで良い、教えてくれ……何故私を殺さない？」
「言わなかったか？ お前は泣いている。悪魔は泣かない。涙を流す

お前はまだ人間だ。俺の仕事は悪魔を狩ることだからな」

「たったそれだけのことで……」

最後の言葉を告げるとダンテはこの場から去って行く。残されるアーチャーは二度目の寿命が尽きるその時が来るのを待つしかできない。彼女の命も風前の灯火だ。

「何が正しくて、何が間違っていたんだ……そんな簡単なことでさえも、私は二度目の生を受けても迷ったままだ。アルテミス……私は……アタランテはもうすぐ貴方の元へ戻ります

第十三話 騎士と女帝と

「ルーラーはどっちだと思おう？ 俺らは右に行く」

ダンテを置いて空中庭園を進む三人の前に広がるのは二手に分かれる通路。豪華絢爛に構築された庭園内、床は真っ赤な絨毯がどこまでも広がっており、壁や天井には金の彩色が施されている。

分岐路で立ち止まるジャンヌに対して、セイバーは迷う事なく言つてのけると獅子劫と共に右の通路へと歩いて行く。

「待つて下さい。ここはアサシンの体内に等しい空間。無闇に進めば何があるか——」

「止まつてもしょうがないだろう？ 後ろはダンテに任せちまつたんだ。なら進むしかねえ」

「ですが……」

「ルーラーは左から行け。その方が最深部まで到達する確率が高い。こつちのことは心配すんな。俺が負ける訳がないからな」

二人を何とかして止めようかと考えるジャンヌではあつたが、時間の猶予もない状況ではセイバーの言葉に従うしかなかった。

「武運を」

頷く彼女は二人へ呼び掛けると言われたように左の通路に向かつて走り出した。魔力の流れのお陰で感覚で理解できるセイバーは振り返る事もなく、この先で待つ敵に備え闘志を蓄える。

「マスター、残るサーヴァントも残り四人だ。気合い入れてけよ」

「わかつてるよ。それよりもルートは本当にこつちで合ってるんだろうな？」

「心配すんなって。俺の勘は良く当たるんだ。この先にいけ好かない奴が居る」

「こつちまで来て勘で動くか」

口元に笑みを浮かべる獅子劫、この先では敵対するサーヴァントが待ち構えているかもしれないと言うのに二人は平常心を保っている。横並びで歩を進める獅子劫とセイバー。静寂とした空間に足音だけが響く。

「それにしてもデカイな」

「しかも趣味も悪い。これだけで相手の品性が伺えるつてもんだ。あの扉の向こうから嫌なニオイが伝わってくるよ」

セイバーが言うように真つ直ぐ進む先にあるのは一つの扉。その先で何が待ち構えているのか、サーヴァントである歴戦の英雄でもあるセイバーには見ずとも予想が付く。

「あの先に居るのはアサシンだ、絶対にな。味方だった時に一回だけ見たがよおく覚えてるよ。自分で自分のことを女帝つて名乗りやがった。いけ好かねえ女だ」

「できる限りのサポートはするが勝算はあるのか？」

「愚問だぜマスター。俺は叛逆の騎士モードレッド。王を倒すのは叛逆者つて決まってるんだ。だからこの戦いも俺が勝つ」

「いつにも増して根拠がないな」

「良いんだよ、重要なのは結果だろ？ それよりも……着いたぜ」

歩き進んだ先で待つのは観音開きの黒い扉。息を呑み扉を見据える二人、さつきまで冗談を話していた唇も途端に動きを止めた。

この先で敵が待ち構えている。ここを抜けた更には先では大聖杯を奪った天草四郎、そして生き残ったサーヴァントとの戦い。聖杯を手に行けるのは最後まで生き残った一人のサーヴァントのみ。

故にこんな所で負けられない。自らの願望を叶える為にこんな所で負ける訳にはいかないのだ。

「行くぜ、マスター」

「ああ、頼むぞセイバー」

互いに片手で扉を押し開ける。力を入れずとも開いた扉の先で、巨大な階段が伸びる頂点に設置された玉座。そこに座るのはこの空中庭園を創り出したサーヴァントであり過去の女帝。

警戒しながらも進むセイバーは赤のアサシンに挑発する。

「久しぶりだな、アサシン。お前みたいな奴にその玉座は似合わねえよ。どきな？」

「生前のお前はこの位置にまで到達して居らんだな？ その割には些か頭が高い発言ぞ？」

「なるほど……どかねえって言うなら奪い取るまでだ。命乞いをするなら、今なら許してやるよ」

「ふふ、中々笑わせてくれる。だがお前の相手は此奴を始末してからだ」

幻獣の声が響く。二人は見上げると夜空から何かが落下して来た。それは羽毛を撒き散らしながら力なく地面へ激突し、立ち上がる事すらできずにまぶたを閉じる。そして影が走り、巨大な蛇が空から泳いで来るとアサシンの傍にまで来た。人間の体など簡単に飲み込めてしまえる程に巨大な凶体。毒を滴り落とす鋭い牙は小柄な体を啜えこんでいた。

突き破られる皮とへし折られた骨。流れ出る血と毒が彼の体力を確実に奪う。もはや以前の陽気な姿は想像できないまで表情は苦痛に歪む。

「私の庭を羽蟲が飛び回っていたのでな。ちようど駆除した所だ」

「ライダー!? 殺られたのか?」

「息の根は止めておらんがそれも時間の問題よ。ではライダー、敵とは言えせめてもの情けだ。バシユムの毒で充分に苦しんだろ? 今殺してやる」

親指と中指を添えるアサシン。音を鳴らせばその瞬間、彼女が召喚した大毒蛇は主の命に従いアストルフオを食い殺すべく力を込める。

だが苦しみながらも馬上槍を手にするアストルフオの目はまだ死んでいない。

「くッ! まだ……」

切っ先を突き立てるアストルフオは渾身の力を込めて大毒蛇の左目を貫き脳天にまで達する。傷口からはドス黒い液体が吹き出し、口内で起き上がり腰の角笛を取り出すと思いきり吹き付けた。

音色を吹き付けた相手の固有共鳴周波数と同調する振動波を放射し、体を貫く牙と共に頭を半分吹き飛ばす。

どうにか拘束から逃れたアストルフオだが体に受けたダメージは深刻で、大毒蛇と同様に力なく床へ落ちて行く。

受け身すら取れず、倒れ込んだアストルフオは息をするのもやつと

だ。

それを横目で見るアサシンはつまらなさそうな表情をするが、今は目の前に立ち塞がる相手の方が先。大剣を突き付け闘志をむき出しにする敵が目の前に居る。

「行くぜ女帝様？ テメエをぶつ殺して聖杯は俺たちが奪う！」

「何を戯言を？ 逃げ隠れしようと思えば我なら幾らでもできた。でもそうしなかったのは貴様らを確実に葬る為だ。セイバー、ここは私の庭園であることを忘れているな」

指を軽く振り下ろすアサシン、その動作を目にした瞬間に直感が働くセイバーは傍に立つ獅子劫を後方に向かって蹴り飛ばした。

「逃げるマスターー！」

「ぐうッ!？」

吹き飛ばされた獅子劫は扉の外にまで飛ばされると受け身を取り立ち上がる。急いでセイバーの元にまで駆け付けようとするが、アサシンの元へ繋がる扉は固く閉ざされてしまう。

「クソ！ 押すも引くもできない。サーヴァントの結界の一種か。なら……」

右手の甲に刻まれた赤い紋章、サーヴァントに対して使用できる絶対命令権。膨大な魔力を秘めた魔術の結晶を使えば魔法のような事のでさえ可能になる。

その令呪の一面を使うと決めた獅子劫は急いで唱えると手の甲が赤く発光した。

「私の元へ馳せ参じよセイバーー！」

しかし令呪の一面は消える事なく次第に発光も収まり、彼の声だけがこの空間に響き渡るだけ。

「令呪が発動しない!？」

「無駄だ、セイバーのマスターよ。私のマスターは他と違い令呪に少々詳しくてな。そうでなくともここは私の庭園、もう貴様らの思うようにはさせせんよ。此奴を始末すれば次は貴様だ」

「セイバーー！ 俺の声は届くのか！」

「無駄だと言った。そこで震えて待っておれ。すぐに終わらせる」

最後にアサシンが一人静かに笑う声が聞こえると獅子劫はセイバーとの接触を完全に遮断された。

扉の中では全身を銀色の甲冑で纏ったセイバーが大剣を片手に地面を蹴る。

「震えるのはテメエの方だ！」

第十三話 騎士と女帝と

今まで立っていた所を見れば灰色のガスが足元が見えなくなる程に充滿していた。毒ガス、どれ程の威力があるのかはわからないがガスが消えるまでは迂闊に地面に着地もできない。

セイバーは空中で剣を構えアサシン目掛けて落ちて行く。

しかし彼女も玉座の上で余裕の笑みを崩さない。

「羽も持たぬ蟲が空をどう飛ぶ？」

指を鳴らせば高密度の魔力のレーザーが複数、セイバーに向かって一直線に飛ぶ。セイバーは迫る攻撃に大剣を振り下ろすも自由の効かぬ状態では力が充分に発揮できず、無数のレーザー攻撃に壁まで吹き飛ばされる。

崩れ落ちる外壁、だが甲冑を纏うセイバーにダメージは通っていない。

「舐めんじゃねえ！」

「しぶといな。ここで死んでおけば楽なものを」

「死ぬのはテメエだ。それに何度も言わせるな。そこで震えて待つてろ！」

壁を蹴るセイバーは斜め向かいの壁に向かって飛ぶ。アサシンの言うように羽もなければ空を飛ぶ事もできないが、ロケットの如く有り余るパワーで一直線に突き進む。空気を突き破りながら壁に到達、また壁を蹴り斜めに飛ぶ。

「行くぜえええッ！」

「ふふふ、余興には充分だ」

くいつと人差し指を向け更に魔法陣を展開させレーザーを照射す

る。だがセイバーの動きは早く寸前の所で光線を振り切りまた次の壁に到達すると今度は中央のアサシン目掛けて飛んだ。

当然向かって来る複数のレーザー。セイバーは勢いを殺さず今度は剣で受け流す。そして全身の甲冑の防御力があれば無傷とはいかずとも強引に詰め寄る事ができる。

「飛んで来てやったぜ！ 唸れ赤雷よ！」

「全方位に展開」

全身から放出する魔力から生み出される稲妻がアサシンを逃すまいと周囲から襲い掛かる。そして正面からは大剣を構え向かって来るセイバー。

だが眉一つ動かさないアサシン、自身を囲むよう球体に魔法陣を配置させると指を鳴らしレーザーを発射した。

向かって来る赤雷は相殺され、セイバーの大剣と集結するレーザーとがぶつかり合う。

「ぐううう！ あっ!？」

軍配はアサシンに上がった。吹き飛ばされるセイバーは背中から地面に叩き付けられる。だが幸いにも赤雷で周囲の毒ガスごと消し去っており致命的なダメージはない。

立ち上がり剣を構えるセイバー。そこへ大毒蛇が牙をむき出しにして襲い掛かる。

「チツ、食われるかよ！」

剣を振り払うと同時に雷が落ちる。大毒蛇の脳天に突き刺さり鱗は焼け焦げ生命活動が停止した。それでも大毒蛇は一匹ではない。セイバーを喰らわんと口を大きく開けもう一匹が来る。

「雑魚の相手をしてる暇はねえんだ。一気に突き進む！」

「キシヤアアアアア！」

大口を開け喰らい付かんとする大毒蛇をジャンプして避けるセイバーはその図体へ足を着ける。そして切っ先を肉に突き立て血が滲み出るとそのまま走り出す。

「うらああアアアッ！」

刃が肉を斬り裂き血を撒き散らしながら螺旋状の図体を走り抜け

るセイバー。視線に捕らえるのは玉座に座るアサシンのみ。彼女の斜め後方からジャンプして斬り掛かる。同時に大毒蛇の体が力なく崩れ落ちた。

「その首貰ったぞー！」

「蟲が、さえずるなー！」

だがまたしても刃は届かない。瞬時に魔法陣が現れ今度は無数の鎖がセイバーの四脚に絡み付き体の自由を奪った。大の字に固定されたセイバーの体、アサシンは彼女を自身の前にまで呼び寄せ鎖に魔力を流し、肉と骨を引き裂かんばかりに外へ向かって力を込める。

「ぐうッ!？」

「あの戦いぶりは流石の我も少し関心したぞ、叛逆の騎士よ。だがこれ以上蟲に飛び回られるのは我慢ならん。ここらで終いだ」

右手を伸ばすアサシンは甲冑にまとわれたセイバーの顔に触れる。見る者に威圧感を与える双角と鋭い視線。彼女は目の隙間に指を掛けると力任せにそれを剥ぎ取った。あらわになるセイバーの左目から口元にかけてを見るとアサシンはニヤリと笑う。が、セイバーはそんな彼女の顔に唾を飛ばした。

「ケッ！ 臭えんだよ、カMEMシ女」

「……ッ、そうか……ならば苦しむように殺してやる」

頬の唾を拭うアサシンは整えられた爪をセイバーの肌上添えた。爪の先端が少女の柔肌を薄っすらと傷付け、毛細血管から一滴の血が。

その血は流れ落ちる事もなく外気に数秒触れると彼女の体内へ戻っていく。するとセイバーの様態が急変した。

「がはあッ!! ぐうッうッうッ あああアアアッ！」

「もうこの毒から逃れることはできんぞセイバー。我が宝具、シクラ・ウシユムはあらゆる毒を精製することができる。貴様の血をヒュドラ毒に変換し体内に戻してやった」

「あゝあゝ あああアアアッ!？」

「元は貴様の血だ、良く馴染むだろ？ それに自らの血と同化してはもはや助かる道はない。最初は神経が麻痺し触覚が感じなくなる。

そして侵食が進めば味覚、嗅覚、視覚、聴覚と五感が全て失われる」
「だはあッ！ うあああアアアッ!? ギャアあああ!？」

「ハハハハハッ、良い悲鳴だ。地獄のような苦しみをじっくり味わいながら死んでいけ！」

泣けど叫べどセイバーの体に走る、激痛、苦しみが和らぐ事はない。鎖でがんじがらめにされた四脚は振り解かんと力を込めるがそれも叶わない。マスターである獅子劫のサポートも受けられないとなれば状況は絶望的。

彼女の悲鳴がいつまでも響き渡る中、微かに風が流れる音がした。翼を羽ばたかせ空を飛ぶ音が。

「アイツは!？」

目を見開くアサシンの視界に映るのは死んだと思っていたヒポグリフ。幻獣は最後の力を振り絞り翼を仰ぎ、セイバーを繋ぎ止める鎖へ体当たりし拘束を断ち切った。

しかしそれが最後、ヒポグリフは光の粒子となり現世から消える。それでも希望は繋いだ。自由の身となるセイバーが地上へ降り立つ。そしてそのすぐ目の前に居るアサシンへ最大出力の一撃を叩き込む。

「魔術回路は繋がってるんだ、搾り取るぜマスター！ 宝具開放！」

「セイバーが来る!？」

「ぶっ飛ばえええッ！」

魔力を全開放し放たれるセイバーの宝具、剣身から放たれる赤黒い膨大な魔力。振り下ろされる刃はアサシンの左腕を文字通り吹き飛ばした。が、そこで動きは止まってしまふ。

セイバーの両腕が魔法陣から放たれた鎖により止められてしまった。

「はあ……はあ……ふふふッ！ 惜しかったなセイバー、あと一息だった物を」

「ぐッ！ クソ、動け……届かない……」

「慢心が敗北に繋がるか……やはり貴様は今すぐここで始末する！」

絡め取られた両腕のせいで逃げる事もできない。更には体内を蝕む毒は確実にセイバーを弱らせる。けれどもアサシンは忘れていた。

ヒポグリフが動けた意味を。

玉座から遙か下では馬上槍を構えるアストルフオが最後の一投を構える。

立つのも限界ギリギリ、全身は震えが止まらず視界もぼやけ、肩で息をするのもやつの状態。それでもアストルフオを突き動かすのは英雄としての信念とプライドか。

「これが……ボクにできる最後の……届けえええエエツ！」

自らの宝具を投擲するアストルフオ。馬上槍は空気を突き破りながら一直線に目標へ突き進む。

「アイツもまだ死んでいなかったか。だが貴様の攻撃など！」

右腕を黒い神魚の鱗に変えて防御の構えを取るアサシン。アストルフオの信念が籠った最後の一撃は、しかし彼女にかすめる事もなかった。

あまりに的外れな投擲に思わず笑いがこみ上げる。

「ふふふふッ！ 儂い命を無駄にしたか、ライダー！」

「あとは……」

アサシンの言葉が耳に届いていたのか、アストルフオも光となり現世から消えようとしていた。けれども最後の一撃は無駄ではない。その切っ先は確かに狙った目標へと届いている。それは――

「テメエも消える番だぜ、アサシンッ！」

「セイバー!? 我の拘束を解いただと!？」

「ライダーの宝具が俺にチャンスくれた!！」

セイバーの両腕が消えていた。否、アストルフオの宝具の効果により霊体化しておりアサシンの拘束から逃れる事ができた。

自らの大剣が地面に落ちる寸前で足で蹴り上げると自身も大きく飛び上がる。

「今度こそトドメを刺す! 届けえええッ！」

まるで剣をボールのように蹴りつけるセイバー。それでも負傷したアサシンには充分過ぎる威力がある。

切っ先は空気を斬り、アサシンの胴体に突き刺さった。

「がはッ!? 我が……我が負け――」

「これで終わりだああッ！」

最後は上空から自らが武器となりアサシンに攻撃する。自由落下と魔力の放出で勢いを付け、アサシンの胴体へ突き刺さった剣の柄に狙いを定め最後の蹴りを叩き込んだ。

轟音が響く、空気が揺れ玉座ごと吹き飛び奥の外壁が打ち砕かれる。着地するセイバーが見るのは砂煙により薄汚れたアサシンの姿。その腹には大剣が突き刺さり埋め込まれるようにして壁に立て掛けられている。

「はあ……はあ……はあ……勝ったぜ……」

／／

扉の外で獅子劫は時が過ぎるのを悶々と待つしかできないでいた。サポートも何もできないでいたが中から戦闘音が聞こえなくなっただのはわかる。決着が着いたと言う事、もしもセイバーが負けるような事があればサーヴァントと戦わなくてはならない。

彼は気を引き締め扉に手をかけようとするが、それよりも前に足音が聞こえて来る。振り向いた先にいたのは突入時に別れたダンテの姿。

「お前……無事だったのか？」

「当たり前だろ。見ての通りピンピンしてる。それよりデンジャラスガールはどうした？ この先か？」

「そうだ。でも閉め出されちゃってな。中には敵のサーヴァントも居る」

「ってことはもうパーティーは終わっちゃったか？ だったら——」

ダンテは両手で銃を取り出し扉目掛けてトリガーを連続して引いた。吐き出される空薬莖が絨毯の上に散らばるも、扉は殆ど無傷。ため息を吐きダンテは銃をガンホルダーに戻す。

「こいつはダメだな」

「やっぱり内側から開けるしか方法はないのか？ だとすればセイバーを信じるしか……」

「待ちな、こう言う時は……」

次にダンテが取った行動は背中のリベリオンを手に取り扉に向

かつて袈裟斬りした。鋭い斬撃は一撃で扉を切断し通路が開く。

「撃つてダメなら斬ってみなつてな」

「セイバー！ 無事なのか!？」

リベリオンを背中に戻すダンテと戦い終わったセイバーの元へ駆け寄る獅子劫。両腕が消えたセイバーは片膝を着いてマスターが来るのを待っていた。

「何ともねえよ。ちよつと時間掛かったただけだ。それより令呪を使ってくれ。両腕と……毒で体がもう限界だ……目が霞んできた」

「ああ、わかった。待つてろ」

令呪を唱える獅子劫。令呪に秘められた膨大な魔力があればセイバーが受けたダメージもたちまち回復させる事ができる。体内の毒も消え、霊体化された両腕も元の状態に戻った。そうしているとへらへら笑いながらダンテも彼女の傍にまでやって来る。

「随分とズタボロじゃねえか。肩でも貸してやろうか?」

「誰が? テメエの助けなんて必要ねえ!」

「相変わらず可愛げのない奴だな」

「だから俺を女扱いするな! ったく……それよりもマスター、令呪で回復はしたけどまだ完璧とまではいつてない。コイツと……ダンテと先に行ってくれ。暫らくしらすぐに追い付くからよ」

わかったと頷く獅子劫。セイバーをこの場に残し二人は奥へと進む。

残るサーヴァントは赤のランサーとキャスター、そして首謀犯である天草四郎の三人のみ。決戦の時は近い。

第十四話 塗り替える伝説

一人突き進むジャンヌ。止まる事は勿論、振り向く事すらもできない。天草四郎が大聖杯を発動させる前に止める必要がある。そうではなくては皆を置いてここまで来た意味が失くなってしまふ。

しかし彼が用意した刺客はまだ残っている。またしても彼女の前に立ち塞がるのは赤のキャスター。彼は拍手を送りながら、柱の影からジャンヌの前に現れた。

「よくぞここまでいらつしやいました。ジャンヌ・ダルクよ」

「赤のキャスター、ウィリアム・シェイクスピアですね」

「如何にも。ですが悲しいかな。我輩にはおおよそ戦闘能力と呼ばれる物は備わっていない。貴方をここで倒すなどと言うこともできない」

「でしたら降伏を。私が目指すべきは天草四郎を止めること」

「いいえ、降伏はしません。サーヴァントになろうとも私の根底にあるのは演劇！ 貴方には観て貰います！ 我輩の傑作集を！」

言うところシェイクスピアはハードカバーの本を取り出しペラペラとページを捲る。ジャンヌは旗を構え鋭い視線を向け、相手の動きに警戒した。

「さあジャンヌ・ダルク、席に着きたまえ！ 我が演劇の開幕だ！ 立ち歩くな、私語は厳禁、写真撮影もお断り。言い忘れていた、タバコも——」

止める、と言い終える前に甲高い銃声が轟く。持っていたハードカバーが吹き飛ぶとちぎれたページが舞い上がった。

振り向くジャンヌが目にしたのはセイバーのマスターである獅子劫と、右手にアイボリーを構える真紅の男。

「ダンテ!? 無事だったのですね！」

「俺がそう簡単に死ぬかよ。それよりお遊戯なんて観てる暇があるのか？」

「ええ、先を急ぎます」

構えるジャンヌ、視線の先ではシェイクスピアが全身をワナワナと

震わせながら、床に落ちたハードカバーを拾い上げるとダンテに向かって指を突き付け激怒した。

「貴様あツ！ 場内は禁煙だ、煙など上げるなツ！」

「あん？ そうかい」

言うど銃口を口元へ運び息を吹きかける。ゆらゆらと上がる白い煙と熱気がかき消された。シエイクスピアは満足したのか、煙が失くなるど怒りを沈めまた饒舌に話し始める。

「そうだ、それで良い。して、ダンテと言ったか？ かの有名な詩人、ダンテ・アリギエーリと同じ名前か。代表作は神曲 *La Divina Commedia*。ルネサンスに置ける文明の先駆者」

「生憎と詩なんて詠んだことがなくてね。そいつのこともどうでも良い。取り敢えずここを通させて貰うぜ」

「それはできません！ 何故なら貴方達は我輩の劇を観る観客。ここまで来て席を立つなど私が許さない。ジャンヌ、まずは貴方からと考えていましたが気が変わりました。その男、ダンテ！ 貴方には是非でも我が演劇を観て貰う！」

シエイクスピアから魔力が放出される。本人が口にしていたように彼自身の戦闘能力は低い。だが戦いは直接剣や槍をぶつけ合うだけでない。そうではない戦い方を彼はできる。

息を呑むジャンヌは地面を蹴り旗の矛先をシエイクスピアに突き付けた。が、時は既に遅く、彼は闇の中へ消えて行く。

「クツ……これは彼の宝具です。ダンテ、注意を怠らぬように。セイバーのマスターも。これは相手の精神に介入してくる攻撃です。気を抜けば戻れなくなる」

「精神だあ？ 悪いこと言わねえから俺なんて止めといた方が良いでしょう」

「気を抜くなつたつて……もうマズいんじゃないのか！」

獅子劫が叫ぶと周囲の景色が一瞬にしてガラリと変わる。

月明かりも届かぬ夜の闇。暗雲が渦巻き、地の底からこの世の者ならざる叫び声が微かに聞こえて来る。更に不気味なのは足を着く地面。そこには魔法陣のような絵柄が真っ赤に発光している。

そして頭上には乙女の姿をした幾つもの巨大な鐘が鳴り響いていた。ダンテはこの場所に見覚えがある。

伝説の魔剣士スパードの力を封印した塔、テメンニグル。その最上階で三人は立っていた。

「ほう、お遊戯にしちや随分手が込んでるじゃねえか。で、次は何だ？」

「我輩の宝具は掛けられた人間の記憶や認識により補完されている。そしてそれを我輩が自ら演出、脚本し相手の精神へ流し込む。どれどれ、貴方の過去には何があつたのか？」

「もう一回だけ言つといてやる。止めといた方が良い」

ダンテの言葉になど耳を傾けず、シエイクスピアの宝具は発動する。地の底から聞こえて来る声は更に大きくなり、そして彼らは現れた。

「逆賊スパアアアダアアアッ！」

空から現れる巨大な怪鳥。下顎がなく、大小複数の頭を持ち稲妻を操る悪魔が両翼を羽ばたかせダンテの前に現れる。

それはかつて彼の前に立ち塞がったグリフォンと呼ばれる上級悪魔。

「コイツは懐かしい面だな」

「逆賊スパード！ 殺された同胞の恨み、ここで晴らさん！」

「おいトリ頭！ もう忘れちまったか？ 俺はダンテだ、オヤジじゃねえ」

「我が力を持って、貴様をこの世から葬り去つて——」

だがグリフォンが最後まで言葉を口にする事はなかった。時が止まったかのように空気が静まり返る。

瞬間、グリフォンの首元に赤い筋が走る。彼は自らが死んだ事すら気が付かず、ぼとりと頭部が地面に落ちた。数秒遅れて切断面から血潮が吹き出す。力を失ったグリフォンの体は地面へと引っ張られ、あまりに突然の出来事に獅子劫とジャンヌは驚きを隠せない。

「何がどうなってる!? これがキャスターの精神攻撃だったのか？ あのバケモノは何だ!？」

「まさか……悪魔……」

「悪魔!? へへ、正に悪夢を見せられてるって訳か」

「何かが来ます……」

彼女が呟くとグリフオンの死体の先から影が現れた。否、闇そのものと形容しても良い存在。膨大な魔力を持ち右手には魔剣を握る最強の魔剣士。

ダンテは彼を目にし足を前に進めた。

「バージル? いや、違うな。オヤジか? つくづく趣味が悪いな」

「ハアアア……」

近づくだけで人間ならそのまま飲み込まれてしまう程の膨大で強力な魔力の塊、魔剣。両刃の西洋剣に柄がドラゴンで模られたそれは魔剣アラストル。

それを平然と手にする存在と対峙するのはダンテと言えども始めての事だ。

巨大な二本の角に三対の翼を持つ魔人。全身は黒い甲冑のようで、爬虫類の甲殻のような生物的な肌。魔帝の右腕と呼ばれた伝説の悪魔。そして自身の死んだ父親でもある彼が目の前に居る。

——魔剣士スパード——

魔界では知らぬ者は居ない伝説の存在であり、魔帝を封印した決して忘れてはならぬ憎むべき逆賊。

その彼にダンテは歩を進めながら口元を釣り上げて話し掛けた。

「こう言うのは感動の再会って言うのか? 普通なら涙でも流して抱き合おうだろうが……俺達の場合は違うな。そうだろう?」

「……………」

「無視するなよ。ってことは何か? 俺がお喋りなのは母親譲りなのか? それよりオヤジに会えたら一つだけやりたいことがあったんだ。何かわかるか?」

ダンテの問い掛けに彼が答える事はなく、握る魔剣アラストルを構えるだけ。戦闘態勢に入るスパードにダンテは依然としてへらへらとした態度を崩さない。

「わからないって顔だな。だったら教えてやるよ。それは——」

瞬間、ダンテの姿が消える。次の時にはスパイダーへ肉薄し握る拳を突きつけた。

「アンタをぶん殴ることさ」

掛け声と共に強烈なパンチが繰り出され、スパイダーはアラストルの腹で瞬時にそれを受け止めた。その威力に体が数メートル程後方に流される。

それを見てダンテは背中のリベリオンを手にした。

「さあて始めようか！ 長い悪夢になりそうだ！」

第十四話 塗り替える伝説

互いの剣の刃がぶつかり合う。火花が飛び散り衝撃が走る。

鋼と鋼がギリギリと押し付けられるも両者の力は互角だ。しかし握る剣が、魔剣アラストルの力が開放される。

剣身に青い稲妻が走りダンテを吹き飛ばす。

「つとお！ へへ、こんなんじゃ物足りねえぞ」

「ハアッ！」

「ぶっ飛べー！」

スパイダーが魔剣を振り下ろすと青い稲妻がダンテ目掛けて走る。同様にダンテもリベリオンを振り下ろし赤黒い魔力をぶつけた。

相殺する両者の強力な魔力に衝撃が発生しダンテのロングコートが靡く。

戦いを始めた二人の後ろで獅子劫とジャンヌはその行く末を見守る事しかできない。

「どうする？ 敵が誰だか知らないが加勢するか？」

「いいえ、下手に動けば彼の邪魔になります」

「だが体に直接的なダメージは受けないとは言え、もしも負けたらどうなる？」

「彼は負けません」

「どうしてそう言える？」

「彼が……ダンテが本当に伝説の魔剣士スパイダーの息子ならば……」

二人は互いの剣で攻防を繰り返している。スパイダの鋭い斬撃、刃は空間すらも切断し稲妻が走り、対するダンテもリベリオンを自在に振り回しながら相手目掛けて振り下ろす。

刃がぶつかり合う度に空間が歪み衝撃が走る。どちらも引かない、攻め続ける。

轟音が轟く、火花が飛ぶ、目にも留まらぬ斬撃が再び衝突した。

「でやあッー！」

「ハッー！」

両者が鏝迫り合いに持ち込みダンテのコートが後ろに靡く。パワーはご角、ギリギリと刃が擦れ合う。

「こんなもんじゃねえだろ？ もっと本気出せよ！」

「グウッー！」

アラストルから青い稲妻がほとばしる。今までとは比較にならない程の強力な魔力の流動。スパイダの意思に従いそれに答える魔剣。

強力な稲妻はダンテに襲い掛かるが寸前の所で後方に飛ぶ。そしてエボニー・アンド・アイボリーを取り出すとスパイダへ弾丸を撃ち込む。

「そう来なくっちゃな！」

激しいマズルフラッシュ、無数の弾丸がスパイダへ迫る。だが開いた手を突き出すスパイダは手の平から高濃度の魔力弾を飛ばす。弾丸と魔力弾とが直撃し巨大な爆発が起こる。炎と煙により隠れてしまふ両者だが、ダンテもスパイダも既にそこには居らず空中を舞っていた。

「まだまだ行くぜッー！」

「グウウウー！」

再び剣を取るダンテとスパイダは乱舞する。重力に引かれゆつくりと地面に向かって落ちていく最中でも攻撃の手は緩まない。

袈裟斬り、横一線、斬り上げてまた袈裟斬り。刃がぶつかり合う轟音だけが響き互いに一撃を与える事ができない。何度目かのぶつかり合いの末に着地する二人は剣を引くと相手の頭部目掛けて蹴りを放つ。

「ハアッ！」

「フンッ！」

足が交差しぶつかる。が、この程度で二人の攻撃は止まらない。そのまま止まる事なく連続して蹴りを繰り出す両者。そして胸部に攻撃を受けてしまうダンテは後方に流されてしまう。だが彼は足のバネでブレーキを掛け、そのまま地面を蹴ると右ストレートを腹部に叩き込んだ。

スパードも同様に後方へ流されるが右手にアラストルを握る。ダンテもリベリオンを手に取ると鋭い視線は交わった。

「はあ……やっぱ違うな。見た目はそうかもしれねえが所詮はコピーか」

殺気を向けるスパードとは対称的にダンテは途端に戦意を失くしリベリオンを肩に担ぐ。ダンテの言う通り眼の前のスパードは本物ではない。シェイクスピアの宝具により作り出された虚像。

しかし本物ではなくとも目の前に居るのは事実。スパードはアラストルを構えながら走り出す。

「ハアアアッ！」

「遅えよ！」

振り下ろされるリベリオン。その刃はアラストルがダンテの皮膚を斬り裂くよりも早くにスパードへ到達し、甲冑のような黒い甲殻を斬る。

左肩から右太腿に掛けて大きく斬り付けられたスパード、動きを止め片膝を地面に着けると傷を負いながらもダンテを見上げる。

「シェイクスピア、コピーするなら俺にするんだな」

スパードの額へ銃口を突き付けるダンテはそう言うトリガーを引いた。マズルフラッシュと甲高い銃声が響き渡り空葉莖が地面に落ちる。

撃ち抜かれたスパードはまるで砂になるようにダンテの眼の前から消えた。そして聞こえて来るのは乾いた拍手の音。影の中から赤のキャスターであるシェイクスピアが現れた。

「お見事！ まさか勝ってしまうとは。並外れた精神力ですな」

「次はどんな手品だ？」

「そう慌てないで頂きたい。すぐに——」

宝具を展開する彼は次の手に打って出ようとするが、ダンテでもジャンヌでも獅子劫でもない、第三者が突如として現れる。それは地の底から響く冷たい声。

「アキヤキヤキヤキヤッ！ 見付けたぞ逆賊スパードの息子、ダンテエエー！」

出て来たのは魔界の住人、悪魔。レテイシアを取り込もうとしていた、そしてダンテが取り逃がしてしまつた中級悪魔。それが今、この空間にまで干渉して来た。

全身が骨で形勢され頭部には羊のような双角、黒いマントを纏う悪魔がカタカタと歯を鳴らしながら不気味に笑う。

悪魔の来訪にシェイクスピアは驚きを隠せない。

「何なのですかコレは?! 貴方は何なのです!」

「貴様は人間ではないな? ならば必要ない。それにその女、お前も人間ではなくなつたな?」

「あの時の悪魔……何故このような所に……」

旗を構え警戒心を高めるジャンヌ、けれども悪魔はマントを靡かせながらふわふわと動くだけで攻撃しようとはしない。そして獅子劫は悪魔の声を耳にし体を震わせた。

「忘れる筈もない! お前はあの時の……あの時の悪魔だな!」

「ああ、覚えているぞ人間。貴様らの願いを叶えてやつたろ?」

「その為の代償がこれか? 命を奪うでもなく、子孫を残せないようにする。魔術師として致命的だ」

「度し難いな。悪魔は願いを叶える変わりに代償を必要とする。そんなことも知らなかったか? ならばもう一度貴様の願い、叶えてやろうか?」

「黙れッ!」

「アヒヤヒヤヒヤ! だが今は下等な人間に構っている暇はない。ダンテ、貴様にもだ」

血が滲む程拳を握る獅子劫はサングラス越しに悪魔を睨み付ける

しかできない。

ダンテは銃口を向け無慈悲にトリガーを引いた。

「無駄だよ。精神の狭間では幾らスパードの息子と言えども我を倒すことはできない。このまま死ね、ダンテ！」

「おい、早くこれを何とかしろ！」

「わ、わかった！」

トリガーを引き続けるダンテだが弾丸は悪魔をすり抜けて行く。言う悪魔はダンテ達の前から消え、変わりに別の悪魔の群れが現れる。黒い霧状のガスを発しつつ宙を浮遊する低級悪魔、メフィスト。本体の青い目と鋭い爪が光り狙った得物を殺さんとしている。

呼ばれたシェイクスピアは慌てふためきながらもダンテの指示に従い宝具を解除した。テメンニグルの頂上だった景色がまたしても一瞬で変わり、元の空中庭園内の通路に戻る。

「雲行きが怪しくなって来たな……英雄様は先に行け」

「ダンテ、ですがこれは……」

「悪魔を倒すのは俺の本業だ。デンジヤラスガールのマスターは俺が見てやるよ」

何も言わず視線だけ向けるジャンヌは悪魔に追い付くべく一目散に走り出す。彼女の背後では激しい銃声が聞こえて来る。

(どうして今になって悪魔が現れたのかわかりません。私でもなければダンテでもない。大聖杯を狙っている?)

／／／

空中庭園の最深部。

そこでシロウ・コトミネ、天草四郎と呼ばれていたサーヴァントが一人佇む。彼は見上げる。

その先にあるのは巨大な球体、奪い取った大聖杯。

「この時の為に私は六十年待った。全人類を救済する為に、大聖杯が起こす奇蹟が世界を……人を救う」

ゆっくり歩を進め大聖杯に手を伸ばす天草四郎。大聖杯は彼の呼び掛けに答え、球体の中へと天草四郎を迎え入れる。中に広がるのは光。

歩みを止めない天草四郎が目にするのは光だけではない。かつての自分が見た光景。一生忘れる事もない、脳裏にこびりついて離れない地獄絵図。

家は焼け落ち、皮膚が焼け爛れた人間が夜の中を徘徊している。男も女も大人も子どもも関係ない。肉が焼ける臭い、死体の腐敗臭。

「敵も死んだ、味方も死んだ。あの時の私には何かを変える力などなかった。力のない自分が……何もできなかった自分が心底憎かった。敵が味方と言う問題ではない。眼の前で人間が死んでいく光景をただ見ているしかできない現実。武器を持ち、敵意を向ける相手に私は刃を向けるしか手段を持ち得なかった……だから願う。人間が我欲を捨てた存在となることを。それは奇蹟……故に六十年前の聖杯戦争に呼ばれた私は聖杯に願いを託そうとした。全人類の救済を……敵味方の概念などない、全てを助けると誓ったのだ」

かつての記憶の中の光景を進み続ける天草四郎。けれども地獄絵図はいつまでも続かない。ふと瞬きをしたらガラリと景色是一片した。

澄んだ空気に雲ひとつない青空。視界一杯に広がる花畑。そこに彼女は居る。

「その為の第一歩として私は感情を捨てた。人間を辞め、この身は聖杯を掴む為の器にした」

「ようこそ、ヘヴンズフィールへ。第三魔法を起動させますか？」

彼の前に立つ女性は天のドレスと呼ばれる特殊な礼装を身に纏っている。全身が純白のドレス。それに負けない程に彼女の肌も艶やかで美しい。腰まで流れるのも純白の髪の毛。そしてその瞳は赤い。だがそれだけ、彼女からは精気を感じられなかった。見た目がそうだけで彼女は人間ではない。

天草四郎は彼女の問い掛けに頷く。

「ああ、その為に私はここまで来た！ 私の願いを——」

「うきやきやきやきや！ 貴様の願いは叶わんよ！」

瞬時に刀を取り出す天草四郎は振り返ると同時に袈裟斬りした。だが刃は白刃取りの要領で止められてしまう。

だがその指に肉はなく、見えるのは全身が骨で形勢された人ならざる者。

「貴様……悪魔か？」

「如何にも。この膨大な魔力……人間風情が使うには持て余すだろ？
我が有効活用してやる」

「ッ!? 大聖杯が目的か？」

「今宵の願いは我ら一族の悲願を叶える為！ 今までに人間共から奪った魔力も全て使う！ 聖杯！ 貴様の魔力もだ！」

「止めろッ！」

力を込め刀を振り下ろすも悪魔はするりと避け、天草四郎の背後へ通り過ぎて行く。骨しかない手で羽織るマントを掴み、両手を大きく動かし漆黒のマントを広げた。

禍々しい魔力が瞬時に広がり、美しい草花は枯れ果て青空も暗黒に染まる。振り返る天草四郎は息を呑む。

「人間が作り上げた万能の願望機、我ら一族の野望の為に使わせて貰うぞ！ これだけの魔力があれば地獄の封印をも解ける！」

「わかりました。大聖杯の魔力を開放します」

「遂に！ 待ちに待ったこの時が来た！ 我ら一族の、魔界の悪魔達の悲願！ 魔帝ムンドウスの復活をオオオッ！」

第十五話 大聖杯の行方

聖杯に蓄えられた膨大な魔力が遂に開放される。

それは地獄の更に地の底へ封印された絶大なる力を持った悪魔の帝王。

——魔帝ムンドウス——

かつては自身の右腕であった魔剣士スパードに、そしてその息子であるダンテに破れた事で封印された存在。その魔帝が今、蘇ろうとしていた。

空間に亀裂が入り、それだけで感じる事すら躊躇われる程の魔力が感じられる。

天草四郎はその光景に思わず目を見開かせた。

「聖杯が……へブンズフィールが発動した……」

「おおッ!? 待ちに待ったこの時が来た! 魔帝が人間界へ降臨する!」

「この……悪魔めッ!」

刀を手にしたまま四郎は再び斬り掛かる。鋭い刃は纏う黒い布ごとと左腕を切断するが相手を倒すまでには至らない。

「もはや復活の儀式は止められん! 魔帝が人間界に——」

次の瞬間には悪魔の体がバラバラに四散した。現れたのは赤のランサー。

彼の巨大な槍の一突きにより悪魔を一撃の元に葬り去った。

「悪魔と語る舌は持たん。それよりも……魔帝か……」

「ランサーか? この状況でもまだ私をマスターとして扱うか?」

「そうだな。お前の手の上で踊らされた挙げ句、主を殺された恨みはある。だがそれでも今はお前がマスターだ。サーヴァントは自らの力を行使しマスターを守るだけだ」

「ならマスターとして最後の命令だ。令呪を持って命ずる。魔帝を討ち取れ!」

「了解、マスター」

右手の甲に刻まれた令呪の一面が光り輝き、赤のランサーである力

ルナに膨大な魔力が補充される。鋭い視線に殺気を漲らせるカルナはひび割れる空間に向かって飛んだ。

そして残る天草四郎が目指すのは大聖杯のみ。

「まだ魔帝が完全に復活し現界した訳ではない。大聖杯さえ取り戻せば……そして我が野望を成就させる。全人類救済の為に！」

天草四郎もカルナが飛び込んだ空間へとジャンプした。行き着く先は魔帝が支配する地獄か、四郎が理想とする新世界か、それとも――

第十五話 大聖杯の行方

広がるのは宇宙、無限にまで広がる闇。そこに奴は居る――

ドス黒く、赤く輝く三つの目。地の底から響き渡る声。存在そのものが恐怖と邪悪の塊。

「この気配は……人間か？ 下等なる存在が我が眼前にたたずむなど身の程を知れ」

「舐められた物だな。良いだろう。魔帝、全力を振るうに相応しい相手だ」

「まだ不完全なこの体でも貴様を消し飛ばす程度なら造作もない」
「やってみろ」

大槍を構えるカルナが掛ける。

闇の中で光る三つの瞳だけを見せる魔帝は自身の魔力をほんの僅かに開放させると周囲に暗雲を作り出し、強力な稲妻を発生させた。轟く雷鳴、無数の稲妻がカルナに襲い掛かる。

「つまらんな」

身を振り軽々と攻撃を避けて行くカルナ。空いた手を振り下ろせば四本の光槍を魔帝目掛けて飛ばす。

「梵天よ、我を呪え……ブラフマーストラ・クンダーラ」

カルナの持つ太陽の力で形成されたこの槍は強力な劫火により相手を焼き尽くす。切っ先が飛んで行き数秒、遙か先で膨大な爆発の炎が広がっているのが見える。が、魔帝と呼ばれる存在にダメージはな

い。

「ふはははッ、人間の力にしては有り余る物を持ってはいるが私を倒すまでには至らん。良いだろう、少しだけこちらの力を見せてやろう」

「舐めるなよ魔帝、俺とてまだ奥の手は残っている。それにまだ戦いは始まったばかりだ」

「ほざくか、人間風情が」

接近を試みるカルナ。だが大槍の切っ先を突き立てるには魔帝の距離はまだまだ遠い。見えてはいるのに、擬似的な宇宙空間と言う場所のせいで距離感が何倍にも膨らむ。

「やり方など幾らでもある。燃やし尽くす」

手を前に掲げれば炎の槍を何本も飛ばすカルナ。しかし魔帝の攻撃手段があれだけな訳がない。有り余る程の膨大な魔力で、無数の火球を撃ち出す。

ぶつかり合う槍と火球は小さな太陽かと思える程の強力な光と爆発を発生させる。

しかし両者の砲撃が止まる事はない。爆発の炎が光の玉となり数えきれない程に生まれる。

「このままでは罅が明かん」

「どうした人間？ 我が魔界に、そして人間界へ降臨する為の肩慣らしにもならんぞ？ もっと楽しませてみせろ」

「ほざけ」

三度、炎の槍を飛ばすカルナ。だが敵に届く前に巨大な鏡が出るとカルナの攻撃の全てを弾き飛ばしてしまう。

そして奥からは魔力で形成された赤黒い棘が向かって来る。新しい攻撃に反応するカルナは瞬時に回避行動に移った。

「流石は魔帝と言った所か。俺が全力で討ち取るに相応しい」

飛来する魔力の棘を大槍で横一閃し弾き飛ばす。尚も迫る棘も大槍を構え右へ左へ切り払う。そして隙を見て炎の槍を連続して飛ばす。

鏡によりまたも弾かれてしまうがカルナは構わず撃ち続けた。十

発、二十発、もつともつと数えきれない程。

どれだけの数を撃ち込んだか、耐えきれなくなった鏡が粉々に砕け散る。それを見て前に出るカルナだが、次の瞬間に、高密度の魔力のレーザーが飛来した。

「ッ!?!」

下から上へすくい上げるように飛ぶレーザー。反応が遅れてしまいうカルナは直撃を受けてしまい、動きが止まった所へダメ押しに赤黒い棘が無数に突き刺さる。

「どれだけ足掻こうと所詮は人間。さて……スパード、そしてダンテ。封印は解け、我が再び人間界に降臨する時が来た。まずはあの忌まわしき血族を抹消する。しかしまだ肉体が……魔力が不十分だ」

以前、マレット島でのダンテとの戦いに破れた魔帝ムンドウス。傷を負ったのもそうだが、深い闇の中で封印されていたせいで力もまだ完全ではない。それでも一度、人間界へ現れば誰が魔帝を止める事ができるのか。

「フハハハッ！ 力が戻ったその時が貴様の最後だ、ダンテ！ 幾分の時が経ったか……人間界を侵略する時が来た！」

／／／

空中庭園に現れた亀裂は言わば人間界とを繋げる門。その亀裂から魔帝の放つ一筋の魔力のレーザーが突き抜けて来る。それは空中庭園の壁や床を意図も容易く破壊し、一区間が瓦礫を撒き散らしながら地上へと落ちて行く。

庭園内で悪魔の足止めを受けていたダンテ達の所にまでレーザーは貫通し、突如として飛来した強力な一撃にシェイクスピアの体が貫かれる。

「なッ!? このような呆気ない幕切れ！ 我輩は！ 我輩は——」

戦闘能力の乏しい彼が知らないとは言え魔帝の一撃を耐え抜くだけの能力はなく、体が光の粒子となりダンテ達の前からあっさり消えていった。

次の時に庭園内に大きな揺れが発生し、ダンテは銃をガンホルダーに戻すと眉をひそめる。

「どうやら不味いことになってるみたいだな。どうだデンジャラスガール、もう動けるか？」

「舐めんじゃねえよ。サンキュー、マスター。令呪のお陰で助かった。で、コイツはどう思う？」

「さあな、だがダンテの言う通り不味いことは確かだ。急いでルーラーに追い付くぞ」

三人は最深部目掛けて走り出す。

一方で先行して最深部へと向かっていたジャンヌの足も巨大な揺れにより止まっていた。天井からこぼれ落ちる砂埃、周囲を確認する彼女は警戒心を高める。

「何です!?! 大聖杯が発動したとは思えません。もしや悪魔が? 急がなければ」

通路を駆け抜けるジャンヌ。その先にある最深部の巨大な扉を見つけると勢いをそのままにこじ開けた。

ジャンヌは目の前に広がる光景を見て思わず目を見開く。

「コレは?! 一体何が……悪魔が狙っていたのはこのことですか」

亀裂を前にして呆然と立ち尽くす。だが異常な現象が起きていることは確か。即座に意を決すると地面を蹴り亀裂の中へ飛び込んだ。広がるのはどこまでも無限に拡大する闇。

「固有結界……とは少し違いますね。ですがこの禍々しいまでの魔力は……」

視線を向けた先に見えるのは負傷したカルナの姿。急いで駆け付ける彼女はその手を彼の肩に添える。

「ランサー! 何が起こっているのです? 天草四郎は? それにこの傷……待っていて下さい、すぐに——」

「手出しは無用だ、ルーラー」

「ランサー?」

「経緯はどうであれここは俺と奴との決戦の場。誰であろうと邪魔立ては許さん」

体を赤黒く巨大な棘で貫かれたまま答えるカルナ。睨み付ける視線は更に殺気を漲らせ、胸に埋め込まれたルビーが眩しく輝きを放ち

膨大な魔力を放出させる。

「魔帝よ、貴様を討ち取るには俺の全力を撃ち込むしかない。心して見よ……絶対破壊の一撃を……」

全身を纏う黄金の鎧が弾け飛び、そして太陽が生まれる。

カルナを中心にして計測不能な量の魔力が炎となり、それはまるで太陽の如く。

背中には赤い羽根の装飾が現れ、右手に握る大槍を天高く掲げた。

「神をも葬り去る一刺を受けよ！ 焼き尽くせ！」

黄金の大槍の形状が同時に変化する。雷光で作られた漆黒の大槍。あらゆる存在を焼灼させる必滅の槍であり、魔帝を倒す為に開放された究極の一撃。

それが今、放たれる――

「ヴァサヴィ・シャクテイ！」

太陽が爆発する。見渡す限りに炎の濁流が渦を巻き、全ての物を飲み込み消滅させ灰すら残さない。並のサーヴァントならこの宝具を目にする事もない、絶対破壊の一撃。

それは世界さえも焼き尽くす程に強力無慈悲。

燃え盛る太陽を前にジャンヌは腕で顔を隠し何とか前を見るのでやっと。

「これがランサーの宝具……固有結界を形成しているのが魔帝と呼ばれる存在ならば、彼の宝具を受けて結界も消える筈です」

だが彼女の予想に反して周囲の宇宙空間が途切れる事はなく、聞こえてくるのは魔帝の不気味な笑い声。

「フハハハッ！ 不完全な体とは言え我に傷を与えるか。人間風情にしては良くやった」

「そんな!?! アレを受けてもまだ……魔帝とはそれ程までの存在なのですか？」

「だが忌まわしい……私の創造の力を使ったと言うのに傷を受けるとはな。目障りな人間共よ、我が力の前に消え失せろ！」

「ランサー、魔帝が来ます！ 動けますか？」

魔帝の力により渦巻く太陽の炎が次第にかき消されていく。

ランサーは体にダメージはないが、纏っていた黄金の甲冑は先程の
宝具発動の為に消えてしまっていた。これでは魔帝の攻撃を受けて
しまえばひとたまりもない。

「愚問だな、ルーラー。究極の技をもう一度奴に撃ち込み殺し切るま
で」

「しかし……」

「俺の心配は無用だ。それよりも巻き込まれないように自分の心配で
もしている。来るぞ……」

強大でドス黒い魔力の塊。ジャンヌが目を見開く先で遂に魔帝は
本来の姿を表した。

血と肉で形成された形を持たぬスライムのような体、受けた傷口か
らは高濃度の魔力と共にマグマが吹き出している。そして血走った
三つの巨大な眼球がカルナとジャンヌを見下ろして来た。

「逃げられるなどと思うな。貴様らはここで殺す！」

「逃げるなど端から考えていない。それよりもようやく本性を表した
な」

「これが地獄を統める魔の帝王……このような醜き存在……」

「消え失せろッ！ 人間共！」

禍々しい魔力の流動を感じ警戒するジャンヌ、一方でカルナは宝具
をもう一度放つべく眼の前の敵を鋭い目付きで睨む。

「ランサー、魔帝は危険な存在です。現界すればどれだけの被害が出
るのか想像も付きません。ここは協力して——」

「くどい、奴は俺が倒す。行くぞ魔帝、これが最後の一撃だ！」

再び太陽を発生させるカルナと強大な魔力を更に増大させていく
ムンドウス。光と闇が今まさにぶつかり合う。

「私は私の使命を果たします！ 主の御業をここに！ 我が旗よ、我
が同胞を守りたまえ！」

ジャンヌはここまですつと握って来た旗を初めて広げた。皇太子
の傘下である事を示す白き旗には黄金の刺繍が施されている。

けれども普通の旗ではない。それはサーヴァントである彼女の宝
具。

発生する魔力は輝く粒子となりジャンヌの周囲を漂う。聖処女と呼ばれる彼女が持つ、天使の祝福により自身と周囲を保護する結界宝具。

揺れる旗を天高く掲げるジャンヌはその宝具の名を叫ぶ。

「リユミノジテ・エテルネツル！」

粒子は光のカーテンとなりジャンヌ、そしてカルナを侵食する闇から守る。

「どう言うつもりだ？」

「この戦いは必ず勝たなくてはなりません！ 私の言う事を聞けないと言うのなら、ルーラーとして令呪で命令しますよ！」

「……いいや、無理だな」

「えっ？」

ランサーは自らジャンヌの結界宝具の範囲外に出してしまう。それに驚くジャンヌはすぐにでも背中にも刻まれた令呪の一面を使おうとするも、光と闇の戦いは早急に決着が着く。

宇宙の中に太陽は生まれた。太陽が燃え尽きようとも宇宙は無限大にまで拡大を続けている。それを止める術はなく、光は闇の中に葬られた。

「ランサー！ 諦めては成りません。ランサー！」

「どうやら俺はここまでのようだ。だが魔帝との戦いが終わった訳ではない。希望ならまだ残っている」

カルナの肉体が跡形もなく消滅していく。彼が消え逝くのを見ている事しかできないジャンヌだが、その瞳には彼の魂を引き継いでいる。

「造作もない。人間が我に盾突くなど」

「魔帝よ！ 貴方の思い通りにはさせません！」

「貧弱な女が一人居た所で何になる？ お前もあの男と同じ、ここで殺してくれる！」

ムンドウスのグロテスクな触手が手のように伸びて来る。槍を構えその切っ先で貫かんとするジャンヌだが、彼女が動くよりも早く轟音が響き渡ると目の前で触手がバラバラに吹き飛んだ。

むき出しの三つの眼球が見る先に居るのは宿敵であるあの男。

「来たか、スパルダの血族！」

「オイオイ、起きるにはまだ早いぜムンドウス」

真紅のロングコートを靡かせて、ジャンヌの元へダンテと赤のセイバーが現れた。

「ダンテ！ セイバーまで！」

「下がってな、コイツは俺がやる。因縁浅からぬ相手って奴だ。聖杯戦争とも関係ねえしな」

「しかし、貴方一人では……」

「心配すんな。一度戦って勝ってる。それよりもお前は聖杯を何とかしたいんだろ？ そっちの方は任せる」

ダンテとムンドウス、二人を交互に見たジャンヌは即座に意を決する。何も言わずに頷きこの場を後にした。

「デンジャラスガール、お前も向こうに行ってる」

「うるせえ、テメエの指図なんて受けるか。それよりもこのバケモンは何だ？」

「しつこい敵だよ。魔界の帝王だった野郎だ」

「帝王だって？ だったら益々ぶっ倒さねえとな」

言うときセイバーは大剣の切っ先をムンドウスへと突き付けた。

「我が名はモードレッド！ 王を討つ叛逆の騎士！ 魔界の帝王、俺が倒すのに充分な相手だ」

「また人間か、下等な種族に構っている暇はない」

「下等だとお？ 舐めてんじゃねえぞ！」

剣身に赤い稲妻を発生させ大きく振りかぶる。轟音を響かせながら進む稲妻はムンドウスに直撃するが、その体にダメージは通っていない。

「フハハハッ、むず痒いわ。消え失せろ」

強力な火球を無数に撃ち出すムンドウス。セイバーは高い対魔力を持っているが、それはどこまで行っても対サーヴァントを想定した物。魔帝の直撃を受ければどうなるかは想像に容易い。

セイバーが避ける体制に入る間もなく――

「でやあッ！」

赤黒い魔力の波動が飛ぶと全ての火球を斬り落とした。
ムンドウスの眼球がギョロリと動いた先ではリベリオンを肩に担ぐダンテが居る。

「オイ、無視するなよ。さすがの俺も悲しいぜ」

「ダンテ！ スパーダとの因縁をここで断つ。魔界も人間界も全て我の物だ！」

「良いぜ、そうこなくっちゃな！ 派手に行くとするか！」

ダンテの体から膨大な魔力が渦巻く。魔帝同様に禍々しく、ドス黒い強力な魔力がセイバーの隣で文字通り爆発した。

思わず後ずさるセイバー。見開く瞳の前に居るのはコートを着た男の姿ではなくなっている。

甲殻類や爬虫類を思わせる全身の赤い鱗。手足に生える鉤爪、銀色の髪の毛は逆立ち、鋭い瞳は見るだけで相手を怯ませる。

溢れ出る赤黒い魔力は禍々しいだけでなく確固たる強い意思を感じさせた。

「お前……悪魔なのか……」

「体質でね。それよりも向こうを何とかするぞ。叛逆の騎士様」

「ケツ、言われるまでもねえ。あのグロテスクな野郎は俺がぶつ倒す」

「悪いが主役は俺だ。見せ場はくれてやれねえな」

言うどダンテはリベリオンを振り下ろした。刃からは強力な波動が飛びムンドウスの体を傷付ける。

「ダンテ！ 魔界の帝王たる我が力にひれ伏せ！」

「うるせえよ、いつか見た時と比べて随分ズタボロに見えるけどな。そんなんじや俺は倒せねえ」

ダンテは更にリベリオンを振り下ろす、斬り上げて体の回転を加えて袈裟斬り。受けるダメージから体液とマグマが吹き出る。

「スパーダの力を持たぬ貴様にもう一度やられる我ではない！」

「だったらやってみな？ だが今回は俺だけじゃねえ」

「ハアアアッ！」

飛翔するセイバーがムンドウスの眼球目掛けて白銀の刃を振り下

ろす。赤い魔力を纏う一撃、だがカルナの宝具ですら耐え抜いた魔帝にそのような攻撃は受け付けない。

伸びる触手はセイバー渾身の攻撃を容易く受け止め、更に伸びる触手がセイバーの脇から襲い掛かる。

「ッ!?!」

魔力を放出し赤雷で身を守ろうとするが、セイバーの対魔力を遥かに上回る触手は鎧に接触し稲妻を流し込む。

「あゝあゝ あゝ あああッ!?!」

「雑魚に用はない。消え失せろ」

「死ねるかよ!」

体を守る為の鎧を脱ぎ捨てるセイバー。何とか攻撃から脱出するが、上半身には赤のチューブトップしか着ておらず肩や腹の肌を露出した状態。

後がないにも関わらずセイバーの口元は不敵に釣り上がる。

「舐めんじやねえって言っただろ! やれ、ダンテ!」

「ぶっ飛びな!」

肉薄するダンテは魔力で真っ赤に光るリベリオンでもう一つの眼球に斬り付ける。刃が肉を切断し、同時に波動が内部をズタズタに破壊した。

「まずは一つ! 飛ベツ!」

次の目標に狙いを定めリベリオンを投げ付ける。咄嗟に触手で防ぐムンドウスだが、切っ先は肉を貫き二つ目の眼球に突き刺さった。

「グオオオッ!?!」

「行け、モードレッド!」

「言われるまでもねえ! ダメ押しだ!」

モードレッドが握る大剣の鏢が変形し、膨大な赤い魔力が放出される。リベリオンが突き刺さる眼球へ向って、自身が持つ最大威力の宝具を放つ。

「クラレント・ブラッドアーサアアッ!」

赤い魔力の波動が唸りを上げながら一直線に突き進み、リベリオンの柄を押し込むようにして直撃した。肉を貫き貫通するリベリオン

と内部を爆発させて破壊するモードレッドの宝具。肉片とマグマが飛び散り周囲に衝撃が走る。

リベリオンはそのまま回転しながらダンテの手元へと戻って来た。

「つと、へへ……どうだ、少しは効いたか？」

「ハハハハハッ、まだまだ足りん。もつとだ、持てる物全てを寄越せ」「あん？」

破壊した筈の細胞組織が見る見る内に回復していく。ダンテの隣に降り立つモードレッドもやつとの思いで通した攻撃が効いてない事に驚きを隠せない。

「どう言うことだよ？ 一回倒したことがあるんだろ？」

「聖杯か、封印を解いたのもそれだな」

「つてことはルーラー頼み……」

「待つのは性に合わねえ……だろ？」

「当たり前だ。ルーラーの方は俺が行く。あのゲテモノ野郎は――」

「俺の仕事だ。行くぜ」

モードレッドは聖杯の元へと急ぎ、ダンテは魔帝と対峙する。

最終話 英雄

鮮やかに咲き誇っていた花々は枯れて朽ち果てている。広がる暗雲、そんな中で白い衣装は酷く浮いている。

歴代の魔術師達が集めた魔力の結晶、万能の願望器である大聖杯は今や悪魔によりその能力が使われ役目を果たそうとしていた。

力なくぶら下がる両腕、焦点の定まっていない眼。立つ事すらできなくなつた時、彼女が消える時。

天草四郎はそんな彼女の元へ必死の思いでやって来た。

「はあ、はあ、はあ、大聖杯！ 私の願望を叶えろッ！」

走り寄る彼は地面に膝を着くと死に体の彼女へ縋り付いた。白い衣装を纏う彼女の体を力一杯指で抑え込む。彼の言葉はちゃんと耳に届いたのだろうか。数秒遅れて頭を動かす彼女はゆっくりと唇を動かした。

「残る魔力は十パーセントにもなりません。大聖杯として現状を維持するのも困難です」

「そんな?! いや……器が残っているなら魔力はまた溜め治せる。何百年掛かろうとこれだけは！」

「そうはさせません、天草四郎！」

振り返った先に居るのは鉾を向けるジャンヌの姿。

さつきまで大聖杯に懇願していた天草四郎は立ち上がると、その瞳も鋭い元へと変わっていく。

「驚いた、ここまで来たのですね」

「貴方の野望は潰えました。この光景……大聖杯にもはやその力は残っていない」

「確かにそうです。ですが私の野望が潰えた訳ではない。器はまだ残っている」

「貴方と言う人は！ 人類救済などと、そのような願いは間違っています！ 私達サーヴァントは——」

「もはや話し合う段階は終わっている。まだ私の前に立ち塞がると言うのなら、互いの刃を交えるしかない」

言うのと四郎は腰の刀を抜いた。言葉はもう通じない。

覚悟を決めたジャンヌも旗の柄を地面に突き立て、腰の剣に手を掛ける。瞬間――

「その必要はねえぜ」

「え……」

赤い影が飛んで来ると刀を構える四郎と激突した。刃と刃がぶつかり合いギリギリと音を立てる。

襲撃に対して瞬時に反応した四郎ではあったが、眼前の相手に怒号を飛ばす。

「セイバアアアツ！　ここまで来て私の邪魔を！」

「当然だ！　聖杯戦争はサーヴァントが一人になるまで戦い合う。テメエだってこの聖杯戦争に参加してるんだ。だったらぶつ倒すだけだ！」

「度し難い！」

セイバーを押し返す四郎。一旦距離を離す両者だが一対一での戦闘能力ではセイバーの方が上。地面を蹴り再び距離を詰めると素早く袈裟斬り。

迫る白銀の大剣にどうにか動きを合わせるので四郎は精一杯。

斬り上げて袈裟斬り、逆袈裟斬り、もう一度振り下ろす。が、切っ先は地面を突く。

近接戦闘では勝てぬと見た四郎が後方へ飛び退いた。それを見てセイバーも大剣を肩に担ぐ。

「へへ、大層なことを言った割には俺の方が強いみたいだな。けど時間もねえからよ、一瞬で終わらせるぜ」

「くっ！　こんな所で終わらせる訳にはいかないんだ！」

魔力を放出させるセイバー、大剣の鏢が変形し必殺の宝具を叩き込むつもりだ。一方の四郎は刀を自らの右腕に添える。

「腕を捨てるくらい！　右腕・零次収束！」

刃が右腕を斬り落とす。それは同時に彼の魔術回路を切断し、膨大な魔力が暴走する。

「クラレント・ブラッドアーサーッ！」

同様にモードレッドも必殺の一撃を放つ。強力な赤い魔力の波動が唸りを上げ一直線に天草四郎に向って突き進む。が、必殺の一撃にはなりえなかった。

四郎の前には斬り落とした腕を媒体とし疑似ブラックホールが発生し全てを飲み込んでいく。

「何だよ、そりゃー！」

「ここで聖杯を失う訳にはいかない！ 私の体に変えても聖杯だけは、人類救済は！」

「だったらまともめてぶつ飛ばす！ うおおおッ！」

更に魔力を高めるモードレッドと、それを飲み込まんとする天草四郎。衝突する魔力の流動に空間が歪み、枯れた草花が四方八方に飛び散る。

瞬間、両者の技は衝撃となつて弾け飛んだ。まるで爆発が起きたかのように天草四郎とモードレッドも後方へ吹き飛ばされる。

後退りながらも着地する四郎は直ぐ様正面に刀を構えると、そこには拳を振り被るモードレッド。

「貫ったあああッ！」

「何がー！」

顔面に叩き込まんとするモードレッドの強烈な右ストレートを首を傾げるだけで躲す。隙かさず握る刀で腹部を突こうとする。が、四郎は目を見開き動きを一瞬止めた。

（何故両手が空いている？ 剣は――）

周囲を警戒するがそんな物はどこにも見当たらない。

当然だ。モードレッドが狙っているのは天草四郎ではない。

「まさか!?」

「よそ見してんじゃねえよー！」

頭部を狙ったハイキックが迫るが四郎は残る左腕でこれを受ける。しかし強力なキックに耐えられず刀をこぼしてしまふ。だが今はそんな事を気にしている暇はない。

地面を蹴り、天草四郎は彼女の前に飛び出た。

「止めろッ！」

見えるのは彼女、聖杯目掛けて一直線に飛ぶ白銀の大剣。聖杯を守らんと立ち塞がる天草四郎だが、弾丸の用に突き進んで来る切っ先に腹部を貫かれる。それでも勢いは止まらず、背中まで突き抜ける血糊が付いた剣身が四郎の体を飛ばす。その先にあるのは聖杯――

「ぐうッ!? 止める……聖杯は……聖杯だけは……」

二人の体をまとめて貫くモードレッドの大剣。聖杯が纏う純白の僧衣は天草四郎の血で汚れてしまっている。そして天草四郎も、自らが斬り落とした右腕と暴走させた魔術回路、モードレッドの一撃を受けてもはや死に体。

残る手を大剣の柄に伸ばし必死に引き抜こうとするも、血反吐が溢れるだけでそれだけの力も残っていない。

「終われない……こんなことで……聖杯は……」

「上手くいったぜ。吹っ飛ばされた時、咄嗟に思い付いた戦法よ。柄を地面に突き立てて地面越しに魔力を流し込んで遠隔操作で剣を飛ばす。なかなか良いじゃねえ……か」

天草四郎に詰め寄るモードレッドは大剣を引き抜き肩に担いだ。その拍子に四郎は力なく仰向けに倒れ込むも、聖杯は生気のない瞳で俯向いたまま。

「向こうはどうなってる?」

見る先は魔帝と戦うダンテ。

魔人化したままのダンテはもう何本目かの触手をリベリオンで叩き斬った。モードレッドの声を耳にすると元の人間の姿へと戻りながら後ろに振り向く余裕さえ見せる。

「終わったのかデンジャラスガール?」

「当たり前だろ? そっちもさっさと終わらせろ」

「わかってるよ。おい、ムンドウス! ここらで決着付けようぜ!」

ガンホルダーからエボニー・アンド・アイボリーを取り出すダンテは両腕をクロスさせ二の銃口に魔力を集中させる。赤い魔力が収束し、ムンドウスのむき出しの眼球の一つに狙いを定めトリガーを引こうとしたその時、伸ばされる触手が左手の銃を弾き飛ばした。

「ツと――」

「何やってんだよー！」

飛び出すモードレッドが溢す銃、アイボリーをキャッチしダンテと肩を並べる。横並ぶ二人、その口元は不敵な笑みで釣り上がっていた。

「終わらせるんじゃないのか？」

「そうだよ。ここが見せ場だ、邪魔すんじゃないぞ」

「だったら——」

ふと気配を感じ取り振り返る。視線を向ける先では片腕を失い、溢れ出る血で塗れた天草四郎が無反応のまま立ち尽くす聖杯に手を伸ばしていた。

「ほんの僅かでも……魔力が残っているのなら……わた……願い……」

残る魔力を絞り出し魔術回路から流し込む。深々と空いた腹部の傷がジワジワと回復していく。遠目からそれを眺めるモードレッド。

「アイツもなかなか往生際が悪いな」

「その銃はそっちに使いえ。合言葉は知ってるか？」

「知るかよ。でも今だけは付き合ってる」

互いに背中を合わせる。ダンテは魔帝を、モードレッドは天草四郎を。

右腕を伸ばし照準を合わせる二人は白と黒の銃のトリガーを同時に引いた。激しいマズルフラッシュと共に収束された魔力弾が飛ぶ。

『ジャックポットッ！』

二人の声が重なった。

虹色に輝く魔力弾は狙った方向へと飛んで行き、ムンドウスに撃ち込まれた弾は魔帝を再び地獄の底へと封印する。ブラックホールの用にスライム状のムンドウスの体が飲み込まれていく。

「ぐお、お、お オオオッ!? まだだ！ アレさえ使えるのならまだ！」

「残念だったな。それはナシだ」

ダンテが言うモードレッドにより放たれた魔力弾が天草四郎の後頭部を貫いた。風穴が空き、力なくうつ伏せに倒れ込む。そして着

弾点を起点とし封印の扉が開かれる。

天草四郎と聖杯、二人は開かれた闇の中へ飲み込まれていった。その先はどこへ続いているのか。彼の姿は一瞬で見えなくなる程遠くに行き、聖杯も彼と共にどこかへと消えていく。

聖杯が失われた今、その力も失われる。魔帝ムンドウスは満足に抵抗すらできず、彼らと同じ場所へ飲み込まれていく。

「ダンテ、忘れるな！ 世界を覇するのはこの我だ！ 必ず現界してみせるぞ！」

「あばよ！ おとなしくまたお寝んねしてな」

「お、お、お、オオオツ!!」

最終話 英雄

魔帝が消えた。それは固有結界が消える事と同意義であり、宇宙空間に居たダンテ、モードレッド、ジャンヌは元の空中庭園の最深部へ戻って来た。

その事に胸を撫で下ろすジャンヌ。

「終わったんですね。悪魔の驚異も、聖杯大戦も……」

静寂とした空気が広がる。それは晴ればれとした空のように。時を同じくしてセイバーのマスターである獅子劫もやって来る。

「良くわからんが……聖杯はどうなった？」

「天草四郎はもうこの世に居ません。共に聖杯もこの世から消えました。二度と聖杯戦争が開かれることもないでしょう」

「それはあ……つまり？」

「私も現世から去る時が来たようです。この体も彼女に返さなければ」

ジャンヌが言う事をするには理解できない。一方で彼のサーヴァントであるモードレッドは握る銃を人差し指でクルクル回しながら、持ち主であるダンテに返す。

「ほらよ、お前のだろ？」

「サンキュー、一応愛着は持つてるからな」

「ダンテ、聖杯戦争のルールは知ってるか？」

銃を受け取るダンテはガンホルダーに戻しながら眉間にシワを寄せる。

「そう言えば最初にお嬢ちゃんから聞いたな。で、それがどうした？」
「聖杯戦争は最後に残った魔術師とサーヴァントが勝利し、聖杯を手にして願いを叶える。聖杯はなくなっちゃったが聖杯戦争が終わった訳じゃねえ。ここにはまだサーヴァントが二人居る」

白銀の大剣を手取るモードレッドはその切っ先をルーラー、ジャンヌ・ダルクへ突き付ける。

ダンテも背中のリベリオンを手にし、モードレッドとジャンヌの間に割って入った。両者の鋭い視線が交わる。

静寂とした空気は一変して緊張感と殺気が充満する空間へと変わってしまう。ジャンヌは二人の戦いに異議を唱える。

「待って下さい！ 二人が戦う必要なんて——」

「止めとけ、セイバーは言い出したら聞かないんだ」

「マスターとして、貴方はそれで良いのですか？」

「そうだな……セイバー、マスターとして最後の言葉だ。令呪を持つて命ずる、存分に戦え！」

獅子劫の左手に刻まれた最後の令呪の一面が光り輝きモードレッドに力を与える。もう戦いは避けられない。

思わずジャンヌは獅子劫を見るが、彼はサングラス越しにモードレッドの行く末を見るだけだ。そしてダンテも、モードレッドの視線の先から動くつもりはない。

「ダンテ、貴方も——」

「逃げるのは趣味じゃないんでね。それにお嬢ちゃんをガードするのが俺の仕事だ」

止める事はできない。互いに剣を握りゆつくりと歩を進める。

ジャンヌと獅子劫も視線を向けながらもその場から後退して行き、庭園最深部の中央でダンテとモードレッドは再度視線を交える。

「デヤアツ！」

「ハアツ！」

振り下ろされる二本の剣がぶつかり合う。甲高い音が響き渡り、鏢迫り合いで刃がギリギリと鳴る。

「どうした？ 本気出せよ」

「テメエだって！ あの時みたいに魔人になってみるよ？」

「生憎と燃料切れでね」

「だったら俺が勝つ！」

剣を弾き距離を離すモードレッド。そして息を呑み構えるとまた踏み込んだ。袈裟斬り、横一線、袈裟斬り、刃が交わる度に火花が散る。

ダンテも得意のチャンバラでモードレッドの攻撃を防ぎつつ、一瞬の隙を付き斬り上げる。が、向こうも巧みな剣術でこれを防ぐ。

だが攻撃の手は緩めない。リベリオンを引き、足と腕の筋肉をバネのように使うダンテは至近距離から強力な突きを繰り出す。モードレッドも負けじと魔力を開放し赤雷を帯びた突きを繰り出した。

「ぶっ飛べー！」

「やられるかよー！」

衝突する切っ先。あまりの衝撃に互いの手から剣が弾け飛び、高速回転しながら真上に飛んで行ってしまふ。

けれども武器を手放そうとも戦いは止まらない。間髪入れずモードレッドは拳を突き出し腹部に叩き込む。ダンテもカウンターで掌底を繰り出す。

「うらアアアッ！」

魔力を開放しているモードレッドの腕にも赤雷が帯びており、分厚いコンクリートを砕く程の強力なパンチがボディにめり込む。だがダンテの掌底も素早く、モードレッドの頭部にクリーンヒットする。吹き飛ぶダンテとモードレッド。

空中で回転しロングコートを靡かせるダンテはすぐに体勢を立て直し相手に詰め寄る。一方のモードレッドは両足で全力でブレーキを掛け衝撃を相殺させた。

「クッ!? 野郎……」

「まだまだ行くぜー！」

「なッ!?!」

見上げればすぐ先にダンテの姿が。急降下しつつ蹴りを繰り出す。咄嗟に飛び退くモードレッド。数秒後にはさつきまで立っていた石畳が碎ける。着地したダンテは周囲を見渡すが、相手の姿は見当たらない。

「あん?」

「今度はこっちの番だ! くらいやがれッ!」

声がるのは上から、弾け飛んだ二本の大剣を手にしたモードレッドが急降下しながら振り下ろして来る。

避けるダンテ。振り下ろされた刃の衝撃で粉碎される石畳と舞い上がる土煙。

右手には自身の宝具であるクラレント、左手にはダンテのリベリオンを持つモードレッドはゆっくり歩を進めて来る。

しかしダンテはこの状況でも笑みを崩さない。

「つと……へへ、やるな」

「余裕かますのもここまでだ。ぶった斬るッ!」

「やってみな?」

「うお、お、お、オオオッ!」

走るモードレッド、切っ先が届く距離にまで詰めると剣を、両腕を連続して振りまくる。連続して繰り出される激しい斬撃。素手のダンテは二度三度と体をよじり攻撃を避けるが、一秒の間に無数に放たれる斬撃に初めて自らの意思で後退、バク宙して更に後退した。

モードレッドの攻撃が届かない距離にまで下がり、ガンホルダーからエボニー・アンド・アイボリーを取り出す。

「派手に行くぜ!」

激しいマズルフラッシュ、弾丸がマシンガンから発射されたかのように無数に撃ち出される。二本の剣を駆使して迫る弾丸を斬り払う。ダメージを受ける事はないが、止めどなく来る弾丸の雨に距離を詰めない。

「クソッ、しやらくせえ!」

もう何度目か、赤雷をクラレントに帯びさせて斬撃を飛ばす。飛翔

する赤雷は弾丸を消し飛ばしダンテに襲い掛かる。

避けると同時に飛び上がるダンテ。モードレッドの斬撃が来るよりも早くに空中で相手の肩を足場にしてもう一度ジャンプする。一瞬崩れる姿勢、すぐに振り返れば二つの銃口。

「俺を踏みやがった!？」

「悪いが剣は返して貰うぜ」

連続して発射される弾丸。リベリオンの剣身を盾のようにして受ける。ダンテの狙いはそのリベリオン。弾丸は弾かれる事なく剣身にぶち当たり、そして積み木のように次々と弾丸が積み上がっていく。最後の一発が乗った時、モードレッドの手からリベリオンが溢れる。

「くッ！ でもなあ！」

「行くぜ、デンジャラスガール！」

「俺を女扱いするなッ！」

リベリオンの鏢にあるドクロの目が不気味に赤く光り、落ちた地面からダンテの手元にまで戻って来る。そして両者は勢い良く走り出し互いの剣で振りかぶった。

斬撃、衝撃、轟音が響く。

地面を蹴り距離を取るモードレッドは魔力を全開にして必殺の一撃を放つ。

「クラレント・ブラッドアアアサアアッ！」

一方のダンテもリベリオンに魔力を流し込み強力な一撃をぶつける。

「オーバードライブ！」

波動と波動が直撃し膨大な魔力が爆発する。広がる衝撃に二人の戦いを見ていたジャンヌと獅子劫も思わず腕で顔を覆う。

「うう………凄………決着は!？」

「セイバー………」

ようやく衝撃が収まり視線を向ける二人。ダンテとモードレッドは鋭い突きで切っ先を交え、その体勢のまま固まっていた。

「はあ………はあ………中々やるな、デンジャラスガール。いや、モード

レッド」

「どこまでもムカつく野郎だ。俺は叛逆の騎士だぜ？ お前なんかより俺の方が強い」

「へへ、楽しかったぜ」

リベリオンを肩に担ぐダンテ。モードレッドも白銀の大剣を地面に突き立て、ダンテに背を向けたまま口を動かす。けれどもその足元から光の粒子となり体が消えていく。

「なあダンテ……俺の方が強かったよな？」

「勝負したいならいつでも相手になつてやるよ。また俺が勝つけどな」

「何だよ、こう言う時は嘘でも強いって言うんじゃないのか？」

「最後に嘘付かれても後味が悪いだろ？ またな」

「ああ……お前との勝負、楽しかったぜ」

両足が消え、それでも最後に振り返るモードレッドは自身のマスターである獅子劫界離に視線を向けた。

「マスター……ありがとう……」

「お前は良いサーヴァントだったよ。達者でな」

最後に向けられた笑顔を獅子劫はいつまでも見続けた。

／／／

フランスの首都であるパリ。既に月は沈み、燦々と輝く太陽が登る。

築五十年にもなる学生寮、一度はリフォームされて綺麗にはなっているがどこからか隙間風が入って来る。

十七歳になる少女、レティシア。彼女は朝の日課であるお祈りを済ませると急いでカバンにノートを入れ始めた。そうしている間にも部屋の外では同級生が扉越しに急かし立てる。

「早くしないと試験遅れちゃうよお？」

「ごめんなさい、すぐに！」

「一時限目はアンタの苦手な数学だよ？」

カバンを手に取り扉を開けるレティシアは挨拶もそこそこに寮の廊下を走り始めた。

「夜まで勉強してて寝過ぎすだなんて!？」

「旅行行くのは良いけど試験不安なんだったら少しは——」

「話すと長い事情があるの!？」

寮の扉を勢い良く開けるレティシアはそのまま同級生と横並びで歩道を駆けて行く。

見慣れた町並み、空気、日常がそこにある。

(あの後、私の体から聖女ジャンヌ・ダルクの憑依も解けました。聖杯戦争も終結し、私は元の生活に戻りました。ボディーガードの依頼をしたダンテさんもすぐにアメリカへと帰って行き、心配だった依頼料も思った程高くない、むしろレンタカー代が痛手でした。しばらくはランチを節約しないと……聖杯はもうこの世から消えた。魔術師による聖杯戦争ももう起こらない。でも悪魔は……常識では理解できない摩訶不思議な現象は世界のどこかで起きている)

／／／

ギターケースを片手に空港のロビーを歩くダンテは適当なイスを見付けるとドカッと体重を預けた。

「やれやれ、何だって日本になんか寄らなきゃいけないんだ。つたく、飛行機のメンテぐらいしとけよな」

ダンテはアメリカまでの直行便で帰るつもりだったが、途中で乗っている飛行機の計器トラブルにより日本に着陸する事になった。

そうして不満を垂れていると、ハイヒールのカツカツ鳴る足音が近づいて来る。横目でちらりと見れば、少しシワ付いたスーツを着る、美女、が居た。

彼女は掛けていたメガネを取り、くすんだ赤のポニーテールを揺らし琥珀色の瞳をダンテに向ける。

「アンタがデビルハンターのダンテか？」

「誰だ？ 日本人の知り合いなんて居ないんだけどな」

「ちよつと訳ありだね。アンタに仕事を受けて貰いたい。金は……なんとかしよう」

「合言葉は？」

「悪魔も泣き出す」

「OK、美女からの誘いなら大歓迎だ。金は円じゃなくドルで用意しろよ。あとは前払いでキスの一つでも貰おうか」

「悪いけどオッサンは趣味じゃないんでね」

「そりゃ残念だ。だったら——」

立ち上がるダンテはギターケースからリベリオンを取り出し背中に背負う。そしてガンホルダーからエボニー・アンド・アイボリーを取り出す。

同時に周囲からは不気味な蠢く声が聞こえて来る。

『ダンテエエツ！ 逆賊スパイダーの息子！』

『あギヤギヤギヤはははッ！ 魔帝の仇！ 逆賊スパアアア
ダアアアッ！』

それは悪魔——

ダンテは自らを狙う悪魔を倒す事を仕事にし、人間としての生を満喫する半人半魔の存在。彼はこれからも戦い続ける。悪魔を倒す為に——

「前金はコイツラをぶつ倒すことでチャラにするか」

「これが悪魔か……お手並み拝見といこうじゃないか」

「準備は良いか？ C, m o n b a b e s ! L e t , s r o c
k ! 」